

總社古墳群總括報告書

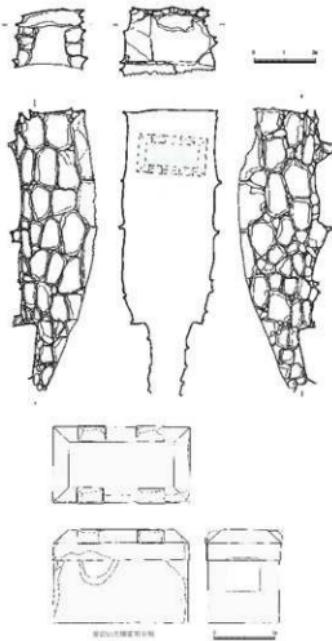
總社古墳群總括報告書



前橋市教育委員会
2023

前橋市教育委員会
2023

総社古墳群総括報告書



2023.9

前橋市教育委員会



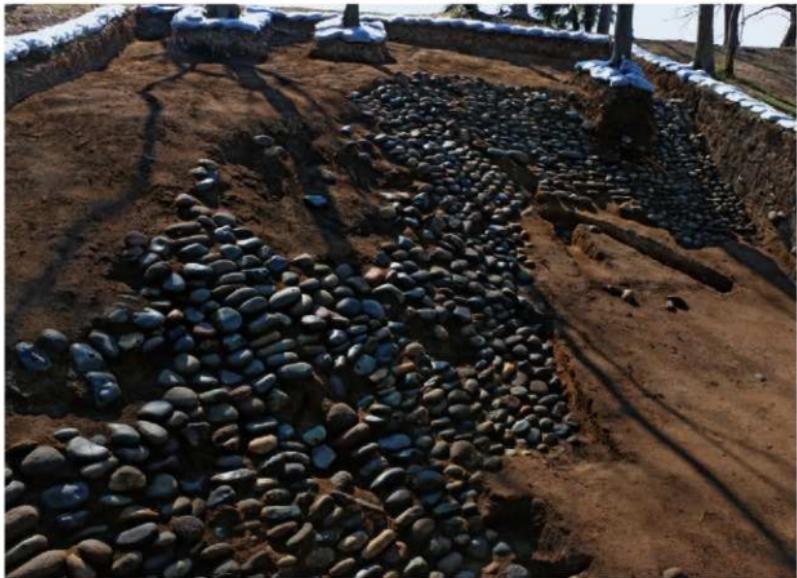
蛇穴山古墳より赤城山を望む



総社古墳群の分布



遠見山古墳より榛名山を望む（南東より）



くびれ部葺石（5トレンチ）



遠見山古墳前方部墳丘盛土土層堆積状況オルソ画像



王山古墳全景



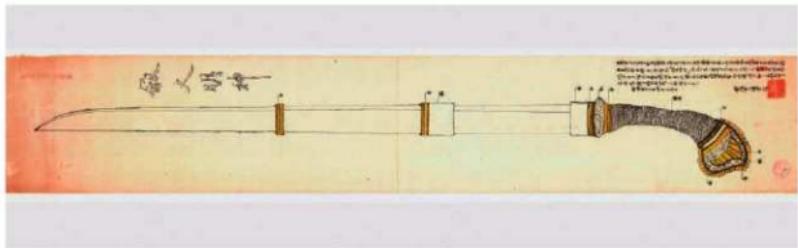
横穴式石室全景（東より）



玄室全景



総社二子山古墳全景（南より）



頭椎大刀絵図（前橋市立図書館所蔵）



須恵器台付直口壺（東京国立博物館）
image:TNN image Archives



六鈴鉄（東京国立博物館）
image:TNN image Archives



愛宕山古墳北トレンチ全景（北より）



愛宕山古墳玄室と家形石棺

巻頭図版6

愛宕山古墳



北トレンチ2・3段目内側葺石



西トレンチ2・3段目内側葺石



北トレンチ基壇面敷石及び2段目内側葺石



北トレンチ2段目葺石西壁オルソ画像



西トレンチ3段目葺石南壁オルソ画像



宝塔山古墳周堀北東コーナー



宝塔山古墳埴丘北西コーナー



宝塔山古墳石室



玄室玄門朱線



前室側壁朱線

卷頭図版8



蛇穴山古墳23トレンチ全景

蛇穴山古墳



蛇穴山古墳25トレンチ全景



蛇穴山古墳玄室

はじめに

前橋市の總社地区から元總社地区にかけては、總社古墳群や山王廃寺、上野國府、上野國分二寺などが点在する歴史資産豊富なエリアで、本市の歴史を語る上で欠かすことのできない地域です。

總社古墳群は、首長墳とみられる6基の大型古墳から成る古墳群で、全国でも屈指の古墳群として広く知られ、調査研究が蓄積されています。重要な歴史資産を適切に保存して未来に引き継ぐため、古墳群の基礎的情報の収集を目的として、平成29年度より總社古墳群の範囲内容確認調査を進めております。その結果、これまでの調査成果と併せ、各古墳の兆域や、墳丘の規模・形状、構造について把握でき、大きな成果を上げることができました。これまでの調査研究を総括し、それぞれの古墳の価値を整理し、古墳群としてどのような価値を持つのかを評価して、将来的な保存・活用方針の策定や調査・研究に利することを目的として総括報告書を作成いたしました。本書が史跡の保護や教育、調査研究に貢献できることを願っております。

最後に、本事業の推進にあたってご理解とご協力をいただきました總社古墳群調査検討委員の皆様、国・県・市の関係各位、地元總社町自治会連合会、土地所有者の皆さんに、厚く御礼申し上げます。

令和5年9月

前橋市教育委員会

教育長 吉川 真由美

例　　言

1 本報告書は、前橋市教育委員会が令和4・5年度の国庫及び県費補助を受けて作成した総社古墳群総括報告書である。

2 本報告書の作成は、総社古墳群調査検討委員会の指導のもと前橋市教育委員会が実施した。

調査組織（令和4～5年度）

総社古墳群調査検討委員会

（1）委員会

委員長 右島 和夫（群馬県立歴史博物館特別館長）

委員 林部 均（国立歴史民俗博物館教授）

山本 孝文（日本大学文理学部教授）

指導 文化庁文化財第二課、群馬県地域創生部文化財保護課

（2）事務局（担当課 前橋市教育委員会事務局文化財保護課）

教育長 吉川真由美

教育次長 藤井 一幸（令和4年度）

片貝 伸生（令和5年度）

課長 上野 克巳（令和4年度）

神宮 聰（令和5年度）

係長 信澤 孝典（令和4～5年度）

小川 卓也（令和5年度）

係員 福田 貫之（令和5年度）、前原 豊、小川

3 本書に所収する発掘調査の成果は、昭和43年度から令和4年度までに実施したものを中心構成した。

4 本書の編集は小川が行った。

5 本書の執筆は以下のとおりである。

第2章第4節第1項 池田史人（前橋市教育委員会事務局文化財保護課）

第2章第4節第2項 阿久澤智和（前橋市都市計画部都市計画課）

第3章 福田・小川

第5章第1節 林部委員

第5章第2節 山本委員

第5章第3節 右島委員

上記以外 小川

6 第9図右、第20図内、第40図、PL8下段、PL18上段、PL20下段、PL23下段に使用した写真是群馬大学より提供を受けた。

7 本報告書の作成にあたっては下記の諸機関・諸氏の御教示・御指導・御協力を賜りました。厚く御礼申し上げます（五十音順・敬称略）。

文化庁文化財第二課、群馬県地域創生部文化財保護課、前橋市役所生活部総社市民サービスセンター、

総社町自治会連合会、宗教法人光巖寺、有限会社三光企画、青木 敬、青木 弘、飯塚 聰、梅澤重昭、

大澤正吾、軽部達也、川口 亮、川畑 純、吳 心怡、小森哲也、城倉正祥、杉山秀宏、永井智教、

南雲芳昭、日高 慎、廣瀬 覚、深澤敦仁、三浦茂三郎、山下歳信、若狭 啓

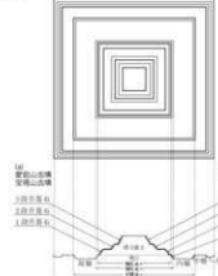
凡例

- 1 挿図中に使用した北は、座標北である。
- 2 揿図に建設省国土地理院発行の1：200,000地形図（『宇都宮』・『長野』）を使用した。
- 3 遺構・遺物の実測図の基本的な縮尺は次のとおりである。ただし、図の配置上、他の縮尺を使用したほうが適切な場合は、その他の縮尺を適宜使用した。
遺構 遺構平面図・断面図…1：100 石室平面図・断面図…1：80～1：160、石棺実測図…1：40
墳丘・兆域復原図…1：600・1：800
- 4 遺物 円筒埴輪・形象埴輪…1/6・1/10 土師器…1/8
- 5 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。
As-Kk（浅間柏川テフラ：供給火山・浅間山、1128年）
As-B（浅間B軽石：供給火山・浅間山、1108年）
Hr-FP（榛名二ツ岳伊香保テフラ：供給火山・榛名山、6世紀中葉）
Hr-FA（榛名二ツ岳渋川テフラ：供給火山・榛名山、6世紀初頭）
As-C（浅間C軽石：供給火山・浅間山、3世紀後半～4世紀初頭）
- 6 本書で使用する遺構各部位の名称及び計測位置は下記のとおりである。なお、蛇穴山古墳は墳丘基部より葺石を施しているため、周囲からの立ち上がり位置より1段目として計測している。

【前方後円墳】



【方墳】



目 次

巻頭図版

第1章 総社古墳群範囲内容確認調査事業の概要	1
第1節 調査事業の経緯と経過	1
第2節 調査の体制	1
第3節 調査の計画と経過	2
第2章 総社古墳群の概要	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第1項 上毛野地域の古墳時代概観	6
第2項 古墳時代以降の総社古墳群	18
(1) 陵墓としての古墳—総社二子山古墳—	18
(2) 信仰の場としての古墳—蛇穴山古墳—	19
第3節 史跡指定	23
第4節 関連遺跡の概要	25
第1項 山王庵寺	25
第2項 推定上野国府	30
第3章 総社古墳群調査研究略史	33
第4章 発掘調査の成果	36
第1節 遠見山古墳	36
第2節 王山古墳	43
第3節 総社二子山古墳	47
第4節 愛宕山古墳	54
第5節 宝塔山古墳	62
第6節 蛇穴山古墳	72
第5章 特論	82
第1節 畿内における古墳の終末からみた総社古墳群	82
第2節 東アジアの中の総社古墳群	93
第3節 東国における総社古墳群造営の歴史的意義	102
第6章 まとめ	111

写真図版

図版目次

第1図 総社古墳群調査検討委員会の様子	4	第39図 愛宕山古墳西トレンチ	59
第2図 現地説明会の様子	5	第40図 宝塔山古墳石室調査写真	63
第3図 総社古墳群の位置と周辺の環境	7	第41図 宝塔山古墳想定復原図	64
第4図 総社古墳群北部の古墳の分布と地形	8	第42図 宝塔山古墳石室実測図	65
第5図 上毛野地域の古墳変遷図	10	第43図 宝塔山古墳の石室構造1	68
第6図 古墳時代中期後半の主な古墳の分布	11	第44図 宝塔山古墳の石室構造2	69
第7図 古墳時代後期の主な古墳の分布	13	第45図 宝塔山古墳石棺実測図	70
第8図 古墳時代終末期の主な古墳の分布	16	第46図 蛇穴山古墳想定復原図	73
第9図 総社二子山古墳石碑・古写真	18	第47図 蛇穴山古墳石室実測図	75
第10図 蛇穴山古墳の後世の利用に係る資料	21	第48図 蛇穴山古墳の石室構造	77
第11図 蛇穴山古墳利用の変遷	22	第49図 蛇穴山古墳の墳丘構造1	79
第12図 山王庵寺伽藍配置図	28	第50図 蛇穴山古墳の墳丘構造2・中堤葺石	81
第13図 山王庵寺の軒丸瓦	28	第51図 五条野丸山古墳墳丘測量図	82
第14図 山王庵寺の下層建物群	28	第52図 植山古墳墳丘測量図	83
第15図 山王庵寺の塑像	29	第53図 赤坂天王山古墳墳丘測量図	85
第16図 上野国府推定地の様相	31	第54図 牧野古墳墳丘測量図	85
第17図 宮鍋神社周辺の様相	31	第55図 赤坂天王山古墳石室実測図	87
第18図 上野国府関連遺物1	32	第56図 石舞台古墳石室実測図	87
第19図 上野国府関連遺物2	32	第57図 岩屋山古墳石室実測図	88
第20図 総社古墳群調査研究史関連資料	35	第58図 神墓古墳石室実測図	88
第21図 遠見山古墳想定復原図	37	第59図 菖蒲池古墳家形石棺	88
第22図 総社城之図	38	第60図 御嶽山古墳の棺台と格狭間	89
第23図 遠見山古墳くびれ部葺石	38	第61図 譲内と東国の大型円墳・方墳	91
第24図 遠見山古墳墳丘盛土土層堆積状況	39	第62図 大型化した東アジア各地の伝統的墓制	94
第25図 主な円筒埴輪	41	第63図 韓半島と日本の切石積石室・石櫓	96
第26図 主な形象埴輪	41	第64図 百济墓制の変遷と横穴式石室の規格化	98
第27図 祭祀跡	41	第65図 高句麗積石塚の用材と変遷	99
第28図 王山古墳墳丘・石室測量図	44	第66図 各地の切石積石室	100
第29図 王山古墳の便益施設	45	第67図 総社古墳群の変遷	102
第30図 王山古墳出土形象埴輪	45	第68図 上毛野地域の初現期横穴式石室分布図	103
第31図 総社二子山古墳壳復原図	48	第69図 墳丘及び石室形状の比較	104
第32図 総社二子山古墳と綿貫觀音山古墳の墳丘形状の比較と総社二子山古墳石室測量図	49	第70図 主な角閃石安山岩削石積石室分布図	104
第33図 頭椎大刀絵図・版画	51	第71図 帯解黄金塙古墳と宝塔山古墳の石室比較	105
第34図 総社二子山古墳石室出土遺物	52	第72図 群馬県内の朱線を持つ石室	106
第35図 総社二子山古墳出土埴輪	52	第73図 高松塚古墳石室朱線	106
第36図 愛宕山古墳想定復原図	55	第74図 蛇穴山古墳前庭部左右側壁	108
第37図 愛宕山古墳石室及び石棺実測図	56	第75図 蛇穴山古墳冠石最終仕上げ加工	108
第38図 愛宕山古墳北トレンチ	57	第76図 太田市大道東遺跡の道路状遺構	109

表 目 次

表1 上毛野地域の初現期主要横穴式石室.....	12
表2 上毛野地域の主要な裁石切組積石室.....	17
表3 譲内主要部の大型円墳・方墳.....	
	84

写真図版目次

卷頭図版 1 蛇穴山古墳より赤城山を望む 総社古墳群の分布	後円部南側内堀（6トレンチ） 西側中堤より前方部墳丘を望む（3トレンチ）
卷頭図版 2 遠見山古墳より榛名山を望む（南東より） くびれ部葺石（5トレンチ）	前方部南側内堀（7トレンチ） PL.5 内堀南側立ち上がり（6トレンチ（H3）） 内堀南西コーナー（6トレンチ（H3）） 前方部南側外堀（9トレンチ） 祭祀跡出土土器
卷頭図版 3 遠見山古墳前方部墳丘盛土層堆積状況オルソ画像 王山古墳全景 横穴式石室全景（東より） 玄室全景	墳丘北側くびれ部出土円筒埴輪 墳丘埴輪列の円筒埴輪 周堀出土円筒埴輪
卷頭図版 4 総社二子山古墳全景（南より） 頂権大刀絵巻（前橋市立図書館所蔵） 須恵器台付直口壺（東京国立博物館） 六鈴鏡（東京国立博物館）	PL.6 王山古墳全景（西より） 前方部墳丘2段目（北より） 石室閉塞状況（東より） 美道より玄室を望む
卷頭図版 5 愛宕山古墳北トレンチ全景（北より） 愛宕山古墳玄室と家形石棺	PL.7 総社二子山古墳全景（南より） かつての総社二子山古墳（昭和40年代） 前方部に設けられた拌殿 1トレンチ全景（西より） 4トレンチ全景（南より）
卷頭図版 6 北トレンチ2・3段目内側葺石 西トレンチ2・3段目内側葺石 北トレンチ基壇面敷石及び2段目内側葺石 北トレンチ2段目葺石西壁オルソ画像 西トレンチ3段目葺石南壁オルソ画像	PL.8 前方部西側周堀立ち上がり（1トレンチ） 後円部埴丘裾部（4トレンチ） 石敷き遺構（4トレンチ）
卷頭図版 7 宝塔山古墳周堀北東コーナー ¹ 宝塔山古墳北西コーナー ² 宝塔山古墳石室 玄室玄門朱線 前室側壁朱線	PL.9 前方部に設けられた拌殿 1トレンチ全景（西より） 4トレンチ全景（南より） PL.10 前方部西側周堀立ち上がり（1トレンチ） 後円部埴丘裾部（4トレンチ） 石敷き遺構（4トレンチ）
卷頭図版 8 蛇穴山古墳23トレンチ全景 蛇穴山古墳25トレンチ全景 蛇穴山古墳玄室	PL.11 後円部石室奥壁（田澤1974より） 後円部石室側壁（田澤1974より） PL.12 総社二子山古墳前方部石室 愛宕山古墳全景
PL.1 遠見山古墳全景（南東より） 北側くびれ部の葺石	PL.13 愛宕山古墳全景（南より 昭和40年代） 古墳玄室と家形石棺
PL.2 くびれ部オルソ画像（5トレンチ 下が後円部） くびれ部埴輪列（5トレンチ）	PL.14 周堀より墳丘を望む（北トレンチ） 1段目葺石（北トレンチ）
PL.3 前方部基壇テラス面（奥は2段目葺石 2トレンチ） 基壇内葺石（2トレンチ） 2段目葺石（2トレンチ） 祭祀跡遺物出土状況	PL.15 敷石及び2段目葺石（北トレンチ） 3段目葺石（北トレンチ） 周堀より墳丘を望む（西トレンチ） PL.16 1段目葺石（西トレンチ） 敷石及び2段目葺石（西トレンチ） 3段目葺石（西トレンチ）
PL.4 後円部中央部（8トレンチ） 内堀土層堆積状況（1トレンチ）	PL.17 墳丘より周堀を望む（1Aトレンチ 平成7年） 周堀北西部の様子（4トレンチ 平成7年）

	周堀南西部の様子（5トレンチ 平成7年）	玄室内棺台
	平成7年度調査区全景	玄室奥壁銘文
	宝塔山古墳全景（北西より）	PL.25 墳丘南西コーナー（25トレンチ）
PL.18	宝塔山古墳全景（南より 昭和40年代）	1段目葺石（Fトレンチ 昭和50年）
	宝塔山古墳石室と石棺	2段目葺石（Bトレンチ 昭和50年）
PL.19	宝塔山古墳家形石棺	2段目葺石（Bトレンチ 昭和50年）
	秋元家歴代墓地（墳頂部）	PL.26 周堀より墳丘を望む（23トレンチ）
	調査前の石室内の様子（昭和40年代）	1・2段目葺石（23トレンチ）
	漆喰塗布の様子（玄室奥壁付近）	3段目葺石（23トレンチ）
PL.20	漆喰表面の様子（玄室）	4段目葺石全景（23トレンチ）
	截石切組積の様子（前室）	PL.27 敷石及び4段目外側葺石（23トレンチ）
	截石切組積の様子（羨道）	4段目内側葺石（23トレンチ）
	前庭部左側壁（昭和43年）	中堤内側葺石（21トレンチ 平成21年）
	前庭部右側壁（昭和43年）	中堤外側葺石（22トレンチ 平成21年）
	崩落した冠石（整備前 昭和43年）	PL.28 中堤北西コーナー（20トレンチ 平成21年）
	石室内の基礎構造（昭和43年）	前庭部調査状況（昭和50年）
PL.21	周堀より墳丘を望む（26トレンチ）	前庭部遺物出土状況（昭和50年）
	周堀北側立ち上がり（26トレンチ）	前庭部土層堆積状況（昭和50年）
	墳丘付近縫出土状況（26トレンチ）	PL.29 前庭部床下土層堆積状況
	周堀より墳丘を望む（27トレンチ）	石室内西側床面（昭和50年）
	周堀北側立ち上がり（27トレンチ）	石室内東側床面（昭和50年）
	角閃石鞍山岩剥片出土状況（27トレンチ）	PL.30 石室内床下土層堆積状況1（昭和50年）
PL.22	宝塔山古墳墳丘北西コーナー	石室内床下土層堆積状況2（昭和50年）
	蛇穴山古墳全景（南より）	溝状遺構土層堆積状況（23トレンチ）
PL.23	石室入口と薬師堂（大正時代か）	墳丘上石列（23トレンチ）
	かつての蛇穴山古墳石室（昭和40年代）	周堀内石列（25トレンチ）
PL.24	蛇穴山古墳玄室	薬師堂（光巖寺境内）
	漆喰塗布の様子	蛇穴山弁天石碑

第1章 総社古墳群範囲内容確認調査事業の概要

第1節 調査事業の経緯と経過

総社古墳群は、前橋市西部の、利根川右岸の総社町総社を中心とした地域に、5世紀後半から7世紀後半にかけて形成された古墳群である。総社二子山古墳出土の頭椎大刀をはじめとした優美な出土品や、宝塔山古墳・蛇穴山古墳の巧みな石室づくりなどから古くより著名で、東日本を代表する古墳群の一つに数えられる。昭和10年の県下一齐古墳分布調査の報告書である『上毛古墳綜覧』には群馬都総社町所在の古墳として15基が掲載され、群馬県中央の平野部にありながら比較的古墳数は少ない。ただし、各古墳の墳丘形状や規模から見ると、前方後円墳4基、方墳3基、円墳8基と、前方後円墳や方墳をはじめとした大型古墳を中心として構成されていることが分かる（群馬県1938、右島2010）。

尾崎喜左雄は、総社地区に所在する大型古墳を中心とした古墳を「総社古墳群」として把握・分析し、横穴式石室を有する古墳の石室構造や石材加工より、古墳群の変遷過程を検討した。また、石材加工技術の類似性から近隣に所在する山王寺ととの関係を指摘している（尾崎1966ほか）。その後各古墳や周辺遺跡の調査が行われる中、右島和夫により総社古墳群各古墳の調査や分析、検討が精力的に進められている。墳丘形状や石室の構造・規模、副葬品等により総社二子山古墳と錦貫观音山古墳との親縁性や、愛宕山古墳の墳丘形状及び規模などが把握され、その変遷過程も、遠見山古墳（前方後円墳88m、5世紀後半）→王山古墳（同76m、6世紀初頭）→総社二子山古墳（同90m、6世紀後半）→愛宕山古墳（方墳56m、7世紀前半）→宝塔山古墳（同60m、7世紀中葉～第3四半期）→蛇穴山古墳（同40m、7世紀第4四半期）と推移し、大型前方後円墳である総社二子山古墳に続き、3代の大型方墳が築造されたことが明らかにされている。また、大型方墳の採用や、巨石巨室石室・截石切組積石室の導入、刳抜式家形石棺の設置や漆喰の使用など、畿内の有力者層と密接に関係していることが推定され、7世紀を中心とした当地域の歴史過程に当時のヤマト王権が深く関係していることが指摘されている（右島 1985・88・92・93）。

総社古墳群では、現在首長墓とみられる6基の大型古墳が残されており、その価値の高さから3基が国史跡に、2基が市史跡に指定され、文化財としての保護がなされている。また、宝塔山古墳及び蛇穴山古墳など兆城範囲が明らかになった史跡については、順次史跡の追加指定を行っている。しかしながら、これまで各古墳の調査は断続的であり、兆城などは判然としていない古墳も多い。また、指定史跡にあっても指定範囲が墳丘部を中心としたゾーンに限定されるため、史跡の適切な保護を行う上で支障をきたしかねない状況も続いている。当地域にも開発の波が押し寄せ、史跡の保護と開発の調整にも苦慮する事態も多い。総社古墳群の歴史的な重要性を鑑み、前橋市教育委員会では総社古墳群総体として保存と活用の方策を立てたための基礎データ収集を目的として、平成29年度より範囲内容確認調査に着手することとなった。調査に当たっては、学識経験者による「総社古墳群調査検討委員会」を設置し、調査計画策定や現地調査指導、調査成果の検討など広範な分野から専門的な指導を受けるとともに、文化庁および群馬県教育委員会の指導の下、合計7か年計画の調査を実施している。調査に当たっては下記2点を目標とした。

①古墳の構造に関するこ

周囲・墳丘・主体部等各古墳の構造、築造方法及び築造年代の確認

②古墳の兆城に関するこ

周囲の範囲、構造、内容の確認

第2節 調査の体制

事業実施に当たっては、平成29年度より総社古墳群調査検討委員会を組織した。委員の構成は下記のとおりである。

委員長 右島和夫 群馬県立歴史博物館特別館長（平成29～令和5年度）

委員 林部 均 国立歴史民俗博物館教授（平成29～令和5年度）

山本孝文 日本大学文理学部教授（平成29～令和5年度）

事務局の体制は下記のとおり。

教 育 長	塙崎 政江（平成29～令和元年度）	神宮 聰（令和5年度）
	吉川真由美（令和2年度～）	文化財保護係長 登山 伸一（平成29～30年度）
教育次長	橋本 誠次（平成29年度）	大野 裕史（令和元年度）
	根岸 隆夫（平成30年度）	上野 克巳（令和2年度）
	堀越 規子（令和元年度）	須藤 健夫（令和3年度）
	高橋 宏幸（令和2年度）	信澤 孝典（令和4年度～）
	藤井 一幸（令和3～4年度）	埋蔵文化財係長 小川 卓也（令和5年度）
	片貝 伸生（令和5年度）	副 主 幹 小川 卓也（平成29～令和4年度）
文化財保護課長	田中 隆夫（平成29～令和2年度）	福田 貴之（令和5年度）
	上野 克巳（令和3～4年度）	嘱 託 員 前原 豊（平成29・令和元～5年度）

また、委員会の承認を受け、早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所との共同調査として、令和4年度に宝塔山古墳及び蛇穴山古墳の三次元計測調査を実施した。調査体制は下記のとおりである。

【三次元計測調査主体】

早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所、前橋市教育委員会

【三次元計測調査担当】

吳 心怡（早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所所員 / 早稲田大学文学学術院助手）

青木 弘（早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所招聘研究員 / (公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団）

第3節 調査の計画と経過

(1) 調査の経過

調査に当たっては、各古墳の様相を効率的に把握するため、年度ごとに明確な調査目標と計画を立て、順次調査を実施している。

平成29年度 遠見山古墳1～4トレンチ

平成30年度 遠見山古墳5～8トレンチ

令和元年度 発掘調査報告書の作成

令和2年度 總社二子山古墳1～4トレンチ

愛宕山古墳北・西トレンチ

令和3年度 遠見山古墳9～13トレンチ

宝塔山古墳26・27トレンチ

蛇穴山古墳23～25・28トレンチ

令和4年度 発掘調査報告書の作成、宝塔山古墳・蛇穴山古墳石室の三次元計測調査

(2) 委員会指導の経過

【平成29年度】

第1回委員会

日 時：平成29年8月30日 13時～17時

場 所：前橋市文化財保護課2階会議室

協議事項：委嘱状交付

：事業概要 調査の目的と全体計画、各史

跡の概要

：事業計画 平成29年度事業について

：視察 總社古墳群各古墳の現況

協議事項：事業概要 平成29年度調査結果について

：事業計画 平成30年度事業計画について

：現地指導 遠見山古墳

第2回委員会

日 時：平成30年2月21日 13時30分～16時

場 所：前橋市文化財保護課2階会議室

【平成30年度】

第1回委員会

日 時：平成30年11月18日 14時～16時30分

場 所：前橋市総社歴史資料館ほか

協議事項：事業計画 總社古墳群範囲内確認調査

：計画の見直しについて

：現地指導 遠見山古墳

【令和元年度】

第1回委員会

日 時：令和元年8月25日 14時～16時

場 所：前橋市文化財保護課2階会議室

協議事項：委嘱状交付

：事業報告 平成29～30年度総社古墳群範

囲内容確認調査結果について

：事業概要 令和元年度事業計画について

第2回委員会

日 時：令和2年2月11日 14時～16時

場 所：前橋市文化財保護課2階会議室

協議事項：事業概要 平成29～30年度総社古墳群範

囲内容確認調査報告書について

：事業計画 令和2年度事業計画について

：事業概要 令和3年度総社古墳群範囲内
容確認調査事業について

：事業計画 令和4年度事業計画について

第2回委員会

日 時：令和4年1月27日 14時～16時45分

場 所：前橋市総社歴史資料館学習室他

協議事項：現地指導 宝塔山古墳・蛇穴山古墳

事業報告 現地指導結果

市史跡遠見山古墳の調査結果について

：事業計画 令和4年度事業計画について

総社古墳群石室等三次元計測調査につい

て

総社古墳群総括報告書の作成について

【令和2年度】

第1回委員会（書面開催）

協議事項：事業報告 令和2年度実施事業について

愛宕山古墳現地説明会の開催について

：事業計画 令和3年度事業計画について

令和4年度以降の事業計画について

※委員会開催に先立つ令和3年1月20日に愛宕山古墳調
査現場にて現地指導を受けた。

【令和3年度】

第1回委員会

日 時：令和3年6月22日 14時～16時

場 所：前橋市文化財保護課2階会議室

協議事項：委嘱状交付

【令和4年度】

第1回委員会

日 時：令和4年9月5日 14時～17時

場 所：前橋市総社歴史資料館学習室

協議事項：事業概要 令和4年度総社古墳群範囲内
容確認調査事業について

：事業計画 令和5年度事業計画について

第2回委員会

日 時：令和5年1月29日 14時～16時45分

場 所：前橋市総社歴史資料館学習室他

協議事項：事業計画 令和4年度事業計画について

範囲内容確認調査報告書について

総社古墳群総括報告書の作成について

(3) 普及啓発活動

本事業で実施した調査成果を広く還元し、史跡をはじめとした文化財の理解を深めるため、現地説明会や講座等を実施した。

【現地説明会】

○平成30年度

日 時：平成31年1月20日

場 所：遠見山古墳

参加者：91名

○令和3年度

日 時：令和4年2月19日・20日

場 所：宝塔山古墳・蛇穴山古墳

参加者：147名

【講座等】

○平成30年度

日 時：平成31年3月7日

場 所：総社公民館

内 容：総社歴史講座「身近な総社古墳群について」

参加者：約50名

○令和2年度

日 時：令和3年2月13日・14日

場 所：愛宕山古墳

参加者：約200名



平成30年度第1回委員会



平成30年度現地指導



令和3年度第1回委員会



令和3年度現地指導

第1図 総社古墳群調査検討委員会の様子

○令和4年度

日 時：令和4年7月23日・8月6日

場 所：総社歴史資料館ほか

内 容：群馬県立歴史博物館「こどもセミナー 古墳
博士と古墳を歩こう！」（共催事業）

参加者：52名

日 時：令和5年2月21日 13時30分～15時15分

場 所：総社公民館

内 容：総社地区生涯学習奨励員研修会「総社古墳
群・再発信 歴史の宝庫総社町と歴史まちづ
くり」

参加者：約20名



平成30年度現地説明会（遠見山古墳）



令和2年度現地説明会（愛宕山古墳）①



令和2年度現地説明会（愛宕山古墳）②



令和3年度現地説明会（蛇穴山古墳）

第2図 現地説明会の様子

第2章 総社古墳群の概要

第1節 地理的環境

群馬県前橋市は、県中央部のやや南に位置し、東京から北西100kmほどに所在する。平成の大合併を経て市域が拡大し、東西約20km、南北約27kmに及び、面積は311.59km²を測る。地形・地質の特徴から、本市の地域を大別すると、北部の赤城火山斜面および火山麓扇状地（赤城山麓）、南西部に広がる洪積台地面（前橋台地）、これらにはさまれて北西～南東方向に地溝状に広がる沖積低地（広瀬川低地帯）、そして本市を東西に分断して南流する現利根川の氾濫原の4地域に区分される。

雄大な峠を持つ赤城山頂までを市域としており、本市の最高標高は黒檜山南面の1,828mである。赤城山南麓に形成された赤城火山斜面および火山麓扇状地に沿って北から南に向かって緩やかな傾斜となり、市の中央部から南部にかけては、標高100m前後の関東平野が広がり、最低標高は下阿内町の64mとなる。一方現利根川により画される本市西部は榛名山の東南麓にあたり、北西方向から南東方向へと傾斜する地形となる。

総社古墳群は、前橋市西部の総社地区を中心とした利根川右岸の南北約4kmの範囲に分布する。1.3万年前の榛名山系の山体崩壊である「陣馬岩屑なだれ」により形成された相馬ヶ原扇状地の扇端が前橋台地に移行する付近に当たる。前橋台地は、約2～3万年前に発生した浅間山の山体崩壊を起源とする泥流堆積物が、赤城山と榛名山の間から関東平野に流出して形成された緩傾斜の台地であり、その中央を現利根川が貫流している。地形は北西から南東方向に向かって緩やかに傾斜し、榛名山麓を水源とする多くの中小河川も同方向に並走して、台地を細長く画している。総社二子山古墳北方700mほどの位置に牛王頭川が、また宝塔山古墳・蛇穴山古墳南方500mほどの位置に八幡川が流下しており、その南にも染谷川や牛池川といった中小河川が流下している。総社古墳群の分布の中心となる古墳群北部は牛王頭川と八幡川に挟まれた台地中央に占地しており、古墳群南部及び山王寺庵は八幡川南側の台地に及ぶ。

陣馬岩屑なだれや前橋泥流の上面には、「前橋下部泥炭層」堆積後浅間一板鼻黄色軽石（As-YP、1.3万年前）や浅間一総社軽石（1.1万年前）を含む「前橋上部泥炭層」が堆積し、その上面に洪水性堆積物である「総社砂層」が厚く堆積する。総社砂層は総社・元総社地城及びその周辺にて広く確認されており、5m以上の厚さで堆積するとされ、5000年前ごろから形成され始めたとされる。総社砂層上には黒ボク土が生成し、浅間山噴出の浅間C軽石（As-C、3世紀末）や浅間B軽石（As-B、1108年）、榛名山噴出の榛名渢川テフラ（Hr-FA、6世紀初頭）榛名ツツ岳伊香保テフラ（Hr-FP、6世紀中葉）などの堆積が見られる。

第2節 歴史的環境

第1項 上毛野地域の古墳時代概観

総社古墳群の歴史的環境について、先行研究に基づいて総社古墳群が形成された中期後半以降を中心に概観する（尾崎1966、右島1985・1992・1994、若狭2007・2017・2021ほか）。本項では上毛野地域を大きく三地域に区分し、現利根川以西を西毛地域、現利根川から赤城山を水源とする早川までの地域を中毛地域、早川以東を東毛地域と呼称する。

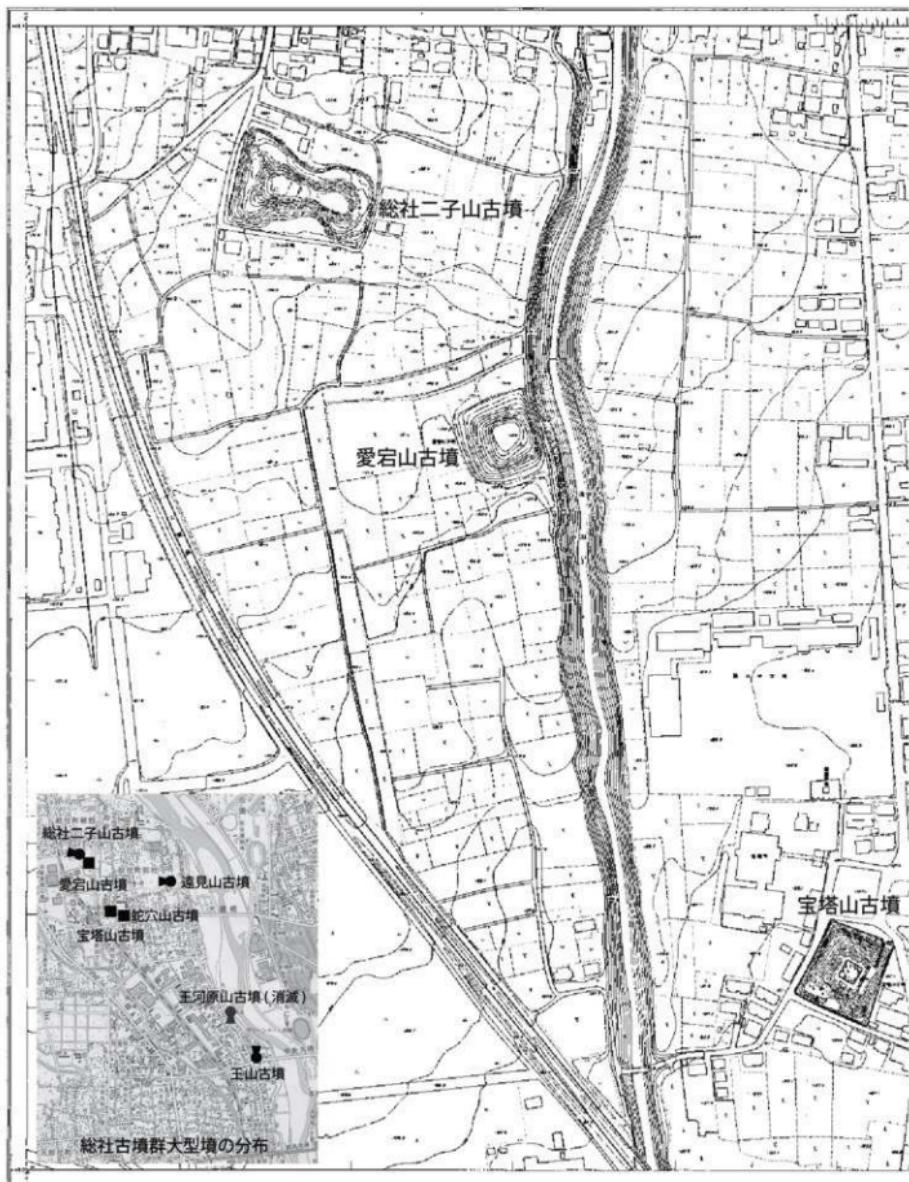
中期後半

前期後半以降、浅間山古墳（171.5m）や別所茶臼山古墳（168m）に代表される巨大前方後円墳の築造は、中期前半に東日本最大規模の太田天神山古墳の造営をピークとし、中期中葉以降は各地に大型古墳が築造され、上毛野地域に複数の首長系列が発生する（右島1994、若狭2011・2018・2021ほか）。特に中期後半には西毛地域に大型古墳が集中し、各水系に大型前方後円墳が相次いで築かれている。

【西毛地域】井野川流域では、下流域に不動山古墳（94m）や岩鼻二子山古墳（115m）が築かれ、その後流域を週上して山麓に保渡田古墳群が造営される。井出二子山古墳（108m）、保渡田八幡塚古墳（96m）、保渡田薬師塚古墳（105m）と、大型前方後円墳が相次いで築かれる。いずれも三段築成の墳丘に二重の周塁を巡らせ、二子山古墳及び八幡塚古墳の内塁には4基の円形の中島を配置するなど、規模のみならず外部施設や副葬品等充実した内容を誇る。また、首長居館として三ツ寺I遺跡が築かれ、保渡田古墳群の政治祭祀拠点と考えられる（若狭2007・2011ほか）。烏川流域では、上並櫻稲荷山古墳（120m）や、下流域の小鶴巻古墳（87.5m）がある。碓氷川下流域には

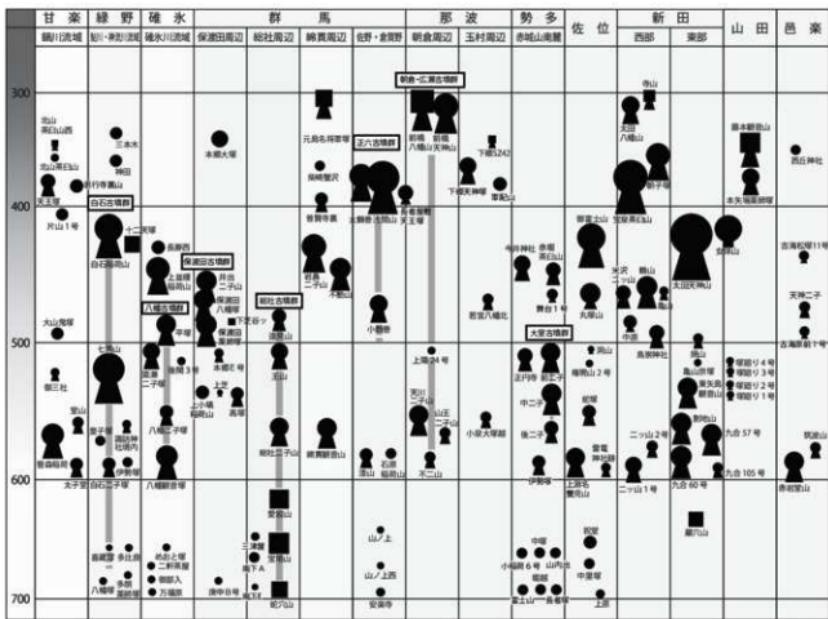


第3図 総社古墳群の位置と周辺の環境 (国土地理院1/20万『宇都宮・『長野』)



第4図 総社古墳群北部の古墳の分布と地形（白石編1990より転載）





第5図 上毛野地域の古墳変遷図（右島・徳江・南雲1995に一部加筆修正）

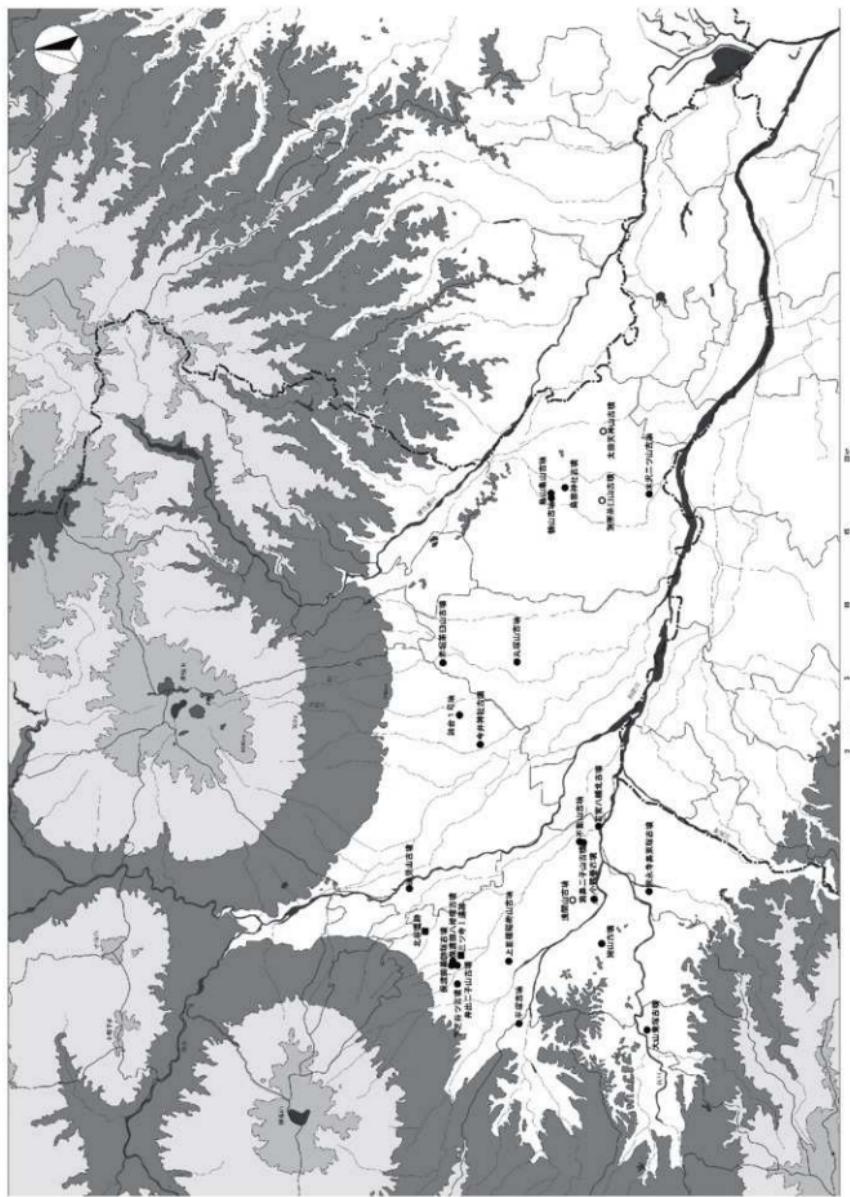
平塚古墳（105m）が、鍋川流域には宗永寺東裏塚古墳（52m）がそれぞれ築かれる。旧利根川右岸には遠見山古墳（88m）や鶴巻塚古墳（前方後円墳86m？）が築かれる。遠見山古墳の主体部は不明ながら埴丘は二段築成で、二重の周塀を巡らせ、前方部北側には張り出し部を設ける。遠見山古墳以降首長墳の造営は古墳時代後期にかけて継続しており、総社古墳群形成の嚆矢となる古墳である。榛名山東南麓の染谷川流域には首長居館である北谷遺跡が築かれ、遠見山古墳との関連も想定されている（若狭2007）。首長居館の三ツ寺Ⅰ遺跡とは直線距離でわずか3kmほどの位置にあり、異なる流域の首長間に政治的・経済的な協力関係があったと考えられる（若狭2011）。西毛地域に築かれた大型前方後円墳には凝灰岩製の舟形石棺が採用され、井手川流域を中心に蘿岡・甘楽地域に広がる。上述の大型前方後円墳のみならず、若宮八幡北古墳（帆立貝46.3m）、姥山古墳（円墳35m？）、大山鬼塚古墳（円墳30m？）など帆立貝式古墳や大型円墳まで用いられており、首長間の政治的な連合関係を見ることができる。そして、舟形石棺の縄掛突起の数や寸法に差異が見られ、集団内部の階層秩序を表微しているものと考えられる（徳江1992、右島1994・2002・2016、若狭2017・2018ほか）。この他樹立された円筒埴輪の寸法や突帯条数などにより、首長間の秩序を表示している（山田2008、若狭2017・2018ほか）。

【中毛地域】 粕川流域に丸塚山古墳（帆立貝81m）や赤堀茶臼山古墳（帆立貝62m）、十二所古墳（帆立貝48m）が築かれる。荒砥川下流域には今井神社古墳（71m）や舞台1号墳（帆立貝41m）が築かれ、今井神社古墳では凝灰岩製の組合式石棺が出土している。西毛地域と同様低地から山麓域に拠点を移す傾向が指摘されている（若狭2011）。

【東毛地域】 蛇川上流に鶴山古墳（102m）が築かれ、その後鳥崇神社古墳（前方後円墳70m）へと継続して築かれる。また、蛇川と石田川の合流点付近には米沢二ツ山古墳（73m）が築かれる。

舟形石棺が広く分布する西毛地域では、馬具・韓式系土器・装身具等朝鮮半島系の遺物が集中して出土している。剣崎長瀬西遺跡では方墳や方形積石墓が検出され、朝鮮半島南部製の金製垂飾付耳飾が出土する。馬具を装着した馬埋葬土坑や、韓式系土器が出土する住居址も多い。また、下芝谷ツ古墳でも金銅製飾履が出土した方墳が確認され、

第6図 古墳時代中期後半の主な古墳の分布（○は中期中葉以前の古墳）



積石墓は榛名山東麓の渋川市域まで広がっている。韓式系土器は下芝五反田遺跡や七五三引遺跡、不動山東遺跡などでも出土している。また、金井東裏遺跡での馬蹄痕の集中部や古墳への馬具類の副葬事例の多さから、西毛地域を中心にして馬匹生産の導入と展開が想定されるなど、西毛地域を中心とした地域に、馬匹生産や鉄製品生産をはじめとした新たな技術が導入される。朝鮮半島系の先進的な技術の導入には、古代東山道の前身となる内陸部交通網の成立との関連が想定されている（若狭2000・2011、右島2002・2011・2016ほか）。

後期前半

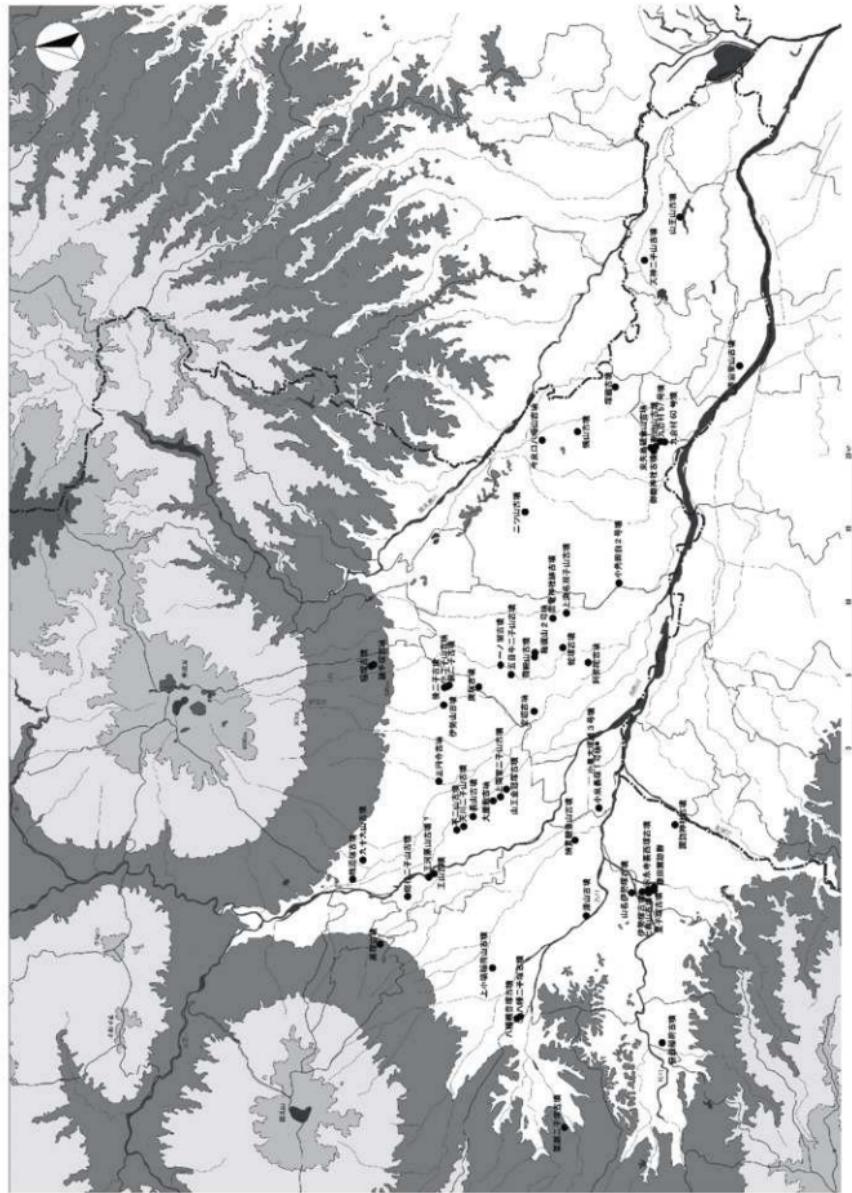
5世紀末～6世紀初頭の榛名山の噴火により、榛名山麓一帯は広範囲に被災し、特に東麓から南麓にかけての被害は甚大であった。経済基盤は大きなダメージを受け、榛名山南麓に位置する保渡田古墳群は、保渡田蒸葉塚古墳を最後に古墳の造営が中断する。一方噴火被害の少なかった周辺地域では、中期後半より引き継いだ首長墓や新たな地域にて首長墓の造営が始まる。これらの地域では、畿内地域の大王墓で採用されはじめた横穴式石室が導入され、西毛地域から中毛地域にかけて分布し、前方後円墳や帆立貝式古墳、大～中型の円墳にまで採用される。その嚆矢となるのが磐冰川流域に築かれた磐瀬二子塚古墳（80m）である。後期初頭の築造で、石室は後円部南側の埴丘基壇面に開口した、川原石を用いた狭長な両袖式横穴式石室で、全長11.5m、玄室長4.07mを測る。石室床面は2段下がつて玄室に至り、壁面は赤彩される。付近の九十九川流域には後閑3号墳（円墳20m）や下増田上田中1号墳（円墳20m）が築かれ、川原石を用いたT字形の横穴式石室を有する。鍋川流域には一之宮4号墳（48m）が築かれ、川原石積の両袖式横穴式石室を持つ。石室はやはり赤彩され、東側くびれ部に開口する特異な例である。

利根川右岸では、遠見山古墳に続いて後期初頭に玉山古墳（76m）が築かれる。埴丘は2段築成で、埴丘斜面には川原石をふんだんに用いた葺石を施し、二重葺石の可能性が指摘されている（前原2010）。石室は東側埴丘斜面に開口し、基壇面よりも高い位置に石室入口を設ける。川原石積の両袖式横穴式石室で、石室内は赤彩される。石室全長16.37m、玄室長4.37mを測り、羨道が極めて長いつくりである。旧利根川右岸の赤城山南麓には正圓寺古墳（70m）が築かれる。川原石積の両袖式横穴式石室で、全長9.7m、玄室長3.9mを測る。横穴式石室のほかに、くびれ部に川原石を用いた豎穴式小石槻を持つ。その東方、粕川流域には前二子古墳（94m）が築かれる。石室は後円部南側の埴丘第1段に開口した両袖式横穴式石室で、壁面石材には山石の塊石を用いる。全長13.8m、玄室長5.2mを測り、石室内は赤彩され、床下には凝灰岩製の板石を敷く。

築瀬二子塚古墳や玉山古墳に代表される大型前後後円墳に採用された初期横穴式石室はいずれも両袖式で、旧地表面を石室構築面とする。壁面は川原石や山石を用いた多石構成をとり、狹長な羨道を持つ。天井は羨道から玄室にかけて段をなさずにつなげ、石室内は赤彩される等の共通した特徴を有する（右島1992・2016・2020）。一方後閑3号墳（や本郷鶴荷塚古墳、四戸1号墳などの帆立貝式古墳や円墳には、袖無式横穴式石室が採用され、階層差の反映とみられる（右島2016・2020）。また、壁面は川原石や山石を用いて多石構成とし、石室内が赤彩される点は大型前後後円墳のつくりと共通するが、T字形・L字形等の平面プランも見られる。上毛野地域での横穴式石室の採用は、主要古墳に横穴式石室が導入された畿内の流れが前代に成立した内陸部交通網を通じてもたらされ、畿内との新たな関係の構築により成立したと指摘される（右島2016・2020）。

表1 上毛野地域の初現期主要横穴式石室（右島2020[第4節「四戸」の古墳群の成立背景]『四戸の古墳群』群理文を一部改変）

番号	古墳名	所在地	墳形	石室	石室構成（石室構成）				使用石材	埋蔵法	埴	主な副葬品	参考
					形状	容積（m ³ ）	高さ	幅					
1. 磐瀬二子塚古墳	安中市原駅	前方後円墳（76m）	両袖	11.54	407	222	205	川原石	○	○	○	投げ縄垂木刀・鉾穂・金輪輪・輪・秋枕金輪・舟形金輪・舟形鉾穂・縄垂木刀・鉾穂・輪	5c末～6c初
2. 後閑3号墳	安中市高瀬	円墳（20m）	T字形	5.40	100	250	170	川原石	○	○	○	縄垂木刀・鉾穂・輪・輪・舟形輪・縄垂木刀・鉾穂・輪	6c初
3. 下増田上田中1号墳	利根郡境川町下増田	円墳（25m）	1字形	-	-	-	-	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初
4. 下増田上田中1号墳	利根郡境川町下増田	円墳（10m）	横穴	5.00	240	80	150	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初
5. 墓ノ上2号墳	利根郡境川町小坂	前方後円墳（40m）	両袖	12.67	348	170	140	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初
6. 二之宮1号墳	利根郡境川町	前方後円墳（76m）	両袖	16.60	240	120	140	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初
7. 植波瀬1号墳	吉岡町高瀬	円墳（10m）	横穴	6.10	320	110	140	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初
8. 古河大塚古墳	高崎市古河町	円墳（5m）	横穴	4.26	170	75	70	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初
9. リンドウ12号墳	高崎市高崎町	円墳（20m）	横穴	7.20	210	120	120	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初
10. 大内6号墳	利根郡境川町	前方後円墳（55m）	横穴	11.44	320	120	140	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初
11. 本郷鶴荷塚古墳	高崎市	円墳（33.1m×28.5m）	横穴	5.50	263	115	150	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初
12. 1号古墳	利根郡境川町	前方後円墳（70m）	横穴	16.27	432	163	160	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初
13. 1号古墳	利根郡境川町	前方後円墳（70m）	横穴	16.27	432	163	160	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初
14. 1号古墳	利根郡境川町	前方後円墳（70m）	横穴	16.27	432	163	160	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初
15. 置賀野1号墳	伊香柄市置賀野	円墳（9m）	横穴	3.50	210	71	100	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪・刀子・西種目輪・羽扇	6c初
16. 小円石1号墳	伊香柄市置賀野	円墳（10m）	横穴	9.70	300	180	172	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪・刀子・西種目輪・羽扇	6c初
17. 二之子塚	利根郡境川町	前方後円墳（94m）	両袖	13.96	523	182	136	白石白石	○	○	○	縄垂木刀・輪・刀子・縄垂木刀・輪	6c初
18. 高瀬古墳群	利根郡境川町	前方後円墳（50m）	横穴	13.00	320	120	120	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪・刀子・縄垂木刀・輪	6c初
19. 佐久間古墳	利根郡境川町	前方後円墳（212.4m）	横穴	26.60	620	120	120	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪・刀子・縄垂木刀・輪	6c初
20. 西山古墳	伊香柄市高崎町	円墳（7m）	横穴	4.22	720	90	100	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初
21. 林坂古墳	伊香柄市高崎町	円墳（7m）	横穴	1.00	380	81	80	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初
22. 丹波古墳	伊香柄市高崎町	横穴	2.00	350	75	70	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初	
23. 遊馬塚古墳	伊香柄市高崎町	横穴	3.70	311	90	100	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初	
24. 有賀古墳	伊香柄市高崎町	横穴	4.80	222	91	130	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初	
25. 有賀2号墳	伊香柄市高崎町	横穴	4.24	202	120	120	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪	6c初	
26. 有賀1号墳	伊香柄市高崎町	横穴（12m）	横穴	4.21	203	21	150	川原石	○	○	○	縄垂木刀・輪・刀子・縄垂木刀・輪	6c初



第7図 古墳時代後期の主な古墳の分布

後期前半になると、前二子古墳に次いで柏川流域に中二子古墳(111m)が築かれ、鎌川流域には七興山古墳(150m)が築造される。七興山古墳は3段築成の墳丘で、墳丘の周囲には二重の周堀と中堤・外堤が巡る。近年のレーダー探査により、後円部に横穴式石室を持つことが明らかになっている。後期前半では断夫山古墳(151m:名古屋市)とともに今城塚古墳(181m:高槻市)に次ぐ規模で、東日本最大規模である。両古墳と相似墳であると指摘されており、上毛野地域の首長連合が共立した大首長の墓と評価される(若狭2011・2017ほか)。同時期には榛名山南麓に高塚古墳(65m)や、碓氷川下流域に八幡二子塚古墳(66m)などが一定の距離を置いて築造される。

後期後半

七興山古墳以降、匹敵する規模を持つ古墳は造られなくなるものの、80~100m級(Iクラス)の前方後円墳を頂点として、60~80m級(IIクラス)、50m級(IIIクラス)と墳丘規模の差を持った前方後円墳が上毛野地域一帯に多数成立する。右島和夫によると、それぞれのクラスの概数は、Iクラス19基、IIクラス10基、IIIクラス24基あり、前方後円墳築造の盛行が窺える。このような活発な前方後円墳造営は関東地方全体に共通してみられる傾向だが、60m以上の大型前方後円墳の築造は上毛野地域が突出している(白石1992、右島1992・2011、若狭2017・2018ほか)。

【西毛地域】 鎌川流域には笹森稻荷古墳(101m)が築かれる。後円部南側には牛伏砂岩等を使用した両袖式横穴式石室を設け、全長16m・玄室長7mと狹長な羨道を有する。井野川流域に綿貫觀音山古墳(97m)が築かれ、2段築成の墳丘には二重周堀が巡る。全長12.6m・玄室長8.1mの県内最大規模の石室で、玄室規模に比べて短い羨道が取り付く。奥壁及び壁面は五面加工した角閃石安山岩の削石を多石構成して構築する。旧利根川右岸には総社二子山古墳(90m以上)が築造される。2段築成の墳丘で、後円部及び前方部に石室を設ける。後円部石室は角閃石安山岩削石積石室で、綿貫觀音山古墳に類似した平面プランを取り、匹敵する規模を持つ。

【中毛地域】 旧利根川東岸には天川二子山古墳(104m)がある。墳丘は2段築成で、周囲には幅の広い周堀が巡る。埋葬主体部は不明ながら、北方600mの位置に相似形をなす不二山古墳(56m)があり、角閃石安山岩削石積石室を持つ。柏川流域には前二子古墳や中二子古墳に続き後二子古墳(85m)が築かれる。2段築成の墳丘で、広い基壇テラス面を持つ。埋葬主体部は大ぶりな山石を用いた両袖式横穴式石室である。石室前面には溝状の墓道を設け、墓道周囲からは土器類が出土している。荒砥川と旧利根川の合流点付近には安塙古墳(約80m)がある。早川流域には上潤名雙兒山古墳(90m)が築かれ、輝石安山岩の巨石を使用した大型石室を拥っていたとされている。

【東毛地域】 蛇川との合流地点付近の利根川北岸には九合村57号墳(95m)や同60号墳(110m)、割地山古墳(105m)がある。更に下流の利根川北岸には赤岩堂山古墳(90m)が築かれる。赤岩堂山古墳は2段築成の墳丘で、周囲には堀を巡らせた可能性がある。埋葬主体部は角閃石安山岩削石積石室で、平面プランは割地山古墳とともに顕著な胸張りを持つ。

これまで採用されなかった東毛地域まで横穴式石室が導入され、大型前方後円墳から小規模古墳まで受容される。地域により石室構築石材や構築方法に差異が認められ、若狭徹によりA凝灰岩切石積横穴式石室分布圏、B角閃石安山岩削石積横穴式石室分布圏、C自然石乱石積み巨石横穴式石室分布圏に整理されている(若狭2018)。A分布圏は群馬都南部から片岡郡南部、綠野郡にかけての地域で、中期後半に舟形石棺の石材として使用された凝灰岩を主な石室構築石材として使用する。笹森稻荷古墳を除くと漆山古墳(60m以上)や山名伊勢塚古墳(75m)、諏訪神社古墳(57m)と60m前後の前方後円墳を最上位とする。B分布圏は群馬中部から那波郡にかけての地域を分布圏とする。6世紀に榛名山の噴火により噴出した角閃石安山岩の削石を主要石材に用いて石室を構築する。角閃石安山岩を使用する石室は、土石流となって流下した旧利根川流域に広く分布しており、佐位都や新田郡、邑楽郡から埼玉県にも及ぶ。80~100m級の大型前方後円墳が各地に築かれる。A・B分布圏とも石材は軟質の在地石材の切石を用いる点で共通し、連動した現象とされる(若狭2018)。

B分布圏のうち、利根川と烏川の合流付近から上流の平野部に分布する角閃石安山岩を用いた石室は特に「角閃石安山岩削石積石室」と呼称され、平面プラン等の構造に共通性が認められる(右島1993・2010、2011ほか)。その特徴は下記のとおりである。

①石室開口部は2段築成の墳丘の1段目上面(基壇面)に設ける。

②6世紀第2四半期に噴出し、旧利根川を流下した榛名山角閃石安山岩を壁石構成材とする。

③積み上げられる壁石の背後の面を除く五面を削り加工している。

④両袖式石室が基本で、玄室に比べ羨道が目立つて短く、羨道・玄室とも前幅を奥幅が凌駕するプラン構成である。

⑤壁面は多石構成である。

⑥玄室プランは、矩形と胴張形の二者があり、後者の胴張の度合いは緩やかなものである。

「角閃石安山岩削石積石室」を持つ前方後円墳としては、旧利根川流域の總社二子山古墳や井野川流域の綿貫觀音山古墳のほか、旧利根川流域の不二山古墳や山王金冠塚古墳（56m）、大屋敷古墳（80m）、その下流に安堀古墳、阿弥陀古墳（50m）がある。鳥川流域には小泉大塚越3号墳（46m）、小泉長塚1号墳（約50m）などがあり、群馬都から那波都にかけて濃密に分布する。これらの中でも代表的な前方後円墳としては總社二子山古墳及び綿貫觀音山古墳が挙げられ、石室の規模・形状のみならず埴丘形状や規模、また副葬品として両古墳に納められた金銅装頭椎大刀など、多岐にわたって共通性が認められており、政治的な連携関係にあったことが想定されている（石川1981、右島1994ほか）。いずれも群馬都内に所在する大型前方後円墳であり、角閃石安山岩削石積石室を採用する地域圈の主導的な役割を果たしたものとみられる。

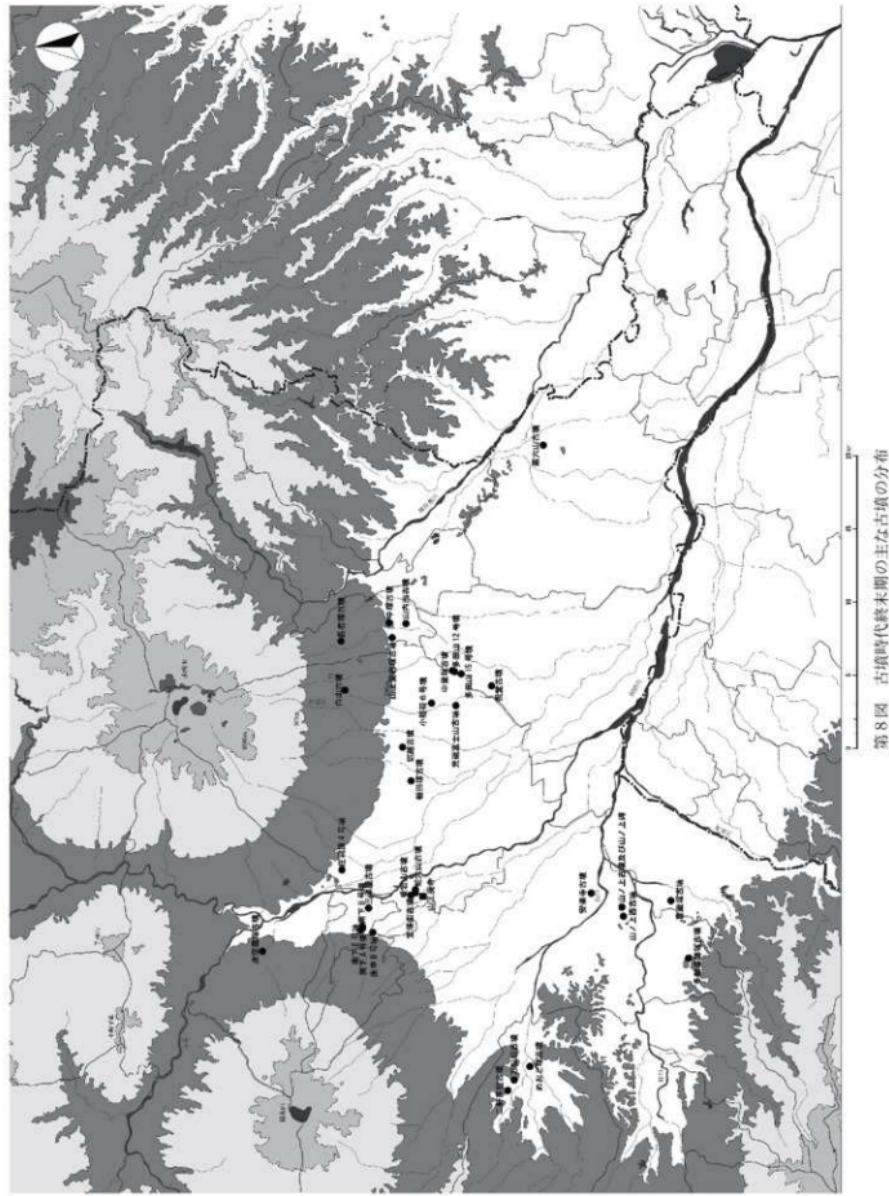
上毛野地域最終段階の前方後円墳は、C分布圏の碓氷川下流域に所在する八幡觀音塚古墳（復元長105m）である。片岡郡北部に位置し、4段築成の埴丘には二重の周塁が巡り、主体部は輝石安山岩の巨大な自然石を用いた巨石巨室横穴式石室である。石室からは豊富な副葬品から出土し、出土した須恵器の年代観から6世紀末から7世紀初頭の築造とみられる。埴輪を伴うとみられ、最終段階まで充実した前方後円墳の築造を行っていたことが分かる。

前方後円墳築造のピークを迎えた後期後半には、上毛野地域一帯で大型前方後円墳が築かれ、各地に大型古墳が林立していたが、その後の終末期の有力古墳へとスムーズな移行が確認できるのはわずかである。

終末期

東毛地域で後期後半から終末期へと円滑な移行が認められるのは、蛇川流域左岸の金山丘陵北東に所在する巖穴山古墳（方墳）である。一辺36.5mの方墳で、幅7mほどの周塁が巡る。埋葬主体部は複室構造の兩袖式横穴式石室で、全長11.7m、玄室長5.2mを測る。石室内から出土した須恵器や刀装具の年代観などから7世紀前半の築造とされ、總社古墳群の愛宕山古墳と並び方墳を採用した数少ない古墳である。近隣の金山丘陵には6世紀末築造の今泉口八幡山古墳（約60m）があり、石室内には東日本でも類例の少ない剣抜式家形石棺を安置する。地理的・年代的な関係から、本古墳は八幡山古墳から直接引き継いだものと指摘されている（右島2003ほか）。金山丘陵から八王子丘陵一帯では埴輪や須恵器生産が行われて広く供給されており、7世紀後半以降も大規模な鉄生産が行われ、これらの生産拠点を掌管した首長層の墓とみられる（右島2011ほか）。巖穴山古墳以降の有力墳は見当たらなくなる。

一方、西毛・中毛地域では、總社二子山古墳に続き、至近の場所に愛宕山古墳（方墳）が築かれる。一辺57mを測る3段築成の大型方墳で、川原石を用いて埴丘全体に葺石や敷石を施し、2・3段目埴丘斜面には二重の葺石を施す。埴丘の周囲には幅18.5mほどの堀を巡らせ、兆域は一辺94mに及ぶ。埋葬主体部は南側埴丘基壇面に開口した巨石巨室横穴式石室である。全長は9.28mと推定され、玄室奥壁寄りの位置には凝灰岩製の剣抜式家形石棺を配置する。兆域範囲や埴丘・石室規模など上毛野地域では群を抜いており、葺石や敷石などの埴丘構造も入念である。家形石棺も畿内のものに酷似したつくりであり、同時期では上毛野地域唯一で、東日本でも類を見ないものである。他の古墳とは一線を画した規模やつくりを持ち、ヤマト王権との強い連携のもと上毛野地域一帯を主導する地位を占めたと考えられる（右島1992・1994・2011ほか）。続く7世紀中葉には、愛宕山古墳の南方に宝塔山古墳（方墳）が築かれる。埴丘規模も一辆約60mを測る3段築成の大型方墳で、周塁を含めた兆域は一辆104mに及ぶ。南に開口した石室は截石切組積の巧みな石室で、石室内には漆喰が塗布される。玄室には愛宕山古墳同様剣抜式家形石棺が置かれ、石棺の脚部には格狭間が施されるなど仏教の影響が取看される。石室の平面プランは奈良市帝帶黃金塚古墳と酷似しており、同一の設計原理に基づき築造されたと指摘されている（右島2010・2011ほか）。總社古墳群最後の大型墳は、宝塔山古墳に隣接する蛇穴山古墳（方墳）である。埴丘規模は一辆約40mとやや縮小するものの、内外斜面に葺石を施した中堤を巡らせ、その外側に外周溝を巡らせており、兆域は一辆が92mを測る。南に開口した石室も、玄室奥壁、側壁、天井石を巨大な一石で石材を巧みに組み合わせ、宝塔山古墳同様石室全面に漆喰を塗布する。三代に渡って築造された大型方墳は、埴丘規模および形状、家形石棺の安置、漆喰の塗布など、上毛野地域の同時期古墳とは一線を画している。石材の加工技術としては古墳群南西に所在する山王庵寺との共通性が指摘されている。山王庵寺は、宝塔山古墳・蛇穴山古墳の築造が行われた7世紀後半に造営を開始したと考えられ、法起寺式の本格的な伽藍配置を持つ上毛野地域最古級の白鳳寺院である。總社古墳群の南西約1kmの至近の場所に位置しており、地理的な関係性や石材加工技術の共通性から、古墳と寺院の造営は同一首長の手によるもので、ヤマト王権の政治的な影響を受け



第8図 古墳時代終末期の主な占墳の分布

て事業が進められたと想定されている（尾崎1966、津金澤1983、右島1985）。

宝塔山古墳・蛇穴山古墳に代表される截石切組積石室を持つ古墳は、切組積手法があまり見られない山ノ上古墳（円墳）を初現的な例として、7世紀後半の西毛・中毛地域を中心に30基前後が確認されている（松本・桜場・右島1981、右島1993、横澤2005ほか）。

榛名山東南麓には、宝塔山古墳・蛇穴山古墳をはじめ、南下A号墳（円墳）、南下E号墳（円墳）、虚空藏塚古墳（円墳）、庚申B号墳（円墳）などがある。角閃石安山岩を使用する古墳が多く、天井石など輝石安山岩を併用する古墳も多い。石室規模や石材加工技術の精緻さのみならず、家形石棺や漆喰の塗布など総社古墳群の内容の充実が際立つ。また、南下A号墳には漆喰の塗布が確認され、宝塔山古墳・蛇穴山古墳以外では上毛野地域唯一の例である（朽津2006）。高度な石材加工技術も総社古墳群に通じ、政治的な関係性が想定される。碓冰川流域には二軒茶屋古墳（円墳）や万福原古墳（円墳）、めおと塚古墳（円墳）があり、比較的近い地域にまとまる。めおと塚古墳石室は複室構造を取り、使用石材は凝灰岩を主体とする。鍋川流域には多胡葦薺塚古墳（円墳）や多比良古墳（円墳）、喜蔵塚古墳（円墳）が築かれる。石室構築石材には牛伏砂岩や凝灰岩を用いる。烏川流域には山ノ上古墳・山ノ上西古墳（円墳）が近接して築かれ、凝灰岩を主要石材とする。鍋川との合流地点付近には安楽寺古墳があり、上毛野地域でも類例の少ない石棺式石室である。

赤城山南麓では、旧利根川東岸に上庄司原4号墳（円墳）、荒砥川上流域に堀越古墳（円墳）、下流域に小船荷6号墳（円墳）がある。早川上流域には中塚古墳（円墳）、長者塚古墳（円墳）、山内出古墳（円墳）、山上愛宕塚古墳（円墳）など塚丘規模の大きい古墳がまとまる。柏川下流域には中里塚古墳（円墳）や多田山12号墳（円墳）、多田山15号墳（円墳）などがある。使用石材はバラエティに富み、上庄司原4号墳、小船荷6号墳が角閃石安山岩と輝石安山岩、堀越古墳、中塚古墳、長者塚古墳、山上愛宕塚古墳が輝石安山岩、山内出古墳、中里塚古墳、多田山12号墳、多田山15号墳は凝灰岩を主要石材とする。

截石切組積石室を採用する古墳は、墳丘形状は円墳を主体とするものの、群集墳を構成する小円墳とは石室規模や石材加工技術において隔絶したつくりを持つ。構築石材には角閃石安山岩や輝石安山岩、牛伏砂岩、凝灰岩などが用いられ、南下A号墳の石室には漆喰が塗布されるなど特別な地位にあったことが推察される。中西毛地域に分布し、東毛地域には見られない。これらの古墳は、総社古墳群を頂点として再編成された各地の有力者層の墓と考えられる（右島1993・2003ほか）。

最終段階の前方後円墳である総社二子山古墳の築造を経て、終末期に三代に渡って大型方墳を築いた総社古墳群は上毛野地域の一元化を果たし、本格的な伽藍配置を備えた山王庵寺の造営を進めるなど時代の大きな転換点を迎える。総社古墳群の南方2kmほどの場所には上野国府推定地がある。これまでにも人形や「国厨」・「曹司」と記された墨書き器などが出土しており、近年の範囲内容確認調査により礎石建物などの官衙に間連するとみられる建物群が検出されている。建物群の性格や国府想定域の全体像の解明は今後の調査により明らかになると考えられるが、律令期になると総社古墳群を築いた勢力の拠点に国府や国分僧寺、国分尼寺などの重要施設が置かれ、古代の政治や経済、文化の中核地域として繁榮することとなる（右島2003ほか）。

表2 上毛野地域の主要な截石切組積石室（群馬県1981、右島1991・1992、横澤2005および各報告書より作成）

No.	古墳名	所在地	墳形・復原 (m)	石室 (m)	石室 (m)	石室 (m)	使用石材	備考	
1.	宝塔山古墳	前橋市鶴枝町	方墳(69)	両袖	1,204	332	290	209	角閃石安山岩・輝石安山岩・斑石安山岩・塊石構造・家形石棺・漆喰
2.	蛇穴山古墳	前橋市鶴枝町	方墳(39.5)	両袖	300	300	261	181	角閃石安山岩・輝石安山岩・漆喰
3.	小船荷6号墳	前橋市大室町	円墳(30)	両袖	667	336	193	181	角閃石安山岩・輝石安山岩・漆喰
4.	上庄司原4号墳	前橋市富士見町栗原	円墳(16)	両袖	524	280	194	181	角閃石安山岩・輝石安山岩・朱漆・水滲き
5.	堀越古墳	前橋市堀越町	円墳(25)	両袖	693	314	188	210	輝石安山岩
6.	中船荷古墳	前橋市新里町新田	円墳(35)	両袖	267	428	184	174	輝石安山岩
7.	牛伏砂岩古墳	前橋市新里町新田	円墳(27)	両袖	630	320	180	180	牛伏砂岩
8.	中里塚古墳	前橋市新里町武井	円墳(7)	両袖	712	350	203	200	輝石安山岩
9.	山上愛宕塚古墳	前橋市新里町山上	円墳(30)	両袖	(1,000)	(535)	187	187	輝石安山岩
10.	中里坂古墳	伊勢崎市山脇町今井	円墳(26)	両袖	590	305	170	170	輝石岩・輝石安山岩
11.	多田山12号墳	伊勢崎市本郷町今井	円墳(26.8)	両袖	600	320	(200)	125	輝石安山岩・凝灰岩
12.	多田山15号墳	伊勢崎市本郷町今井	円墳(28)	両袖	670	380	230	—	凝灰岩
13.	鹿児塚古墳	酒田市北原	円墳(13)	両袖	310	310	130	180	角閃石安山岩・輝石安山岩
14.	南上古号墳	吉岡町南上	円墳(27)	両袖	777	326	240	240	角閃石安山岩・輝石安山岩・漆喰・朱漆
15.	南上古号墳	吉岡町南上	円墳(17)	両袖	(434)	276	213	211	角閃石安山岩・輝石安山岩・朱漆
16.	山ノ上古墳	高崎市山ノ上町	円墳(14)	両袖	630	320	170	170	輝石安山岩・斑石安山岩
17.	御前塚古墳	高崎市御前町	円墳(14)	両袖	567	333	222	187	輝石安山岩
18.	山ノ上古墳	高崎市山名町	円墳(15)	両袖	740	270	180	166	輝石安山岩
19.	山ノ上西古墳	高崎市山名町	円墳(10)	両袖	630	270	195	166	輝石安山岩
20.	安楽寺古墳	高崎市倉賀野町	円墳	425	145	209	173	輝石安山岩	
21.	多胡葦薺塚古墳	高崎市吉井町吉井	円墳(23)	両袖	495	210	215	170	牛伏砂岩
22.	多比良古墳	高崎市吉井町多比良	円墳	554	268	225	190	牛伏砂岩	
23.	多胡塚古墳	高崎市吉井町吉井	円墳(20)	両袖	655	250	207	180	輝石安山岩・牛伏砂岩
24.	安樂寺古墳	高崎市吉井町吉井	円墳(20)	両袖	884	457	230	211	輝石安山岩・牛伏砂岩
25.	安樂寺古墳	安中山西秋田	円墳(20)	両袖	577	362	210	180	輝石安山岩・斑石安山岩
26.	万福原古墳	安中山西秋田	円墳(20)	両袖	708	281	214	—	輝石安山岩・斑石安山岩

第2項 古墳時代以降の総社古墳群

(1) 陵墓としての古墳—総社二子山古墳—

総社二子山古墳は、江戸時代後期の学者吉田芝溪の『上毛上野古墓記』（文化7年（1810）にて、豊城入彦命の副葬品を納めた場所とされている。この頃には陵墓としての認識ではなく、豊城入彦命の墓は愛宕山古墳に充てられている。元々この地は総社町の元景寺所有の畠地と榎家の墓地であったため、文政2年（1819）11月に墓穴を掘り起こす際に前方部石室が開口された。後円部石室の開口はこれに先立つとみられる（尾崎1971）。前方部石室の開口からその後の様子については『総社町誌』に詳細な記述がなされている（総社町1956）。開口の際には元景寺住職が立ち合い、石室内からは頭椎大刀をはじめ銘鏡や勾玉などが出土したとされ、元景寺住職より寺社役所に宛に差出書が提出された。思わず出土品や副葬品の内容から、これまで副葬品を納めた場所と考えられていた総社二子山古墳は、にわかに豊城入彦命の墓に充てられ、文政10年（1827）には前方部墳頂部に「正三位刑部卿藤原朝臣貞直證書」の「豊城入彦命」の碑が建立された。藤原貞直は、以前総社の地を訪れた高山彦九郎と親しい公卿の一人と推定されている。その後前橋藩より御陵係が任命され、周辺の墓地の多くは元景寺の西に移転し、古墳の周囲には柵が設置された。明治2年（1869）3月には松平大和守公用人鎌田才吉が、京都・弁事御役所に総社二子山古墳の修陵・祝典を求めている。

明治初期の陵墓政策は、すでに決定されている天皇陵を除き、皇后や皇子、皇女等の陵墓の搜索を中心に進められた。明治4年（1871）2月に「太政官布告」が出され、全国の府・藩・県に后妃・皇子・皇女の墓についての取調べが行われた（外池1995ほか）。これを受け、群馬県でも陵墓調査の動きが活発化し、明治7年（1874）10月総社二子山古墳を「豊城入彦命」の陵墓として教部省に申し立てたところ、翌年1月には墓掌・墓丁を置く旨が達せられ、陵墓として正式に治定された。しかし、地域でトラブルが発生し、墓掌・墓丁とも辞職する事態に至り、明治9年（1876）には陵墓の治定が自然解消されることになった。このトラブルは墓掌や墓丁の賃金に起因するものとされている（総社町1956）。その後、総社二子山古墳に代わる陵墓候補として、同様に陵墓の伝承を持つ大室古墳群に白羽の矢が立った。明治11年（1878）には前二子古墳や後二子古墳の石室調査が行われるなど、県を挙げての陵墓運動が進められたものの、治定には至らなかった。

昭和2年（1927）総社二子山古墳は史跡指定を受けている。昭和9年（1924）の陸軍大演習に伴って昭和天皇が来県したことを契機とし、群馬県では総社二子山古墳を陵墓とする運動が再び活発化する。また、昭和10年（1935）に県下一斎に行われた古墳の悉皆調査では、総社町11号墳として掲載され、墳丘長300尺、後円部高29尺、前方部高33尺と記録され、地目は御陵地、所有者は国と掲載されている。この段階でも、総社二子山古墳を豊城入彦命の墓に充てている（群馬県1938）。また、同年には東國経営業奉讃大会等の開催に伴って、本古墳にて古墳祭が実施されている（上毛郷土史研究会1936）。総社二子山古墳の陵墓治定は、宮内庁臨時陵墓調査委員会にて検討がなされたが、昭和11年（1936）6月の第9回総会にて「御治定ヲ仰クヘキニラス」として再度の治定には至らなかった（佐藤2021）。こうして陵墓としての役割を終えることとなるが、憩いの場として地域では親しまれ、桜が植えられていることから、総社二子山古墳で花見を楽しんだことのある住民も多い。



豊城入彦命石碑



総社二子山古墳古写真(前方部西側)



総社二子山古墳古写真
(南より 群馬大学提供)

第9図 総社二子山古墳石碑・古写真

(2) 信仰の場としての古墳—蛇穴山古墳—

昭和・平成・令和の発掘調査から、蛇穴山古墳は總社古墳群の最後を飾るにふさわしい規模と構造を備えた古墳であることが明らかになった。調査の過程で後世の変更の痕跡も確認され、古墳建築後も様々な形で利用されていることが推測された。墳丘上には宝鏡印塔や二十二夜塔が置かれ、玄室奥壁には寛文11年（1671）に江ノ島弁財天を勧請して弁天堂が置かれた旨が刻まれている。本項では変更の痕跡を確認し、文献史料等と併せ古墳建築後の利用の様子を検討したい。

1 遺構・銘文・石塔等

①溝状遺構

23トレンチでは、墳丘裾から中堤付近にかけて大きく溝状に掘り込まれている様子が確認された。掘り込みの大きさは上端幅で約9m、現地表面からの深さは2.5m以上を測る。暗褐色土を主体とした覆土はラミナ状の堆積が見られる事から、掘り込み内は冠水していたことが窺える。底面の検出には至らず、断面形状は把握しない。同じく幅広の深い溝状遺構は、墳丘東側（8・23トレンチ等）、墳丘北側（C・I・2・22トレンチ等）、墳丘西側（4・11・12トレンチ等）、墳丘南側（A・24トレンチ）で確認されており、溝状遺構は墳丘の周囲を広く開んでいるとみられる。溝状遺構は、墳丘裾部から中堤付近まで掘り込んでおり、場所によっては中堤に施された葺石を破壊している。古墳内堀が座地となっていた場所を再掘削していたことが想定されるが、24（A）トレンチでは1段目葺石の根石を残して、2段目葺石にかけて削平され、前底部まで掘り込みが及んでおり、南側は石室に近い位置まで掘り込まれている。遺構はAs-B軽石と崩落葺石とみられる川原石を多量に含む土層を切って構築されている。溝状遺構からの出土遺物は縄文土器や上師器、須恵器、近世陶磁器、近現代の陶磁器や瓦と、縄文時代から現代に及ぶ。24トレンチでは、近現代の遺物が多量に出土しているが、陶胎磁器や擂鉢、灯明皿、焰燈、瓦などの近世遺物がこれに次ぐ。また、23トレンチでも、出土位置は明瞭でないものの溝状遺構を中心に磁器や擂鉢、焰燈、瓦など近世遺物が多く出土している。

②石列・石敷き

23トレンチでは、3段目葺石の上面に切石やブロック状に荒く加工した石材を列状に配置した遺構が確認され、南北に延びることから墳丘東斜面に配置していたと考えられる。2石ほど外して確認したところ、石列下からの遺物の出土はなかったが、切石上面に接して焰燈や瓦等の近世遺物が出土している。また、25トレンチでは内堀覆土中層に大ぶりで扁平な自然石を列状に並べた石敷きが検出された。As-B軽石を含む覆土を切って構築されているが、遺構に伴う遺物は出土せず、構築時期は不明である。この他玄門上部には安山岩の岩塊が積み上げられて墳丘斜面の土留めとなっている。

③奥壁銘文

玄室奥壁には、蛇を象った梵字とともに、寛文11年（1671）に江ノ島弁財天より勧請して石室を弁天堂として祀ったことが刻まれている（總社町1956 第10図）。

光巖寺歴代住職には「法印嶺龍晋」の名は見えないが（總社町1956）、光巖寺の役職を持つ人物であろう。そして、「諸塙余力」とあることから、檀徒と協力して勧請を行ったと考えられる（飯塙聰氏ご教示）。

④石塔

墳丘北側は墳丘を改変して幅の狭いテラスを設け、2基の石塔が建つ。東には寛政元年（1789）の宝鏡印塔、西には天保2年（1831）の二十二夜塔が置かれる。また、墳丘南側の五千石用水沿いの場所には「蛇穴山弁財天」と刻まれた昭和43年（1968）の石碑があり、地元住民の名が刻まれている。

⑤墳丘

上記のほか現状で視認できる変更の痕跡が墳丘に残されており、石塔の位置するテラスより墳頂部に向かう斜面には川原石を用いた階段や斜面を保護する石積みが設けられ、テラス面より下位の北東隅の斜面にも石積みが確認できる。また、墳頂部も平坦面が広がっている。

2 文獻等に見られる変更の痕跡

調査で検出された遺構の性格を把握するため、文献等から後世の蛇穴山古墳の利用状況を見ていく。

①『神道集』

文和・延文年間に編纂された『神道集』には、「那波八郎大明神の事」として、八郎を夜襲して殺し、死体を石の

唐櫃にいれて、高井郷の鳥食池から東南方の「蛇食池の中島」にある「蛇塚の岩屋」に投げ込んだとの記載が見られる。総社町高井からは蛇穴山古墳は東南の方角に当たる。

②『伊香保記』

江戸時代初期（寛永16年（1639）の紀行文である『伊香保記』には光巌寺周辺の記述が見られる。

「又此寺（光巌寺）中に八郎権現 といふ御神のまたほんふ（凡夫）にておはせしませしとき、あに君達にそねまれてとちこめられさせ給ひしいわ屋あり と人のいへは、見むとて行けるに、年老いたる女のあなひしてみせまいらせんとて云々」

『神道集』には八郎大明神が投げ込まれた「蛇塚の岩屋」の記載があり、『伊香保記』では光巌寺に「八郎権現の岩屋」があったことが記されていることから、「岩屋」が蛇穴山古墳を指している可能性が高いと考えられる。また、『神道集』の成立段階で、蛇穴山古墳に「蛇」にまつわる伝承がすでにあった可能性がある。

③『山吹日記』

奈佐勝草による天明6年（1786）の紀行文である『山吹日記』には、光巌寺周辺の詳細な記述が見られる。宝塔山古墳について、墳頂部に秋元家歴代墓地が置かれていることや石室を「石のさまたぐいなし」と記した後に蛇穴山古墳の記載がある。

「此（宝塔山古墳）東の方一町あまり隔てまた高き所のうへに觀世音の御堂あり。其下にはも南に向しやうなる有。口のほうをつくろいかへて弁財天を安置せり。この觀世音の御堂のはつにやすらふ」

天明6年時点では、蛇穴山古墳の墳頂部に觀音堂が置かれ、石室に弁天堂が置かれていたことが分かる。

④総社史跡繪葉書

『上毛及上毛人』45号（大正9年）には「総社史跡繪葉書発行」の記事が掲載され、「双子山古墳を始め宝塔山、觀音山、愛宕寺の各古墳内石棺櫛」等の写真10枚組であった（上毛郷上史研究会1920）。その内の一枚とみられる写真には「觀音山古墳石棺入口」とタイトルが付された蛇穴山古墳石室入口の写真であり、墳頂部には2間四方の小堂宇が確認できる。大正9年時点では蛇穴山古墳は觀音山古墳と呼ばれていたことが分かる。また、写真が撮影されたのも絵葉書発行から大きさかのぼるものではないと考えられる。

『総社町郷土誌』（総社町役場・明治43（1910）年）には、「薬師堂 俗称觀音山上にある二間四方の一小堂宇にして中に薬師如来を安置」としており、明治時代末期に蛇穴山古墳の墳頂部には薬師堂が置かれていた。そして、『総社町郷土誌』刊行からあまり時を経ずして発行された絵葉書に写った小堂宇は、この「薬師堂」と考えられる。『上野国寺院明細帳』には、薬師堂について下記の記載があり、大正7年に薬師堂を光巌寺境内に移築している。

【薬師堂】「大正7年3月14日許可飛地境内仏堂薬師堂を本寺に合併せり」

本尊：薬師

由緒：不詳 堂宇：方二間 境内：808坪 官有地

また、『総社町郷土誌』には、「又觀音山には昔時觀音堂ありしが明治維新の際旧境内念佛堂取り壊し跡へ移転し念佛堂に変更す」、「觀音堂本尊は光巌寺本堂へ奉移」としており、『山吹日記』で記述された觀音堂は、明治初期に光巌寺境内に移転して、念佛堂となっている。

觀音堂はすでに消失しているが、薬師堂は光巌寺境内に現存している。

⑤奉安殿棟札

前橋市文化財保護課にて保管している奉安殿棟札には、昭和3年10月に奉安殿が竣工したことが記され、大工や左官、石工、総社町役場職員、町会議員、学務委員、小学校職員が名を連ねる。『上毛古墳綜覧』には、蛇穴山古墳の現況を「小学校 御真影奉安殿敷地」としており、蛇穴山古墳に奉安殿が置かれていた。また、古墳のスケッチには墳頂部に置かれた奉安殿が描かれている（群馬県1938）。

文献等から、江戸時代以降蛇穴山古墳は度々信仰の場として利用されていたことを知ることができ、第11図のとおりまとめることができる。

3 まとめ

觀音堂の建立年代は不明だが、『伊香保記』に記述が見られないことから、これ以降の時期に建てられたとみられる。『山吹日記』に見られるとおり江戸時代中期には觀音堂と弁天堂の2施設が古墳に置かれ、もとより「八郎権現」・「八郎大明神」がいたとされる蛇穴山古墳は、信仰の場として崇敬を集めていたことが推測される。

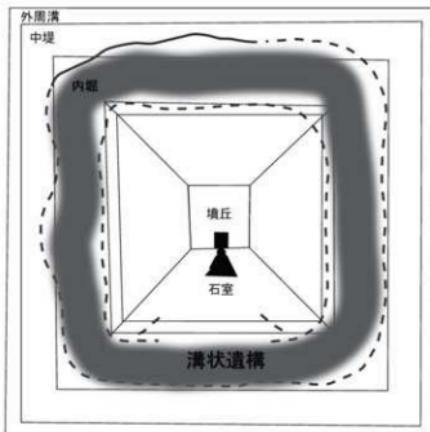
口口真言宗并財天造產所
 石室奥壁
 (力) 假住古口不如何代而
 依空造空
 (力) 諸境余力
 折口造被
 (力) 等
 楽文十一層
 黒 (力) 光大殿
 (力) 洗音
 当時代 (力) 三世靈者法 (傳) (七) に傳
 龍藏
 鮎面己
 江綱井天女洋殿



石室奥壁銘文



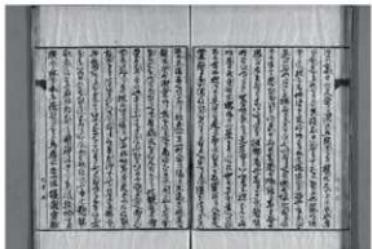
石室入口と墳頂部の薬師堂



溝状遺構の範囲



溝状遺構 (23 トレンチ)



山吹日記（国立国会図書館デジタルコレクションより）



奉安殿棟札（昭和3年）



古墳スケッチ（墳頂部に奉安殿）
 （群馬県教育委員会 2017 より）



蛇穴山弁天石碑（昭和43年）

第10図 蛇穴山古墳の後世の利用に係る資料

調査によって検出された溝状遺構では、近世遺物が比較的多く出土し、23トレンチの石列でも遺構に接して近世の遺物が出土している。また、As-B 軽石を含む土層を切って溝状遺構が構築されており、中世以降の所産と考えられる。そして、上端幅 9 m 以上、深さ 2.5 m 以上の規模を持つ大規模な遺構であることを考えると、寛文 11 年に勧請した弁天堂の整備に伴って構築された「弁天池」であったことが推定される（近藤 1991）。『国史大辞典』によると、弁天は古代インドの聖なる河川の女神とされ、『金光明最勝王経』により日本に伝えられた。民間では伎芸天と見られ琵琶を持つ天女として描かれ、市杵島姫や宇賀神などと混合し、蛇を弁天の神使としたとされる（中村 1991）。弁天池は弁天信仰に由来し、堂宇の周辺に池や湖を置き、日本各地に所在する。「出流原弁天池」は、藤原秀郷が勧請したと伝える弁天堂に接し、栃木県天然記念物に指定されている。弁天堂が失われた時期は不明であるが、光巣寺には弁天堂に安置されていたとみられる木造の宇賀神像が祀られているという（近藤 1991）。また、墳頂部に觀音堂や薬師堂が置かれていたことや推定される遺構の構築年代などから、石列や墳丘北側に構築された石積みや階段も、その整備に伴って構築された可能性が高い。近世に信仰の場として盛んに利用された蛇穴山古墳は、明治時代以降徐々に信仰の場との認識が薄れるものの、奉安殿が置かれるなど、神聖な場としての認識は明治期以降も残り続けたと考えられる。

なお、『神道集』には「蛇食池の中島」と池の中にある島として蛇穴山古墳が描かれており、溝状遺構の構築年代が中世にさかのぼる可能性も考えられるが、これまでの調査では中世の遺物の出土は少なく、現段階では溝状遺構を近世の所産と考えたい。古墳内堀が中世段階でも埋没しきらずに崖地として残り、何らかの要因で水がたまつことから池に浮かぶ中島のように見えたと考えられる。



第11図 蛇穴山古墳利用の変遷

第3節 史跡指定

總社二子山古墳

内務省告示第三百十五号

史跡名勝天然記念物保存法第一条ニ依リ左ノ通指定ス

昭和二年四月八日 内務大臣 濱口 雄幸

第一類

史蹟

名称 二子山古墳

地名 同群馬郡總社町大字植野字二子山

地域 三六八番

宝塔山古墳

文部省告示第千八十号

史跡名勝天然記念物保存法第一条ニ依リ左ノ通指定ス

昭和十九年一月十三日 文部大臣 二宮 治重

第一類

史蹟

名称 宝塔山古墳

地名 群馬県群馬郡總社町大字總社字町屋敷南

地域 一六〇六番

【追加指定】

文部科学省告示第百六十九号

文化財保護法（昭和25年法律第二百十四号）第百九条第一項の規定に基づき、次の表の上欄に掲げる史跡に同表の下欄に掲げる地域を追加して指定したので、同条第三項の規定に基づき告示する。

令和三年十月十一日 文部科学大臣 末松 信介

上欄 名 称 宝塔山古墳

関係告示 昭和十九年文部省告示第千八十号

下欄 所 在 地 群馬県前橋市總社町大字總社字町屋敷南

地 域 一五八三番二のうち実測一七〇、三二平方メートル、一五八三番三のうち実測五八四、六七平方メートル、一六〇二番七、一六〇三番四

備 考 一筆の土地のうち一部のみを指定するものについては、地域に関する実測図を群馬県文化財担当部局及び前橋市文化財担当部局に備え置いて縦覧に供する。

蛇穴山古墳

文部省告示第百七十六号

文化財保護法（昭和25年法律第二百十四号）第六十九条第一項の規定により、次の表に掲げる記念物を史跡に指定する。

昭和四十九年十二月二十三日 文部大臣 永井 道雄

名称 蛇穴山古墳

地名 群馬県群馬郡總社町大字總社字町屋敷南

地域 一、五八二番ノ二

【追加指定】

文部科学省告示第百六十九号

文化財保護法（昭和25年法律第二百十四号）第百九条第一項の規定に基づき、次の表の上欄に掲げる史跡に同表の下欄に掲げる地域を追加して指定したので、同条第三項の規定に基づき告示する。

令和三年十月十一日 文部科学大臣 末松 信介

上欄 名 称 蛇穴山古墳
関係告示 昭和四十九年文部省告示第百七十六号

下欄 所 在 地 群馬県前橋市総社町総社字町屋敷南
地 域 一五八三番二のうち実測一七六.四〇平方メートル、一五八三番三のうち実測一二〇八.六五平方
メートル、一五八三番五、一五八四番一、一五八七番一

備 考 一筆の土地のうち一部のみを指定するものについては、地域に関する実測図を群馬県文化財担当
部局及び前橋市文化財担当部局に備え置いて綴覧に供する。

第4節 関連遺跡の概要

第1項 山王庵寺

1はじめに

山王庵寺は、総社古墳群の南西1kmほどとの近接した位置に所在し、7世紀後半の創建と考えられる古代寺院遺跡である。

総社古墳群と山王庵寺は、その位置や造営時期から、直接的関係性があるとみられている。特に、山王庵寺の造営と並行して7世紀中葉以降、相次いで築造された宝塔山古墳と蛇穴山古墳にみられる石材加工や石室構築技術については、山王庵寺の塔心礎や塔心柱根巻石、石製鷲尾などの石造物の加工技術との共通性が指摘されている（尾崎1966、右島1985）。また、宝塔山古墳の家形石棺の脚部には仏具にみられる格狹間が施されており、仏教文化の影響が色濃くみられる。これらのことから、山王庵寺は、宝塔山古墳や蛇穴山古墳の被葬者と同一の首長層によって造営されたと考えられている。

さらに、山王庵寺の南西には上野国分僧寺・尼寺が、南東には上野国府推定地が存在する。このように、山王庵寺は、古墳時代終末期から律令期に至る時期における上野国を中心とした寺院であり、該期における地方豪族の地域支配の変遷や中央政権との関係性などを考える上で、総社古墳群とともに重要な遺跡である。

2 山王庵寺の発見と調査

寺院跡の存在は大正年間の初めころに、塔心礎が偶然発見されたことにより明らかとなった。塔心礎は大正10年（1921）に福島武雄による調査が行われ、昭和3年（1928）には「山王塔跡」として国史跡に指定された。周辺からは、その後も石製鷲尾や塔心柱根巻石などの石造品、塑像、綠釉陶器のセット、佐波理鏡、金銅製飾り金具、大量の瓦など、寺院に関連する遺物が続々と発見された。

前橋市教育委員会では、昭和49年（1974）から昭和56年（1981）まで7次にわたる本格的な発掘調査を実施した。この調査では、塔跡の西側から金堂と考えられる基壇跡を検出したほか、「放光寺」と篆書きされた平瓦が出土するなどの成果があった。また、平成9年（1997）から平成11年（1999）にかけて、山王庵寺周辺の下水道敷設に伴う調査を実施した。この調査では、埋納坑から3,000点を超える大量の塑像が出土したほか、塔跡・金堂跡の北側から講堂跡と考えられる基壇跡を検出した。

これらの調査成果を受け、前橋市教育委員会では平成12年度に、山王庵寺及び関連遺跡を調査し、保存・整備の方策を立てることを目的として山王庵寺等調査委員会を設置し、同委員会の指導のもと、平成18年（2006）から平成22年（2010）までの5か年計画で範囲確認調査を実施した。その結果、講堂に接続する回廊跡の検出や寺院下層の基壇建物跡の検出などの成果があった。また、平成20年（2008）3月には、史跡名称が「山王庵寺跡」に変更されるとともに、史跡範囲が約215mから約8,277mに拡大された。

3 山王庵寺の伽藍

これまでの発掘調査により、山王庵寺の伽藍配置は東に塔、西に金堂が並ぶ法起寺式の伽藍配置であり、塔・金堂の北に講堂が配置され、回廊が講堂に取り付くことが分かっている（第12図）。

塔の基壇は、一辺13.6mで、丁寧な版築によって構築されており、瓦積で化粧されている。基壇の周囲は白色粘土と玉石で整地され、この整地層の下から皇朝十二錢の隆平永寶（延暦15年（796）初鑄）と富壽神寶（弘仁9年（818）初鑄）が出土している。このことから、9世紀以降に寺地の大規模な改修が行われたものと考えられる。基壇高は、現存する版築層の最上面と基壇周囲の整地層面の比高差から0.6m以上と推測され、心礎上面は整地層面とはほぼ同じレベルであることから、地下式心礎であったとみられる。

金堂の基壇は、東西22.0m、南北16.4m以上で、上部に白色粘土、下部に黒色土を用いて丁寧に版築され造られている。周辺からは角閃石安山岩の切石が多数出土しており、切石積基壇であったことが推測される。

そのほか、講堂の基壇規模については東西37.8m、南北24.5mと推測され、講堂に接続する回廊については東西79.7m、南北81.0mの規模で、建物幅3.6mの單廊式の回廊であることが分かっている。また、塔の北、約110mの場所で桁行9間、梁間3間で南北に庇がつく東西棟の掘立柱建物跡が検出されており、僧房又は食堂の可能性が考えられている。なお、これまでの調査では寺域を画する溝や築地などの区画施設は確認されておらず、寺域の範囲については不明である。

4 出土瓦からみた山王庵寺の年代

創建期のものとみられる軒丸瓦は、單弁八弁蓮華文軒丸瓦（I式）と隆起線八弁蓮華文軒丸瓦（II式）で、これら2種の軒丸瓦の年代観から山王庵寺の創建年代については、概ね7世紀後半とする説が有力である（石川1987、松田1991）。これら創建期の瓦の出土点数は少なく、この時期に建造された建物が限られたことを示唆している。創建につづく時期の軒丸瓦は、複弁七弁蓮華文軒丸瓦（III式）及び複弁八弁蓮華文軒丸瓦（IV式）であり、7世紀末から8世紀前半まで使用されたと考えられる（栗原2011）。III式・IV式の軒丸瓦の出土点数は飛躍的に増加することから、この時期に山王庵寺の伽藍が整備され、完成に至ったことを窺わせる。

8世紀後半以降になると、上野国分寺出土の軒丸瓦と同様のもの（III式など8種が確認されている。）が使用されるようになる。官寺である国分寺の瓦と同一の瓦が山王庵寺にも供給されたことは、山王庵寺が国分寺と同様に国司の管轄下に置かれ、定額寺として官寺に準じた扱いを受けていたことを示している。

5 塔本塑像

平成9年度と平成11年度の調査で、金堂跡の南西約50mの地点から塑像や瓦などが大量に納められた埋納坑が検出された。埋納坑は、東西11.6m以上、南北7.8m以上の規模で、覆土は遺物の出土状態から大きく3層に分層され、埋納行為は複数回に分けて行われたものと考えられる。埋納坑からは、壁画や壁体片などを含め3,000点以上にも及ぶ塑像片のはか、多量の瓦や金属製品、土器などが出土しており、その多くは火を受けている。また、これらの遺物と併せて炭化物も出土していることから、埋納坑は火災を受けた塔の遺物や資材が納められたものとみられ、その形成時期は出土した土器の年代観から10世紀後半と考えられる（前橋市埋蔵文化財発掘調査団2000、松田ほか2020）。

埋納坑から出土した塑像は、仏像をはじめとする人物像・動物像などと、器物、雲、山岳・礎形などに大別され、数量的には9割以上を山岳・礎形が占める。人物像としては如来・菩薩・神将の仏教尊像、裸形又は袈裟を付けた羅漢像、邪鬼とみられる裸形像、婦女や胡装の俗人像などがあり、動物像としては猪の頭部や駒馬の前足部とみられる断片がある（第15図）。なお、8の「女性像A頭部」は昭和34年（1959）に地元収集家によって塔付近から収集されたもので、埋納坑出土の9の「女性像B頭部」と髪の結い方が左右対称をなしている。

松田誠一郎氏による分析の結果、これらの塑像群は、仏教的な主題に基づいた山岳表現を伴う群像を構成していたことが想定でき、同様の山岳表現を伴う法隆寺塔本塑像などの比較から塔の初層に安置された塔本四面具であることが判明した。松田妙子氏の考察によれば、山王庵寺の塔本四面具は①如来・菩薩の存在から說法の場面、②俗人の存在から仏伝を含む仏教説話に由来する場面、③猪の存在から仏伝中の降魔成道の場面、④塔であることから鑑みて涅槃の場面があると推定し、これらの主題は法隆寺塔や薬師寺塔の場面選択と通じており、日本古代の塔本四面具の主題を考える上で興味深いとしている。

また、松田誠一郎氏は山王庵寺の塑像について、7～8世紀の中央における作例と共に用いられており、法隆寺や薬師寺の塔本塑像と比較しても全く遜色なく、その高い製作水準から作者は中央から派遣された官営工房系の仏工と考えられるとした。そして、その造像には中央における造形・技法の展開がほぼリアルタイムで反映されているとみられることを前提として、製作年代は神将像の甲制などから概ね730年代前後と考えられるとした。

このように山王庵寺の塔本塑像は、中央からの直接的な技術援助を受けて造られたものであり、總社古墳群の大型方墳と同様、造営氏族と中央政権との密接なつながりをうかがわせる資料である。

6 「放光寺」銘瓦と文献史料

昭和54年（1979）の調査で、塔と金堂の間から「放光寺」と篆書きされた平瓦が出土し、山上碑と『上野国交替実録帳』（以下『実録帳』）にみられる「放光寺」との関連性が考えられるようになった。

山上碑は高崎市山名町に所在し、その東側には終末期古墳である山上古墳が隣接する。碑文には、「辛巳歳（681年）集月（10月）三日」に「放光寺僧」である「長利」が、母の「黒亮刀自」のために記し建立した碑であることや、長利母子の出自系統などが記述されている。『実録帳』は、長元3年（1030）に国司交替の際に作成された不与解由状の草案とみられる文書で、現在、東京国立博物館が所蔵する九条家本『延喜式』の紙背に書かれているものである。その「定額寺項」に「放光寺、件寺、依氏人申請不為定額寺、仍除放已了者」との記述があり、氏人の申請によって放光寺が定額寺の寺格から除かれたことを記している。

山上碑及び『実録帳』にみえる放光寺が同一の寺院であると仮定すると、放光寺は少なくとも681年から11世紀前

半頃まで存在していた寺院ということになる。一方、発掘調査や出土瓦の研究によれば、山王庵寺は、7世紀第Ⅲ四半期に創建され、天仁元年（1108）の浅間B軽石降下前に廃絶したことが分かっている。また、『実録帳』によると放光寺は定額寺の寺格を有していたことになるが、山王庵寺で8世紀後半以降に使用された軒丸瓦は上野国分寺のものとの同范であり、このころの山王庵寺は公的性格を有する定額寺であったことが推測される。さらに、『実録帳』によれば11世紀前半頃までに放光寺は定額寺の寺格から離れたこととなるが、その背景には、伽藍が荒廃し、寺院の維持管理が困難となっていたことがあったものと推測される。発掘調査によれば塑像埋納坑の形成時期は10世紀後半であり、この時期に山王庵寺の主要伽藍が焼失し、寺院衰退の一因になった可能性があり、『実録帳』の定額寺除外の背景と符合する。

このように、文献史料にみられる「放光寺」と発掘調査などの成果から明らかとなっている山王庵寺については、その存続時期や性格などの点において整合性がみられることから、両者を同一の寺院とする考え方方が一般的である（松田1984）。

7 山王庵寺下層の建物群

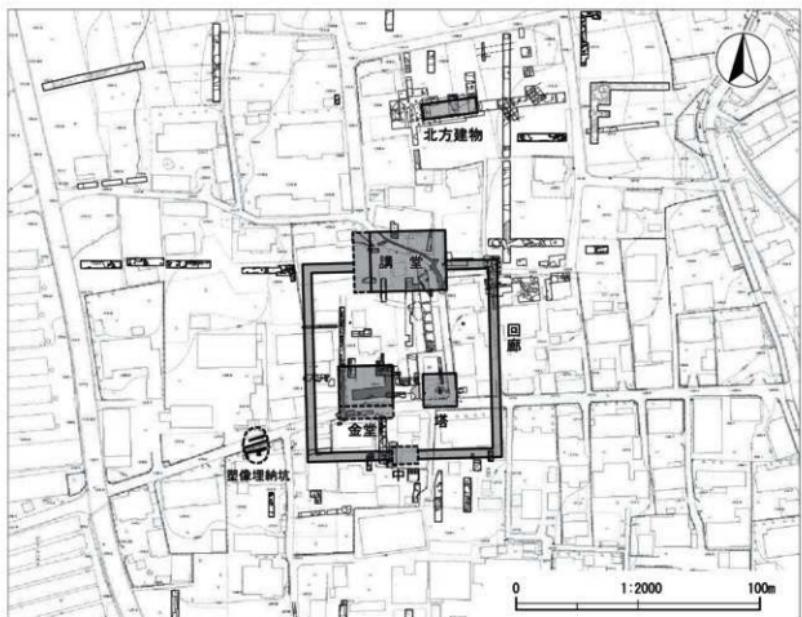
これまでの調査で、主軸方位が寺院と異なる建物群が検出されており、寺院下層（山王庵寺創建以前）の建物跡とみられている（第14図）。これまでの調査で、寺院下層とみられる建物跡は掘立柱建物14棟、礎石建物2棟が確認されており、これらの建物のほとんどは、主軸方向が座標北に対し西に32~33度振れる。下層建物群については、屯倉、上毛野氏の居宅又は前期群馬評家の伴う遺構などと考えられてきた。

須田勉氏は、「下層建物群の性格を検討するにあたって、一部の建物跡の柱穴や地業中又は地業下から瓦が出土していることに注目している（須田2013）。掘立柱建物ではSB3とSB16で柱穴底面から礎板として使用された平瓦が出土し、礎石建物ではSB19の掘込地業下から瓦敷遺構が、SB20の掘込地業中から円形の瓦敷が2か所検出されており、これらは瓦は、最も古い創建期の軒丸瓦（I式・II式）と同時期のものである。このことから、山王庵寺の下層にも寺院（前身寺院）が存在し、かつ、その創建は下層建物群と同時期である可能性が考えられる」と、下層建物群は、群馬評の立評に伴って新造された実務官衙や倉、前身寺院によって構成された前期評家の遺構と考えられるとしている。そして、前身寺院の関連遺構は未発見であるものの、創建期の軒丸瓦（I式・II式）は前期評家に伴う前身寺院に使用され、後期評家又は初期都家の造営時に新造された山王庵寺の金堂と塔に再利用された可能性が高いとしている。

いずれにしても、山王庵寺の下層建物群は、山王庵寺の創建と密接にかかわる遺構であり、山王庵寺の性格のみならず初期地方寺院の実態や地方官衙の成立を考える上でも重要な遺構である。

【主要参考文献】

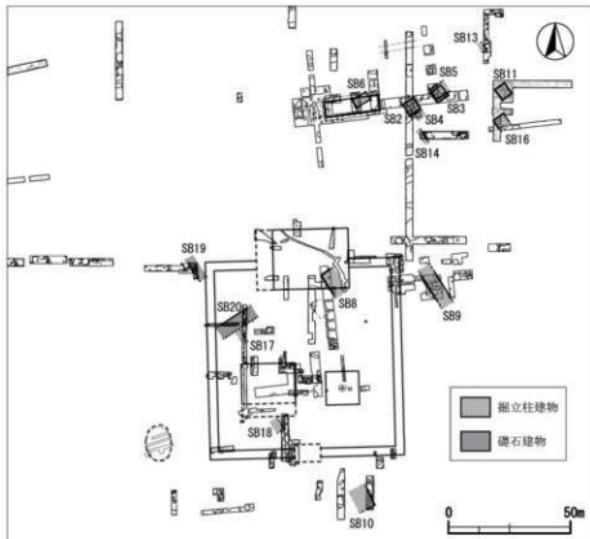
- 石川克博 1987 「山王庵寺の創建期について—素井八葉蓮華文軒丸瓦をめぐって」群馬県史編さん委員会『群馬県史研究』26
右島和夫 1985 「前橋市社古墳群の形成過程とその画期」群馬県史編さん委員会『群馬県史研究』22
尾崎喜左雄 1966 「横穴式古墳の研究」吉川弘文館
栗原和彦 2011 「W[出土瓦]」前橋市教育委員会『山王庵寺—平成21年度調査報告』
須田 勉 2013 「上野国群馬郡家（山王庵寺の下層建物群）」須田勉ほか『東国の大古官衙』高志書院
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000 「山王庵寺—山王庵寺等Ⅴ遺跡発掘調査報告書」
松田誠一郎ほか 2020 「山王庵寺埋納坑から出土した塑像について」前橋市教育委員会『年報第50集 令和元年度文化財調査報告書』
松田 猛 1991 「上毛野における古代寺院の建立—山王庵寺創建期軒丸瓦の再検討」信濃史学会『信濃』43-4
松田 猛 1984 「山王庵寺の性格をめぐって」群馬県史編さん委員会『群馬県史研究』20



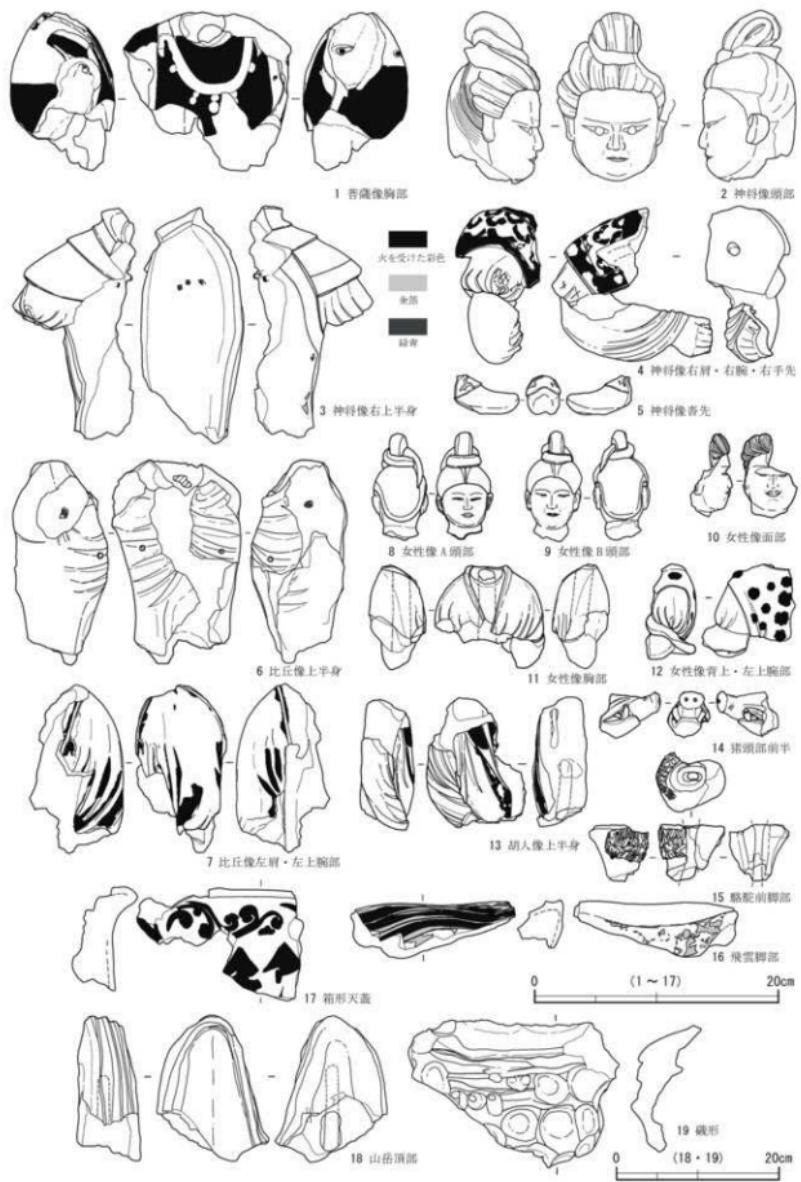
第12図 山王庵寺伽藍配置図



第13図 山王庵寺の軒丸瓦



第14図 山王庵寺の下層建物群



第15図 山王庵寺の塑像

第2項 推定上野国府

1 上野国府推定地の調査

前橋市元総社町は、古くから上野国府推定地とされてきた。国府推定地は前橋台地から榛名山東南麓に移行する地域にあり、西を染谷川、東を牛池川に挟まれた場所に位置する。元総社地区からその北方の總社地区にかけて縄文時代以降多くの遺跡が点在し、總社地区を中心に5世紀後半から7世紀後半にかけての首長墓群である總社古墳群が分布する。また、7世紀後半には總社古墳群南西約1kmの位置に山王庵寺が造営される。国府推定地周辺では、8世紀代になると上野国分寺・國分尼寺が建立される。總社地区から元総社地区にかけては古墳時代から古代にかけて上野国における政治や文化の中心地として栄えた地域である。

上野国府の位置については、『倭名類聚抄』の記述や地元の伝承も存在するが詳細は不明である。上野国府の位置に関する考察は戦前から発表されてきたが、戦後になって活発な議論が進展する。昭和36年（1961）の元総社小学校校庭遺跡の調査を皮切りとして、昭和40年代には上野国府解明のための発掘調査も行われた。その後昭和50年代以降元総社町周辺で開発に伴う発掘調査成果が蓄積され、国府関連と推定される遺構や遺物の検出が増加してきた。また、近年区画整理事業をはじめとした元総社地区での開発が進展してきたことから、平成23年（2011）より上野国府等範囲内確認調査を実施しており、本年で3期の3年目（13年目）になる。

2 検出された官衙関連遺構と遺物

（1）遺構

①掘立柱建物跡 元総社小学校のほか宮鍋神社周辺や總社神社西方で多く検出されている。元総社小学校校庭遺跡では現在までに6棟分の建物跡が確認されているが、その規模や位置などから、時期差をもって建てられたと推定される。掘立柱建物跡とみられる柱穴列は、元総社小学校校庭北側に位置する總社神社西側周辺の調査でも数地点で検出されている。このほか、鳥羽遺跡H区H1号掘立柱建物跡は、櫛列と二重の溝で囲まれており、神社跡と推定されている。

②掘込地業を持つ礎石建物跡 磂石建物跡は、牛池川右岸の段丘上に位置する宮鍋神社周辺で確認されている。これまでに10棟が確認されており、總地業建物跡と布地業建物跡がある。總地業建物跡は地業の規模が1辺約13mの正方形を呈す。布地業建物跡は東西に長い長方形を呈し、東西約13m、南北約8mを測る。これらの礎石建物跡は主軸方向を揃え、規則性をもって検出されている。

③区画溝 閑線樋遺跡での検出以降、元総社地区内の複数地点で区画溝が連続的に確認されているが、区画する施設やその形状などは不明な点も多い。これらの区画溝は断面逆台形で、確認面での上端幅約4m、深さ約2mを測る。出土遺物から10世紀代には廃絶したと見られ、As-B軽石の一次堆積層が認められる地点もある。

掘立柱建物跡、礎石建物跡、区画溝とも主軸方向や走行方向により大別され、A正面位を意識したもの、B北から西に13~19°の傾きを持つもの、C独自の走行を持つものの三者に大別される。礎石建物が集中する宮鍋神社周辺ではBの傾向が強く、宮鍋神社周辺より南の地域ではAが多い。なお、Cについては時期的に最も先行することが想定される。

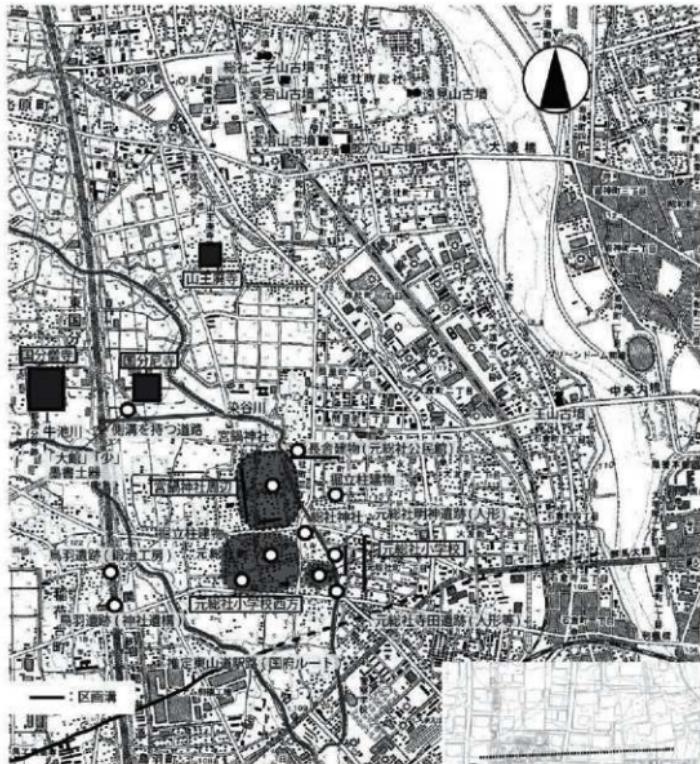
（2）遺物

代表的な国府関連遺物としては、牛池川の河川改修の際に出土した人形や畜車（元総社明神遺跡）、「国」「国厨」「曹司」などの墨書き土器（元総社寺田遺跡）が出土している。この他墨書き土器としては元総社小学校校庭で検出された区画溝から「大家」、上野国分尼寺南西の住居跡から「大館」「少」（元総社蒼海遺跡群（26））が出土している。

この他宮鍋神社周辺から元総社小学校付近の牛池川右岸の地域では、綠釉陶器や白磁などの陶器片のほか、土師器に質感の似た白色で粗粒な胎土を持つ高环や鉢が出土している。いずれも10世紀代の所産と見られる。特に高环は、环部の底部に穴をうがって脚部と貫通したつくりで、同時期の都で使用された高环を模したものと考えられる。平安後期の上野地域の人々の生活を知る上で重要な資料である。

3 おわりに

掘立柱建物跡や礎石建物跡の検出例も増え、区画溝の方向も点から線で把握されるようになってきた。特に宮鍋神社周辺の掘立柱建物や礎石建物はその配置も追うことができるようになり、建物群に伴うと考えられる区画溝も含めて、面的な把握も近づいてきている。上野国府の解明には時間を要するが、次第に様相が明らかになりつつある。

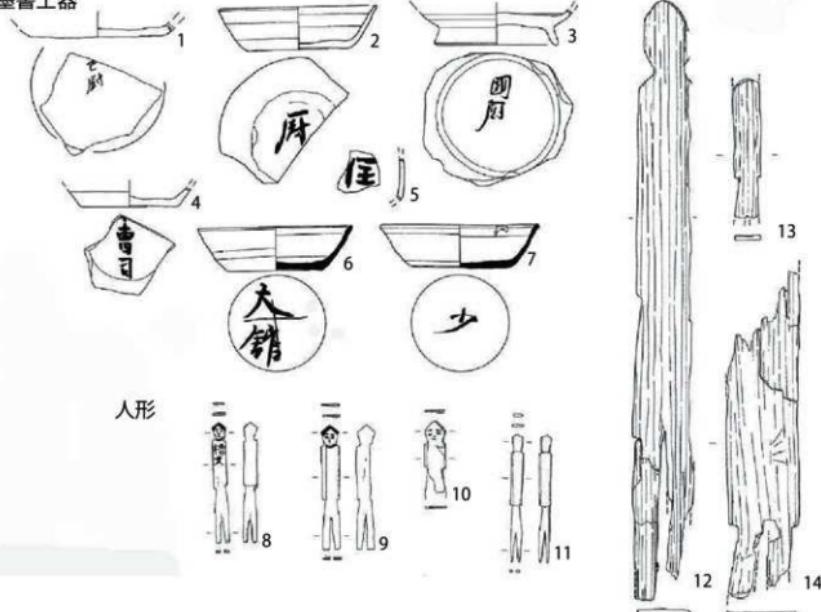


第16図 上野国府推定地の様相



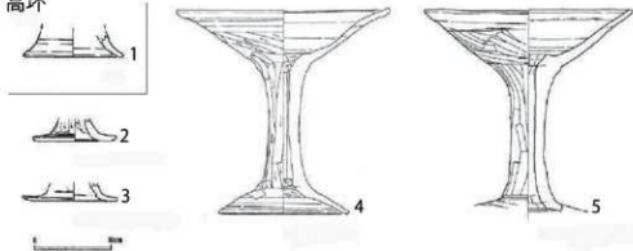
第17図 宮鍋神社周辺の様相

墨書き土器

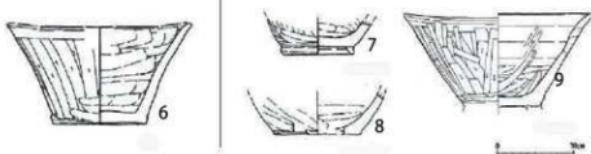


1: 元總社寺田遺跡 I 2 ~ 5・8 ~ 11: 元總社寺田遺跡 III 6・7: 元總社蒼海遺跡群 (26) 12 ~ 14: 元總社明神遺跡Ⅲ
第18図 上野国府関連遺物 1 (墨書き土器・人形)

高杯



鉢



1・6 ~ 9: 上野国府推定地 2・3: 元總社蒼海遺跡群 (146) 4: 元總社蒼海遺跡群 (99) 5: 伝総社小学校校庭
第19図 上野国府関連遺物 2 (土師質土器)

第3章 総社古墳群調査研究略史

宝塔山古墳や蛇穴山古墳をはじめとする総社古墳群の各古墳については、『伊香保記』（寛永16年（1639））や『山吹日記』（天明6年（1786））などの近世の紀行文に記述がみられ、『神道集』（文和・延文年間編纂）にも蛇穴山古墳と考えられる記載が残る。墳墓としての調査・検討は、江戸時代中期～後期の国学者吉田芝溪（1752～1811）の『上毛上野古墓記』（文化7年（1810））をその嚆矢とする。愛宕山古墳・宝塔山古墳・蛇穴山古墳の見聞記で、墳丘や石室の詳細な観察と測量を行っている。また、石室観察では、石材の加工度合による分類がなされ、石室構築方法や規模、『日本書紀』の記述から各古墳の被葬者が比定されており、愛宕山古墳を豊城入彦命の墓に、宝塔山古墳を彦狹島王の墓に、そして蛇穴山古墳を御諸別王の墓に充てている。また、愛宕山古墳に隣接する総社二子山古墳を、愛宕山古墳に眠る豊城入彦命の副葬品を納めた場所とする。吉田芝溪による、石室構造や石材加工の精緻な観察と測量は、図化こそされなかったものの、「『プレ遭構図』ともいべき具体性を備えている」と評価される（岸田1997）。

総社二子山古墳は元景寺の墓地として利用されており、文政2年（1819）墓穴を掘削したところ、前方部石室が開口して豊富な副葬品が出土した。これを受け、総社二子山古墳はにわかに豊城入彦命の墓に充てられることとなり、文政11年（1828）には前方部墳頂部に「豊城入彦命」の石碑が建立された（総社町1956）。石室内からは様々な副葬品があり、出土品の様相は元景寺からの差出書に記述されている。その後山崎衡『三王墳墓略記』（1885）や八木鷺三郎『日本古墳考』（1898）で総社二子山古墳出土品に関する記述がみられるが、後円部石室がすでに開口していたこともあり、各石室の副葬品の詳細な組成は判然としない。

明治期までの総社古墳群の調査・研究は、吉田芝溪により詳細な観察がなされているものの各古墳の被葬者の比定に主眼が置かれ、その中で総社二子山古墳の陵墓治定や解除がなされた。その後大正9年（1920）の福島武雄による宝塔山古墳石室の測量調査をはじめとして、昭和時代にかけて墳丘や石室の測量・実測図の作成が行われるようになった。昭和2年（1927）に史跡指定された総社二子山古墳は、昭和10年（1935）に田澤金吾らにより墳丘の測量調査が行われ、石室の実測や出土品の調査が実施されている。福島は山王庵寺で発見された塔心礎の調査も実施しておらず（大正10年（1921））、昭和3年（1928）に山王塔跡として史跡指定されている。

そして、昭和10年（1935）に開始された県下一斉の古墳悉皆調査により、群馬郡総社町所在の古墳の全体像が把握されることになった。『上毛古墳綜覧』には総社町所在の古墳として15基が掲載されて総社地区の古墳の構成が明らかになり、現存する6基の大型墳もすべて記載されている（群馬県1938）。群馬県中央の平野部にありながら比較的数は少ないものの、各古墳の墳丘形状や規模から見ると、前方後円墳4基、方墳3基、円墳8基と前方後円墳や方墳をはじめとした大型古墳を中心として構成されていることが分かる（右島2010）。遠見山古墳は、総社町6号墳として墳丘全長220尺、後円部高20尺、前方部高18尺の前方後円墳とされ、石室や石棺に係る記載はない。王山古墳は総社町1号墳として掲載され、墳丘長235尺、後円部高15尺、前方部高13尺の前方後円墳と記録されている。また、石室を持ち玉類が出土していることや御諸別王の墓との伝承を持つことが付記されている。総社二子山古墳は総社町11号墳として掲載され、墳丘長300尺、後円部高29尺、前方部高33尺とされ、後円部・前方部に石室を持ち、慶長年間に発掘調査がなされたことや金銀装大刀や玉類・土器が出土していると記される。地目は御陵地、所有者は国で、豊城入彦命の陵墓との伝承を持つと記載されている。宝塔山古墳は総社町9号墳として、墳丘長177尺の方墳とされる。所有者は秋元氏で、石室・石棺を有し、彦狹島王の墳墓と伝える旨を記す。そして、蛇穴山古墳は総社町8号墳とされ、墳丘長111尺、高さ18尺の円墳と記載され、溝跡があり調査履歴があることや御諸別王の墓地と伝えるとの記述がみられる。

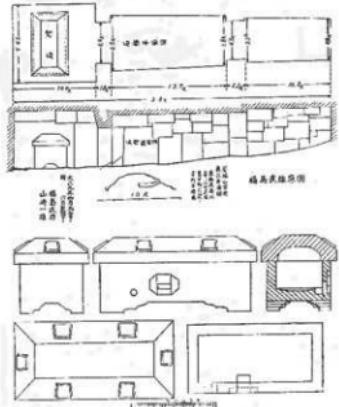
戦になると、群馬大学教授に就任した尾崎喜左雄が中心となって史学研究室による群馬県内各地の古墳の発掘や測量調査が進められ、県内各地の古墳の様相が明らかになった。総社古墳群でも、昭和27年（1952）に愛宕山古墳石室、昭和30年（1955）に宝塔山古墳石室、昭和42年（1967）に総社二子山古墳前方部石室の実測調査が実施されている。尾崎は横穴式石室の平面プランや使用尺度の変化、棟名山から噴出した火山噴出物との層位関係から、古墳の編年体系を組み立てた。また、総社地区所在の大型古墳を中心とした古墳群について、初めて「総社古墳群」として把握・分析し、截石切組積石室の使用石材や加工技術などから宝塔山古墳・蛇穴山古墳の新旧関係を捉えた（尾崎1966ほか）。また、近隣に所在する山王庵寺の石製鶯尾や根巻石と宝塔山古墳石室壁面の石材加工法の共通性に着目し、

加工技術の比較検討や山上碑との相関関係から蛇穴山古墳に年代観を与えた。この他尾崎の門下生により総社古墳群各古墳の分析が行われ、石川正之助は総社二子山古墳の前方部石室の平面プランの検討から使用尺度を検討している（石川1969）。また、松本浩一は切石積横穴式石室に共通する玄門形態に焦点をあて3つに分類した（松本1963）。

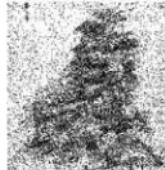
昭和40年代以降各古墳の整備事業による調査が実施されている。昭和43年（1968）には保存整備事業に伴い、前橋市教育委員会及び群馬大学による宝塔山古墳の前庭部及び石室の調査が行われ、川原石を積み上げた長方形プランの前庭部が取り付くことが明らかになった。また、石室の測量が行われ、その規模や形状が正確に把握されることになった。昭和47年（1972）の試掘調査後、昭和49年（1974）には、尾崎喜左雄を調査団長とした前橋市教育委員会により王山古墳の墳丘全面及び周辺の調査が行われた。墳丘はHr-FAの直上に構築され、南側に後円部を、北側に前方部を置く2段築成の前方後円墳であることが明らかになった。また、後円部の上段墳丘斜面には東側に開口する長大な横穴式石室が確認され、本県の代表的な初期横穴式石室の一つとして重要である。昭和50年（1975）には、環境整備事業に伴って蛇穴山古墳の墳丘裾部及び前庭部・石室の調査が行われ、葺石の根石の配列方向から方墳であることが明らかになった（前橋市教育委員会1976）。右島和夫は現地踏査をもとに愛宕山古墳が円墳ではなく方墳の可能性が極めて高いことを指摘し（右島1985）、墳丘の測量調査により方墳であることを確定させ、1辺56m、高さ8.5mを測る2段築成の大型方墳であることが明らかになった。また、葺石や葺石の裏込めなどを持つことや、墳丘周囲には幅20mほどの周堀が巡り、一辺100m近い広大な墓域を有していたことなどが想定された。右島は総社古墳群各古墳の調査や分析、検討を精力的に進め、総社古墳群の変遷過程を、遠見山古墳（前方後円墳88m、5世紀後半）→王山古墳（同76m、6世紀初頭）→総社二子山古墳（同90m、6世紀後半）→愛宕山古墳（方墳56m、7世紀前半）→宝塔山古墳（同60m、7世紀中葉～第3四半期）→蛇穴山古墳（同40m、7世紀第4四半期）と推移し、大型前方後円墳である総社二子山古墳に続き、三代の大型方墳が築造されたことが明らかにした。墳丘形状や石室の構造、規模、副葬品等により総社二子山古墳と綿貫親音山古墳との親縁性や、大型方墳の採用や、巨石巨室石室・截石切組積石室の導入、刳抜式家形石棺の設置や漆喰の使用など、畿内の有力者層と密接に関係していることが推定され、ヤマト王權の地域再編成の結果三代にわたる大型方墳が築かれたことが指摘されている（右島1985・88・92・93）。一方、石製鶴尾や塔心柱根巻石、塑像、綠釉陶器のセット、佐波理鏡、金銅製飾り金具、大量の瓦などが発見されている山王庵寺について、昭和49年（1974）から昭和56年（1981）にかけて発掘調査を実施し、塔跡の西側から金堂と考えられる基壇跡を検出して伽藍配置が判明したほか、「放光寺」と題書きされた平瓦が出土している（前橋市教育委員会1976～82）。また、元総社地域に所在していたと推定される上野国府についても、昭和36年（1961）の元総社小学校校庭遺跡の調査を皮切りとして、昭和40年代に国府解明のための発掘調査も行われた。

平成元年（1989）には宝塔山古墳の墳丘及び石室の現況測量調査が行われ、墳丘長は56m以上、高さ約12mの3段築成の大型方墳であることが確認された（白石編1990）。平成7年（1995）には愛宕山古墳の周堀部分を中心に発掘調査が行われ、方墳であることが追認され、南北の兆城長92m、東西の兆城長94mと想定された（前橋市教育委員会1996）。平成9～11年（1997～99）には、下水道敷設に伴う王山庵寺周辺の調査が行われ、3,000点を超える大量の塑像が出土している（前橋市教育委員会2000）。その後、平成18～22年（2006～10）に範囲確認調査を実施し、講堂に接続する回廊跡の検出や寺院下層の基壇建物跡の検出し、伽藍配置や規模が概ね確定された（前橋市教育委員会2007～12）。平成19・21年度には宝塔山古墳及び蛇穴山古墳の周堀部分の調査が行われ、宝塔山古墳の兆城が一辺102mほどであることや、蛇穴山古墳は内堀及び外周溝の二重の堀をめぐらせ、中堤の内外には葺石を施した入念な古墳築造がなされていることが判明した。そして、平成29年度から実施している範囲内容確認調査事業により総社古墳群の様相が明らかになり、各古墳の兆城が概ね把握されるとともに、遠見山古墳や愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳では初めて墳丘まで調査が及び、墳丘の規模や構造が把握された。また、令和4年度（2022）には早稲田大学考古学研究室との共同調査により、宝塔山古墳・蛇穴山古墳の石室三次元計測調査が行われ、両古墳の石室の正確な規模や形状が明らかになり、両古墳の漆喰の範囲も図化された（前橋市教育委員会2023）。上野国府でも平成23年（2011）より範囲内容確認調査を継続して実施しており、その実態が徐々に判明しつつある。長い調査研究の蓄積により総社古墳群や関連遺跡である山王庵寺、上野国府の様相が次第に明らかになってきており、令和5年（2023）にも右島和夫らによる宝塔山古墳の石室調査により、石室内に朱線が残ることが確認され、石材の加工方法の検討が進められるなど、更なる調査・研究の深化が図られ、総社古墳群を中心とした遺跡群の新たな価値の発見が期待される。

宝塔山古墳石槨圖



福島武雄による宝塔山古墳石室・石棺測量図（総社町 1956）



宝塔山古墳・蛇穴山古墳スケッチ（昭和 10 年）

施 設	用 石	使 用 尺	女 壁 形	石室の型		構 造 名	構 造 名
				井 底 上 部	井 底 下 部		
玄 室	切 石 板 石 積 石	自 由 高 度 大 小 不 規 則	比 較 高 度 大 小 不 規 則	2	3	一 般 形	一 般 形
門 形						一 般 形	一 般 形
						一 般 形	一 般 形

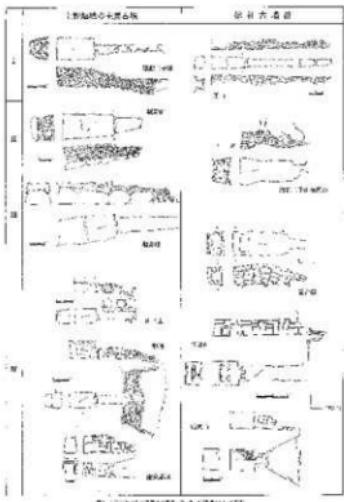
橿名山二ヶ岳噴出前後の石室構築上の特徴（尾崎 1966）



群馬大学史学研究室による愛宕山古墳石室測量図（昭和 27 年）



総社古墳群調査風景（上段：宝塔山古墳（群馬大学提供） 下段：王山古墳）



右島和夫による総社古墳群石室編年案（右島 1988）

第20図 総社古墳群調査研究史関連資料

第4章 発掘調査の成果

第1節 遠見山古墳

来歴

遠見山古墳の様子は『總社城之図』（前橋市立図書館所蔵）に描かれている。總社城は慶長6年（1601）に總社藩主となった秋元長朝により、近世初頭に築かれた城郭である。絵図は書写されたもので、福島武雄寄贈と記されている。二の丸西側に小山が描かれ、「遠見山」と朱書きされている。總社城の物見台として利用されたことから古墳名称が付けられたと伝えられる。原図の製作年代は不明ながら、絵図には大正9年（1920）4月15日付前橋図書館の日付印が押されている。福島武雄は、山王庵寺や高崎市保渡田古墳群の調査を行った地元郷土史家・考古学者として著名な人物である。『上毛古墳綜覧』には、總社町6号墳として墳丘全長220尺、後円部高20尺、前方部高18尺の前方後円墳と掲載されている。

調査・整備履歴

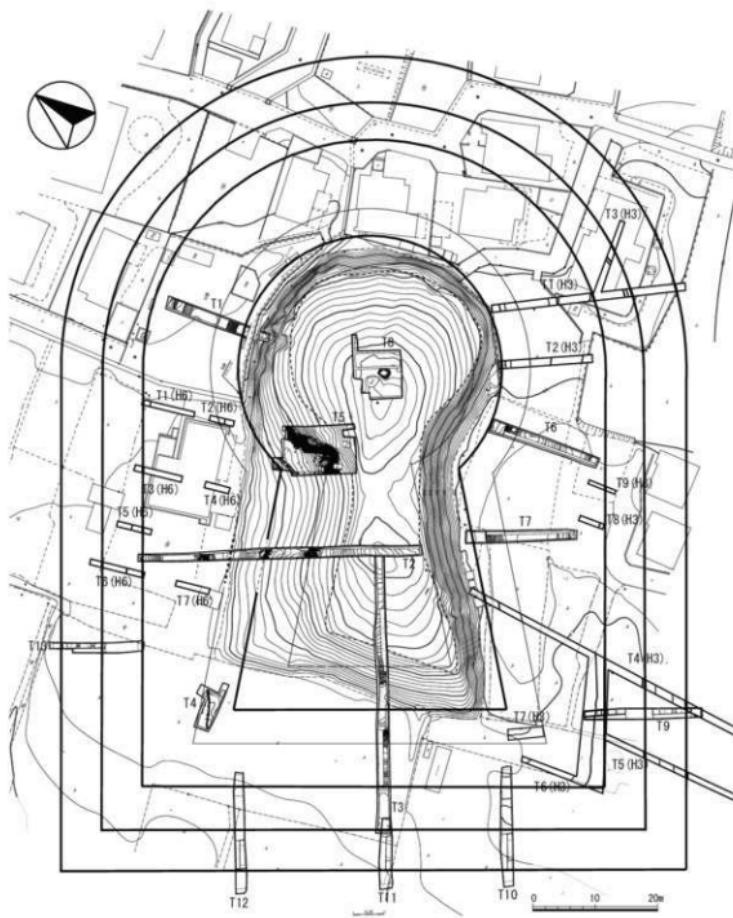
遠見山古墳では平成以降数度の確認調査が行われている。平成3年度には民間の宅地開発に伴って後円部から前方部にかけての墳丘南側の確認調査を行い、近世の溝2条のほか古墳の周堀や墳丘の裾が確認された。周堀の下層でHr-FAを確認している（城川I・II遺跡 前橋市教育委員会1992）。平成6年度には地区公民館建設に伴って前方部北側の調査を行い、周堀外側立ち上がりや墳丘裾部を確認している（前橋市教育委員会1995）。平成29年度及び30年度には範囲内確認調査を実施した。墳丘長80m以上の規模で、前方部北側には張り出し部が取り付き、二重の周堀が巡ることが想定された。前方部墳丘では土師器高环を主体とした祭祀跡が検出された。また、周堀底面付近でHr-FAの堆積が追認され、出土した埴輪や土師器などから5世紀後半の築造であることが明らかになった（前橋市教育委員会2020）。令和3年度には古墳南側から西側一帯で宅地開発が計画され、保存協議のための確認調査を行った。兆域を確認するため前方部の南・西・北側に調査区を設定して調査を行ったところ、古墳を取り囲む堀が巡ることが確かめられた。いずれの調査区でも堀底面付近にHr-FAが堆積することから本古墳の外堀と考えられ、墳丘の周囲に二重の堀が巡ることが確かめられた（前橋市教育委員会2023）。

古墳の規模と特徴

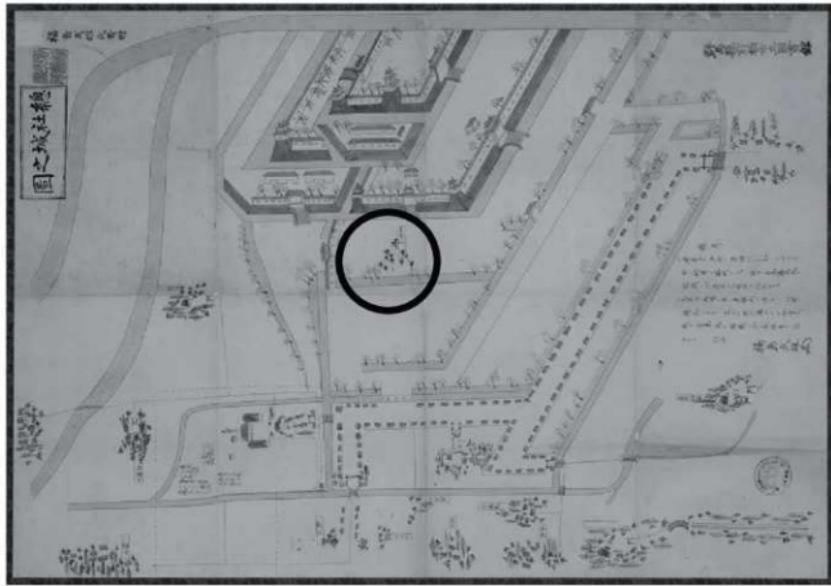
墳丘測量図によれば、後円部の周囲と、南側くびれ部から前方部にかけて大きく削平を受けていることが分かる。既往の調査から、2・3トレンチおよび6・7トレンチで墳丘裾部が確認されている。2トレンチでは、墳丘裾部底面付近より葺石を施しており、6トレンチでも部分的に葺石が確認できる。古墳の主軸で折り返して南北の墳丘裾を比較すると、前方部北側で墳丘裾の位置が突出しており、張り出し部の存在が想定される（2トレンチ）。墳丘基壇面（墳丘第1段平坦面）は2・5トレンチで検出されている。5トレンチでは後円部の基壇面周囲をめぐる埴輪列が確認されている。また、2トレンチでは基壇面縁辺部で東西方向に延びる0.5mほどの低い葺石が検出され、張り出し部を区画する葺石の可能性がある。基壇テラスの幅は約7mで、2トレンチでは墳丘第2段斜面前面にて高环を主体とした完形の土師器がまとまって出土している。同一レベルで集中して出土したことから祭祀跡と考えられる。墳丘第2段斜面に施した葺石は2・5トレンチで検出されている。5トレンチでは1.5~2mほどの間隔を置いて高さ1mほどの縦方向に並ぶ石列が確認でき、石列間を充填するように葺石を施していると考えられる。墳丘第2段上面では埴輪列や遺物等が確認できず、上半は後世に削平を受けているとみられる。これらの成果から、主軸方位はN-61°-Eにとり、墳丘長87.5m、後円部径52.5m、前方部幅58.0mの2段築成の前方後円墳に復原される。墳丘の高さは、いずれも南側墳丘裾部から、後円部5.7m、前方部5.4mと、現況では前方部・後円部ともほぼ同じ高さである。

前方部西側の墳丘断面調査によると、基盤層である總社砂層上面より盛土しており、当時の地表面であるAs-C輕石を含む黒色土層は整地により削平されていた。また墳丘周囲に黒色土や黄褐色土を互層に土手状に積み上げ、その内側に粘性の少ない砂質土を充填する構築方法がとられていることが確認された。

また、埋葬主体部の位置を把握するため、後円部中央にトレンチを設定したものの、主体部の痕跡は確認することができなかつた。後円部上部がすでに削平されているか、主体部設置後に盛土がなされている可能性が考えられる。



第21図 遠見山古墳想定復原図 (S = 1/800)



第22図 総社城之図（前橋市立図書館所蔵）



第23図 遠見山古墳くびれ部葺石（5トレンチ 1:100）

墳丘の周囲には内外二重の周堀が巡る。内堀の幅は前方部西側で8.9m、現地表面からの深さは2.4~2.9mを測るが、底面の形状は船底形を呈する場所や平坦な場所もあり、一定していない。外堀は上端幅5.1~7.0m、現地表面からの深さ1.2~1.6mほどの規模である。後円部東側は宅地化が進んでいたため未調査であり、同時期の築造と考えられる保渡田古墳群の形状を参考に盾形に復原した。内堀までの主軸長は106m、外堀外端までの主軸長は133mを測る。内堀・外堀とも底面直上の間層を挟んでHr·FAが5~10cmほど堆積している。

古墳の周囲は畑として利用され、古墳西側から南側にかけて基盤層である総社砂層まで強い削平を受けており、中堤や外堤の盛土は検出できなかった。しかし、前方部南側の9トレンチでは内堀や外堀で多量の円筒埴輪が出土しているほか、後円部南側の畑では数点の人物埴輪が採集されていることから、中堤上に人物・動物等の形象埴輪群が据えた区画が設けられていた可能性が高い。

祭祀跡

張り出し部上段の前方部基壇テラス上で、径1.5mほどの範囲に高坏を主体とした土器群を伴う祭祀跡が検出された。同一レベルから出土し、一括して据え置かれたものとみられる。ほぼ完形の土師器で、高坏12点（うち1点大型高坏）、壺・直口壺各1点で須恵器や玉類、石製品、鉄製品などは含まない。大型高坏はいわゆる「三ツ寺型高杯」と呼称されているものである。この高坏は国内でも群を抜いて大きく、同形品が豪族居館の三ツ寺I遺跡（高崎市）をはじめ、元総社明神遺跡（前橋市）、大屋敷遺跡（前橋市）など榛名山東南麓の遺跡で出土しており、直線距離で6kmと狭い範囲に集中している（前原2023）。これ以外の高坏は、いわゆる内斜口縁杯に脚部を付けたもので、内斜口縁杯の分布の中心は高崎市の八幡台地を中心とした地域と考えられている（山本2018）。類似した出土状況は保渡田八幡塚古墳東中島で確認されている。東中島に円筒埴輪列が巡り、その内側から合計70個体の土師器が出土しているが、器種は高坏を主体とするなど共通点が見られる。榛名山東南麓に分布の主体が見られる土師器を用いるなど西毛地域との関連が想定される。

円筒埴輪

普通円筒埴輪は3条突帯のものと4条突帯のものの2種が見られ、一定量の朝顔形埴輪を伴う。墳頂部には3条突帯の埴輪が、墳丘基壇面には4条突帯の埴輪が並べられていたと考えられる。器高はいずれも50cmほどと条数と器高との相関関係は認められない。また、3条突帯の円筒埴輪には、少量であるがB種横ハケが認められる。

形象埴輪

後円部南北の内堀から人物と器種不明の破片が出土している。人物埴輪は白みがかった精選された胎土を用い、小型のつくりや赤彩の使用など、県内初期の人物埴輪等と共通する。また、後円部南側の畑地で採集された人物埴輪とも胎土やつくりが類似する。

築造年代

内堀及び外堀の底面付近に堆積したHr·FAや、人物埴輪のつくりや胎土、少量のB種横ハケを伴う円筒埴輪、高坏を中心とした前方部祭祀跡の土器群の様相などから、5世紀後半の築造と考えられる（前橋市教育委員会2020）。

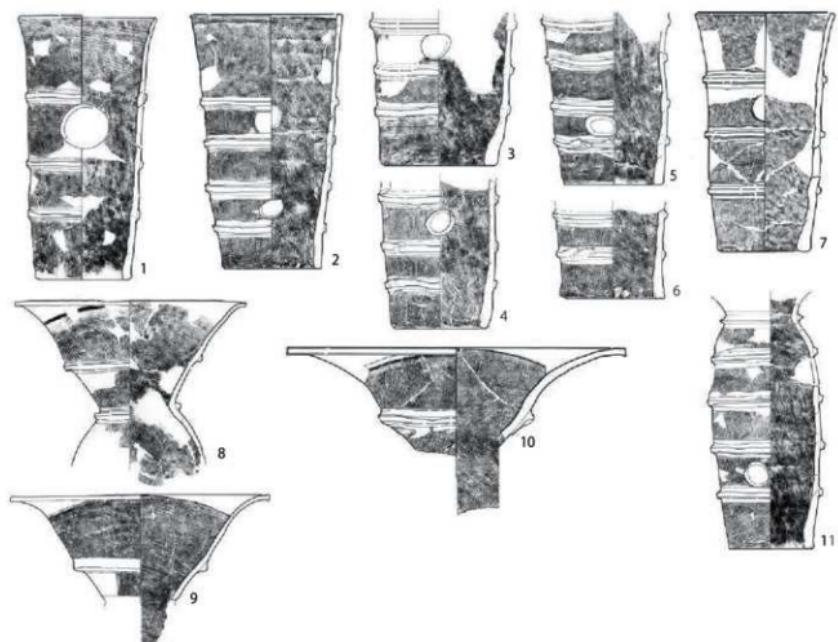
遠見山古墳の価値

○沖積地開発に成功した首長の墓

本古墳は、西毛地域各地に分布する大型前方後円墳に匹敵する墳丘規模を持ち、二重の周堀をめぐらせ、中堤上に形象埴輪の配置も想定されるなど、充実した内容を備える。大型前方後円墳を築く勢力へと発展した背景には、古墳群の南方に広がる沖積地の大規模開発を主導したことが想定される（右島1994）。この沖積地には日高遺跡（高崎市）をはじめとした古墳時代以前からの水田遺構が検出されており、良好な経済基盤となる可能性を秘めた土地であった。本古墳は、沖積地の大規模開発に取り組み、安定した経済基盤を確立した勢力として台頭し、新たな首長層として成長した勢力の墓と評価することができる。

○総社古墳群形成の端緒となる古墳

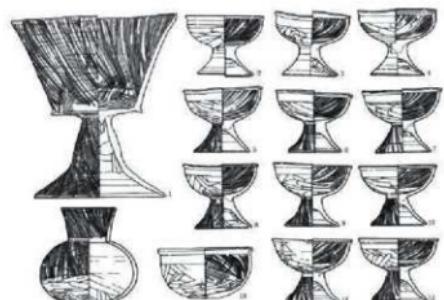
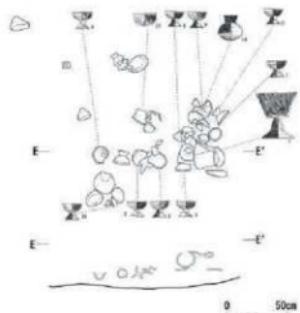
中期中葉以降、保渡田古墳群をはじめ上毛野地域各地に複数の首長系列が発生し、近隣地域でも埼玉稻荷山古墳にはじまる埼玉古墳群（行田市）の形成や、摩利支天塚古墳（小山市）・琵琶塚古墳（同）の築造など東国各地で新たな勢力の台頭が見られる。新たな首長層の成立は、緊迫した朝鮮半島情勢を受け、ヤマト王権が地方との新たな関係の構築を積極的に進めた結果と考えられ、東国を王権の強力な支持基盤として位置付けたことを意味する（山本2023）。充実した内容を持った本古墳が、利根川右岸の当地域に突如築かれたことも、畿内の政治的な動向を背景と



第25図 主な円筒埴輪（1～6、8～11：5トレンチ、7：9トレンチ S=1/10）



第26図 主な形象埴輪（S=1/6）



第27図 祭祀跡（2トレンチ 土器1/8）

していると考えられる。総社古墳群の勢力とヤマト王権との有機的な関係性が本古墳の築造以降終末期にかけて継続・強化が図られたことは、総社古墳群の各古墳に認める事ができる。古墳群形成の端緒となる本古墳の成立は、ヤマト王権と東国との新たな関係性の構築を象徴しており、その後の総社古墳群の発展と展開を考える上で重要な位置を占める古墳である。

○「西日本工法」による墳丘の構築

本古墳では、前方部西側の墳丘断面調査の結果、墳丘構築方法を知ることができた。墳丘構築範囲を基盤層である総社砂層上面まで削平して整地し、前方部前端となる西側に土手状に盛土し、黒色土や黄褐色土、暗褐色土が互層になるよう3～4段ほど積み上げる。土手状盛土内側には粘性の少ない砂質土を充填して墳丘を構築していた。これは、畿内を中心とした地域に認められる「西日本工法」による墳丘構築方法で、前期末以降東日本に波及したとされ、墳丘築造技術が伝播する様子は畿内と地方の政治動向を反映していると考えられる（青木2009・2013・2017）。上毛野地域でも前期から確認され、小島田八日市古墳（前橋市）をはじめ成塚向山1号墳（太田市）などで同様の構築方法が確認されており、「西日本工法」を取る本古墳の墳丘構築方法も、上毛野地域と畿内との関係性を示していると考えられる。

第2節 王山古墳

来歴

総社古墳群の最南端に位置する王山古墳は、『上毛古墳縦覧』に総社町1号墳として掲載され、墳丘長235尺、後円部高15尺、前方部高13尺の前方後円墳と記録されている。また、石室を持つことや御諸別王の墓との伝承を持つことが付記されている（群馬県1938）。

調査・整備履歴

本古墳は前橋市の区画整理事業に伴って調査が行われている。昭和47年（1972）の尾崎喜左雄氏（当時群馬大学名誉教授）を担当者とした試掘調査後、昭和49年（1974）には、尾崎氏を調査団長とした前橋市教育委員会により墳丘全面及び周辺の調査が行われた。その結果、墳丘はHr-FAの直上に構築され、南側に後円部を、北側に前方部を置く2段築成の前方後円墳であることが明らかになった。また、後円部の上段墳丘斜面には東側に開口する長大な横穴式石室が確認され、本県の代表的な初期横穴式石室の一つとして重要である。

調査後関係団体との協議を行い、墳丘部分を中心とした約2,500m²を公園用地として保存することとなった。墳丘には約1m盛土して葺石等を養生し、後円部南側の2か所には覆屋をかけた葺石見学施設を設置している（中村1977）。また、墳頂部には石室の構築位置を確認することのできる石組表示などが置かれている。昭和59年（1984）には本市の史跡に指定されている。

古墳の規模と特徴

これまで度数報告がなされている各種概報によると、ほぼ南北方向に主軸を取り、墳丘長75.6m、後円部径50m、前方部幅63.1mを測る2段築成の前方後円墳と考えられる（前橋市教育委員会1975、中村1977、松島・中村・右島1991ほか）。墳丘形状は前代の遠見山古墳とは異なって前方部が広がる墳丘形状と見られ、同時に期に築造された築瀬二子塚古墳（安中市）や正円寺古墳（前橋市）などと同一の墳丘企画と想定される（田口1989）。川原石を丹念に葺き上げた葺石が良好な状態で検出され、長さ30cm・厚さ10~20cmの川原石を45°ほどの傾斜角度で積み上げる。墳丘第2段は、上面は削平を受けているものの約2mが残存している。周堀は墳丘周囲に認められるものの、外側立ち上がりは確認されておらず、兆域規模は不明である。本古墳の葺石は「二重もしくはそれ以上の葺石列が認められる」との観察所見があり（松島・中村・右島1991）、前方部断面の観察から、前方部では内側葺石とその外側に円礫と土砂を用いた裏込めの存在が指摘されている（前原2010）。

埋葬施設

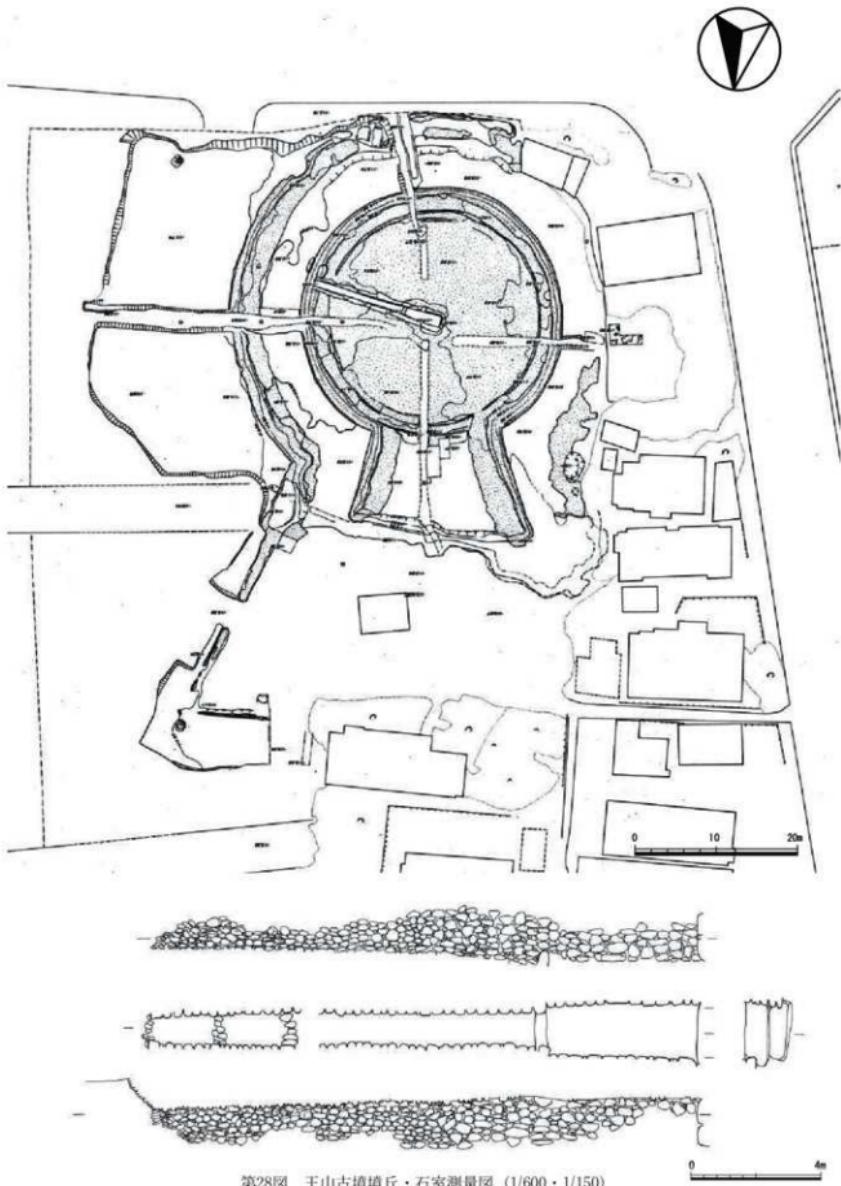
主体部は後円部の基壇面東に開口する横穴式石室である。石室全長16.37mを測り、玄室長は4.37m、奥壁幅1.63m、羨道長は12m、奥幅0.96mと非常に狭長な平面プランを取り、後円部の中心は玄室奥壁のやや前よりの位置にある。天井石は取り除かれているものの、奥壁は大ぶりな横長の川原石2段までの積み上げが確認され、玄室から羨道の壁面は川原石を小口積にして丹念に構築している。石室壁面は赤彩が施されている。初期の横穴式石室は、築瀬二子塚古墳や正円寺古墳、前二子古墳（前橋市）などで確認されており、川原石を多用した石室構築技術や墳丘基壇面上に開口する設計プランなど、築瀬二子塚古墳と共に通性が高い。

出土遺物

墳丘第2段斜面から基壇面（墳丘第1段平坦面）にかけて円筒埴輪や形象埴輪が多量に出土し、段ボール箱40箱以上と報告されている（前橋市教育委員会1975）。形象埴輪として目立つのは大刀形埴輪と盾形埴輪で、10個体以上が確認されている。大刀形埴輪は柄の部分だけで60cmあり、全体は150cm以上と推定される。また、盾形埴輪も大型で100cm以上の大きさがあったものと考えられる。大刀形・盾形とも基壇面上の2段目墳丘寄りの場所で出土しており、後円部墳頂縁辺部に石室を囲繞するように樹立されていたと考えられる。石室内からは鉄地金銅張りの胡蘿金具が出土している。縁辺の頸間をつなぐように列点波状文が施されており、類例としては高崎市井出二子山古墳からの出土が知られる。

築造年代

詳細は不明ながら、Hr-FA直上に墳丘が構築されており、狭長な横穴式石室のつくりや出土した器財形埴輪の特徴から6世紀初頭の築造と考えられている。



第28図 王山古墳墳丘・石室測量図 (1/600・1/150)



標 柱



説 明 板



葺石観察施設



石室遺構表示

第29図 王山古墳の便益施設



第30図 王山古墳出土形象埴輪（大刀形埴輪、盾形埴輪）

王山古墳の価値

○先進的な埋葬方法を導入した古墳

5世紀末～6世紀初頭には、畿内の最有力墳に新たな埋葬形態として横穴式石室が採用され、本格導入からほどなく全国的に波及する。東日本内陸部地域へは美濃、遠江、伊那谷、上毛野といった古代東山道に属する地域に沿って分布している。東山道の前身となる内陸部交通網の存在を示唆し、伊那地域や上毛野地域での馬匹生産の発展により中期後半にはすでに成立していたと考えられる（右島2016）。横穴式石室は西毛地城から中毛地城まで広がり、これまで顕著な古墳の見られなかった地域にも横穴式石室を持つ大型前方後円墳が築造されるなど、ヤマト王権の積極的な働きかけと結びつきの強化が推定される。本古墳をはじめ初期の横穴式石室を導入した上毛野地域の大型前方後円墳は、2段築成の整美な埴丘で、前方部が広がる埴丘形状を探り、畿内の古墳の埴丘形状の変化と連動していると見られる。また、埋葬施設は小ぶりな川原石を多段に積み上げた両袖式横穴式石室を構築するものの、玄室は狭長で長い羨道が取り付き、羨道から玄室までの天井高がほぼ一定するなど、畿内の系譜とは異なる地域色の強い石室形状であり（右島1989）、平面プランは雲霧寺古墳（飯田市）など伊那谷地域との共通性が高い。先進的な埋葬施設を受容し、埴丘形状も畿内の影響を受けながらも地域的な石室構築方法を採用するなど、ヤマト王権との連携強化を示すとともに新たな技術の地方での受容過程を象徴する古墳と言える。

○多量の川原石を使用して高度な技術を用いた埴丘構築

本古墳は多量の川原石を使用して埴丘を構築した古墳として広く知られる。「二重もしくはそれ以上の葺石列」が確認され、断面観察より内側葺石を施し、その外側に裏込めと外側葺石を施していたと考えられる（松島・中村・右島1991、前原2010）。これまでの調査から、二重に葺石を施す施工方法は愛宕山古墳や蛇穴山古墳など終末期の總社古墳群においても確認されている。二重葺石を施す古墳は、西毛地城から北武藏地域の後期後半から終末期にかけての古墳に多く認められ、分布の主体は西毛地城にあると考えられる。同様な施工方法は本古墳のみならず豪族居館である三ツ寺1遺跡（高崎市）までさかのぼる可能性が指摘されており（前原2010）、埴丘構築等の技術的な系譜を把握する上で重要な事例である。

第3節 総社二子山古墳

来歴

本古墳は、江戸時代後期の学者吉田芝溪の『上毛上野古墓記』（文化7年（1810））に記載が見えており、豊城入彦命の副葬品を納めた場所とされた。文政2年（1819）11月には墓地への埋葬の最中に前方部石室が開口され、頭椎大刀をはじめ鉾銅や勾玉などが出土したとされる。また、『上毛古墳総覧』では本古墳が慶長年間に発掘されたことが記され（群馬県1938）、台付直口壺は寛政年間出土とされるなど後円部石室開口は前方部に先立つとみられる（群馬県1929・尾崎1971）。

明治期に入ると群馬県においても陵墓調査が活発になり、明治7年（1874）10月総社二子山古墳を「豊城入彦命」の陵墓として教部省に申し立て、翌年1月には墓掌・墓丁を置く旨が達せられて、正式に治定された。しかし、地元のトラブルに起因して、明治9年（1876）には陵墓の治定が自然解消に至った。その後昭和2年（1927）には史跡指定を受けている。『上毛古墳総覧』には総社町11号墳として掲載され、墳丘長300尺、後円部高29尺、前方部高33尺と記録され、地目は御陵地、所有者は国と記載されている。昭和10年（1935）には東国經營聖業奉讚大会等の開催に伴って、本古墳にて古墳祭が実施されている（上毛郷土史研究会1936）。

調査・整備履歴

昭和に入ると日本古文化研究所により墳丘及び石室の測量調査が実施され、規模や形状の把握が可能となった（田澤1974）。昭和41年度（1966）には保存修理工事に伴って群馬大学考古学研究室による墳丘測量調査が行われ、より正確な規模や形状が確認された。これまで測量調査は行われているものの、墳丘の調査は未実施である。本古墳周辺では、開発に伴う試掘調査が数度行われている。本史跡を取り巻く環境も測量調査時から大きく変化していることから、令和元年（2019）には古墳周辺での現地測量及び墳丘部の地上レーザー測量を実施した。令和2年には範囲内容確認調査事業により、前方部西側周堀及びくびれ部南側周堀部分の調査が行われている。また、令和3年度にはくびれ部北側の開発に伴う試掘調査で北側周堀の立ち上がりが確認されている。

古墳の規模と特徴

本古墳は、現状の墳丘長約90mの前方後円墳で、東に後円部を、西に前方部を置き、主軸方位はN74°-Wである。墳丘北側から北東にかけて周堀の痕跡が確認されており（群馬県1927）、墳丘の南北では墳丘北側及び南側に帯状の地割が残されている。くびれ部北側で周堀の立ち上がりが検出されており地籍図の地割と一致するとともに、墳丘中軸線を挟んで南に折り返した推定の立ち上がり位置もほぼ地割に当たっており、南北の堀の痕跡が地割に残されていると考えられる（石川1969）。また、令和2年度調査では前方部西側の周堀立ち上がりが確認されている。後円部の周囲では地割から堀の範囲を推定することはできないが、後円部の中心点から南北周堀の推定範囲を結んだ半円を描くと、兆域の主軸長は164mに復原される。

後円部周囲の墳裾や南側の墳丘基壇面は削平を受けているが、墳丘基壇面（墳丘第1段平坦面）は後円部から前方部の墳丘北側にかけて良好に残存し、墳丘形状が明瞭に把握される。これまで墳丘自体の調査は未実施であり、令和2年度調査にて後円部南側の墳裾を確認したのみである。現況図の検討から墳丘規模の復原がなされており、墳丘長89.8m、後円部径44.9m、前方部幅61mとされている（石川1969、右島1985）。一方、本古墳は石室構造や規模出土品綿貫观音山古墳（高崎市）との共通点の多さが指摘されており（石川1981、右島1994ほか）、現況図の比較から、両古墳の墳丘規模や形状も同一であった可能性が高い。また、觀音山古墳では、墳丘周囲に二重の堀が巡っており、両古墳の共通性の高さを考慮すると、総社二子山古墳でも二重の堀を備えていた可能性がある。

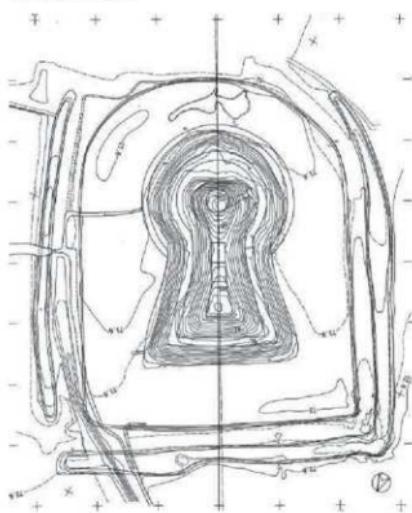
埋葬施設

埋葬主体部は後円部及び前方部の2か所に築かれ、いずれも墳丘南側基壇面に開口する。後円部石室は加工した角閃石安山岩を用いて構築した「角閃石安山岩削石積石室」（右島1994）である。5面を加工した角閃石安山岩を使用して壁面を構築しており、奥壁は石材を横積みに積み上げる。また、側壁は奥壁より小ぶりながらほぼ同一サイズの石材を用いており、比較的目が通っている。実測図等から、奥壁は6段ほど、側壁は7段ほどが確認される。天井は輝石安山岩の大型石材3石で構成される。石室全長9.4m、玄室長は6.8m、奥幅3.4m、高さ2.2m以上、羨道奥幅1.85mと県内の該期古墳でも最大規模である。また、大型の玄室に短い羨道が取り付く平面プランをとり、その規模とともに綿貫觀音山古墳との共通性が指摘されている。前方部石室は、後円部石室に比べやや小型で、輝石安山岩の



第31図 総社二子山古墳兆域復原図 ($S = 1/800$)

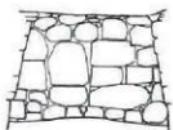
綿貫觀音山古墳



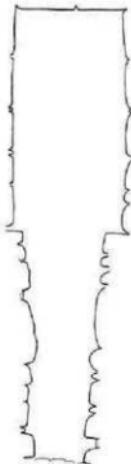
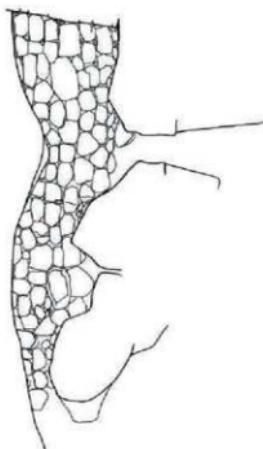
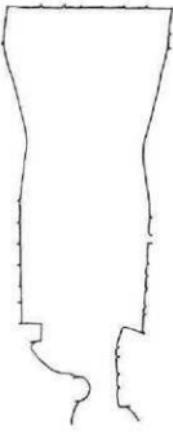
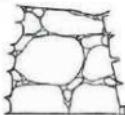
總社二子山古墳



後円部石室



前方部石室



第32図 総社二子山古墳と綿貫觀音山古墳の墳丘形状の比較と総社二子山古墳石室測量図
(群馬県教育委員会1998及び田澤1974より転載、一部改変)

大ぶりな自然石を使用して壁面を構築する。玄室は比較的目が通り、奥壁は3段、側壁は4~5段積み上げ、隙間を小型石材で埋める。玄室天井は3石で構成され、20cmほど下げて羨道天井石が架設される。羨道側壁は大小様々な石材を積み上げる。石室全長8.7m、玄室長4.2m、奥幅2.2m、高さ2.16m、羨道長4.07m、羨道奥幅1.65mである。後円部石室→前方部石室の順に築かれたと考えられる（右島1985）。

埴輪

令和2年度調査で円筒埴輪が周堀から多量に出土している。全体を知りうる資料は出土していないが、断面低台形や三角形の突帯を巡らせており、最下段の突帯は低い位置に貼付されるものが多い。透かしは円形で、外面の調整は縦ハケのみである。形象埴輪としては、馬形ないし家形埴輪片が出土しているが、出土量が少なく器種や樹立位置など不明である。

出土品

上述のとおり文政2年（1819）に開口した前方部石室内から豊富な副葬品が出土しており、元景寺住職より前橋藩役向に『二子山窟掘出候儀』として届け出されている。明治期には山崎衡『三王墳墓略記』に文政2年出土した副葬品の記載があるが、元景寺からの届出書の内容とは大きく異なる。また、八木駿三郎『日本古劍考』（明治31年（1898））には頭椎大刀とともに発見された出土品が記されているが、その内容も『三王墳墓略記』とは異なるなど、副葬品の組成には不明な点も多い。その後群馬県史跡名勝天然記念物調査報告書第1集（昭和4年（1929））の編集に際し調査が行われ、その時点での現存していた出土品が記載されている（尾崎1971）。田澤金吾は總社二子山古墳出土品に係る各種史料から、副葬品の構成や数量を下記のとおり想定している（田澤1974、石川1981）。

No	種類	数量	No	種類	数量	No	種類	数量
1	遣骨	若干	7	金環	1	13	提瓶	1
2	木箱残欠	一	8	銀環	1	14	ハソウ	1
3	頭椎大刀	1	9	鈴劍	1	15	高坏	3
4	直刀残欠	若干	10	鉄鎌	2	16	その他須恵器	若干
5	刀子	2	11	脚付長頭壇	1			
6	勾玉	4	12	瓶	1			

『東京国立博物館図版目録』「古墳遺物編（関東II）」によると、「9前橋市總社町植野出土品」として瑪瑙製勾玉4、六鈴劍1、銅環1、金環1、鉄鎌2が掲載され、「10前橋市總社町植野字二子山 二子山古墳出土品」として台付直口壺1が報告されている（東京国立博物館1983）。これらのうち、台付直口壺は寛政年間の出土とされ、文政2年以前の出土品と考えられるものの（群馬県1929、尾崎1971）、本古墳のそれぞれの石室の副葬品の構成は判然としない。また、頭椎大刀は所在不明ながら、大正12年（1923）に前橋市立図書館職員が書写した詳細な絵図が残されており、綿貫觀音山古墳出土の頭椎大刀とつくりが酷似することが指摘されている（石川1981）。

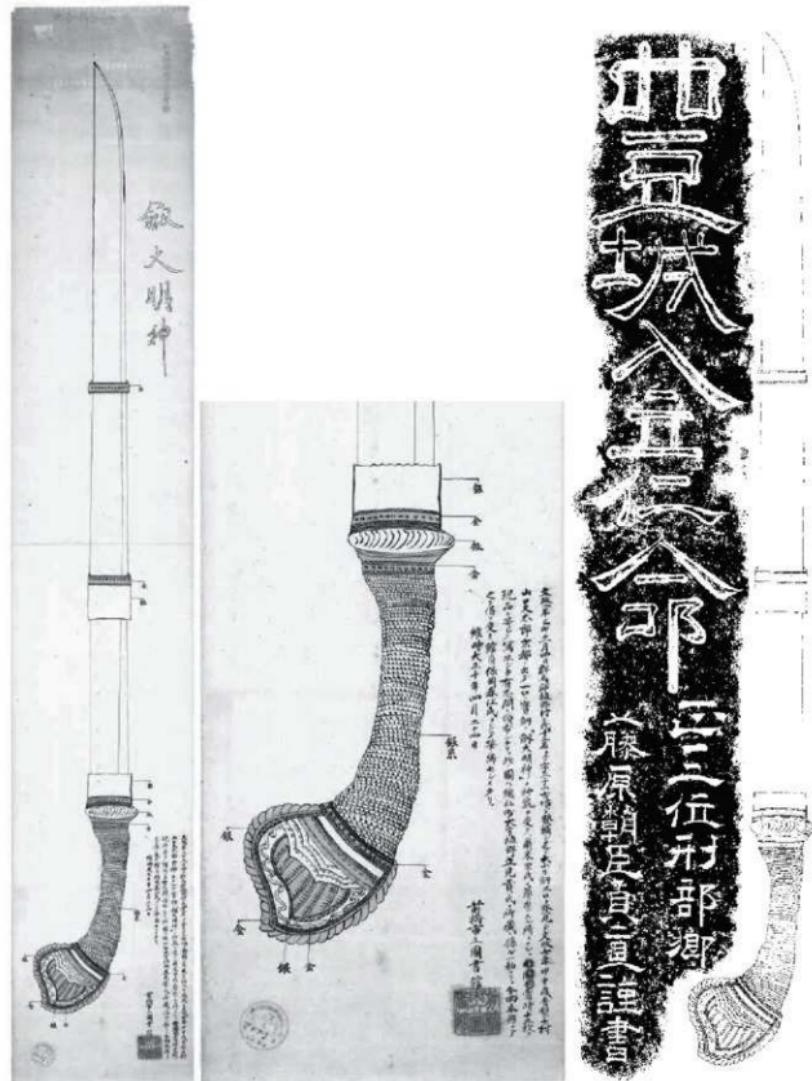
築造年代

五面加工した角閃石安山岩を用いた後円部石室の構造や大型化した玄室規模、頭椎大刀をはじめとする副葬品や出土した円筒埴輪の特徴などから6世紀後半の築造と考えられる（右島1985・1992ほか）。

總社二子山古墳の価値

○上毛野地域最大級の墳丘と石室を備えた古墳

本古墳の兆域の主軸長は164mに及び、葺石を施した墳丘は綿貫觀音山古墳と同規模であった可能性が高く、後期後半の上毛野地域の中でも最大クラスである。また、後円部及び前方部の2か所に築かれた埋葬主体部は、いずれも墳丘南側基壇面に開口し、後円部石室は在地色の強い「角閃石安山岩削石積石室」（右島1994）を構築する。墳丘及び後円部石室の規模や平面プランは綿貫觀音山古墳と共有しており、同一集団が両古墳の築造に関与していたと考えられる。一方後出する前方部石室は、後円部石室に比べやや小型ながら、輝石安山岩の大型自然石を使用して壁面を構築し、玄室天井は羨道天井より20cmほど高く架設される。大型の自然石を使用した石室構築方法は、後続する愛宕山古墳へと受け継がれる要素であり、畿内の巨石を使用した横穴式石室への変遷に連動したものとみられる。大型の墳丘や後円部石室の規模から上毛野地域の中心となる首長墓と見られ、本古墳と綿貫觀音山古墳を築造した勢力が



第33図 頭椎大刀絵図・版画 (絵図: 前橋市立図書館所蔵)



須恵器台付直口壺（東京国立博物館） image:TNN image Archives



image:TNN image Archives



六鈴鏡（東京国立博物館）

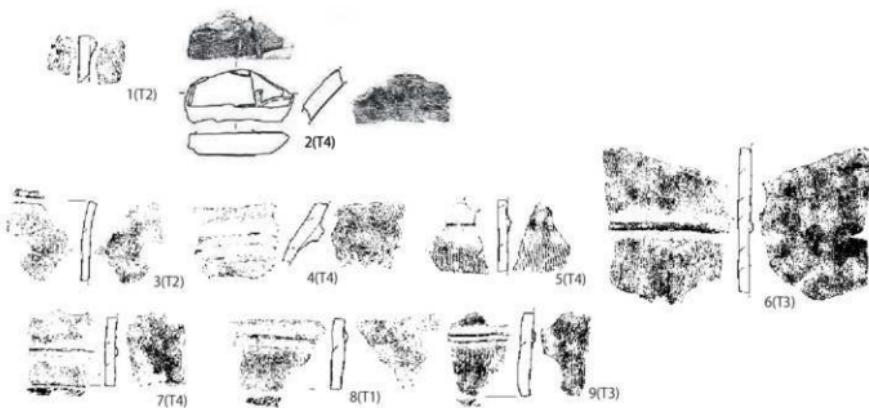
image:TNN image Archives



金環・銅環・勾玉・鐵轡（東京国立博物館）

田澤 1974 より転載

第34図 総社二子山古墳石室出土遺物



第35図 総社二子山古墳出土埴輪（形象埴輪・円筒埴輪：1/6）

政治的な協力関係の下、主導的な役割を果たしたと考えられる（右島1994）。

○豊富な副葬品が出土した古墳

墳丘や周堀からは形象埴輪等多量の埴輪が出土したほか、前方部石室からは豊富な副葬品が出土し、東京国立博物館には瑪瑙製勾玉や六鈴鏡をはじめ、銅環、金環、鉄環、台付直口壺などが所蔵されている。また、大正12年に前橋市立図書館職員が絵図に描いた頭椎大刀は、金銀の装飾が施された豪華つくりを持つ大刀であり、綿貫觀音山古墳出土の頭椎大刀と形状や装飾が酷似していることが指摘されている（石川1981ほか）。前方部石室の豪華な出土品から、後円部石室ではこれを上回る副葬品が想定される。綿貫觀音山古墳では、獸帶鏡や銅製水瓶をはじめ装身具や武器・武具・多量の馬具など豪華な副葬品が出土し、東日本の後期古墳の中でも突出した豊かさを誇る。後円部石室の解明については今後の調査に俟つかないが、豊富な副葬品の存在は、両古墳の共通性からみても十分に想定できる。

○築造後も広い崇敬を集めめた古墳

文政2年（1819）に前方部石室が開口して豊富な副葬品が出土して以降、本古墳は豊城入彦命の陵墓として認識され、広く崇敬を集めることとなった。前方部墳頂部には藤原朝臣貞直による石碑を建立し、前橋藩には御陵係が任命され、墳丘南側墓地の移転や古墳周囲の柵の設置が行われた。明治初期以降全国的な陵墓探索運動の中で、群馬県でも陵墓調査の動きが活発化し、明治7年（1874）本古墳を「豊城入彦命」の陵墓として申し立て、翌年には正式に陵墓に治定されて一層の崇敬を集めることとなった。明治9年（1876）には陵墓の治定が自然解消するものの陵墓としての認識は消えることはなく、昭和2年（1927）の史跡指定を経て陵墓認定運動が再燃し、昭和10年（1935）には東国經營聖業奉讃大会等の開催に伴う古墳祭が本古墳を会場に実施されている。再度の治定には至らなかったものの、戦後は地域の花見の名所として、また憩いの場として親しまれ、陵墓としての古墳の役割を終えた後も地域住民の生活に溶け込み親しまれている古墳である。

第4節 愛宕山古墳

由来

江戸時代後期の学者吉田芝溪の『上毛上野古墓記』(文化7年(1810))に本古墳の被葬者についての記載があり、豊城入彦命の御墓とされている。『上毛古墳綜覧』では総社町10号墳として、墳丘長180尺、高さ26尺の円墳として認識されている。所有者は光巣寺で、石室・石棺を有することとともに、八綱田王の墳墓と伝える旨を付記し、総社二子山古墳を豊城入彦命の墳墓に充てている(群馬県1938)。

調査・整備履歴

昭和27年(1952)には群馬大学史学研究室により石室の測量調査が行われているが、墳丘形状は円墳と認識されていた(尾崎1971)。その後、右島和夫は現地踏査をもとに円墳ではなく方墳の可能性が極めて高いことを指摘し(右島1985)、墳丘測量調査の結果方墳であることを確定させ、1辺56m、高さ8.5mを測る2段築成の大型方墳であることが明らかになった。また、葺石や葺石の裏込めなどを持つことや、墳丘周囲には幅20mほどの周堀が巡り、一辺100m近い広大な墓域を有していたことなどが想定された。平成元年(1989)には国立歴史民俗博物館による家形石棺の測量調査が行われている(白石編1991)。平成7年(1995)には本古墳周辺の開発に伴って周堀部分を中心に発掘調査が行われ、方墳であることが追認され、南北の兆域長92m、東西の兆域長94mと想定されている(前橋市教育委員会1996)。そして、令和2年度(2021)には範囲内容確認調査事業により周堀から墳頂部にかけて調査区を設定し、墳丘部の規模や構造が把握された(前橋市教育委員会2023)。

古墳の規模と特徴

平成・令和の調査の結果、周堀から墳丘にかけての規模や形状が明らかになっている。周堀は東側を除く墳丘周囲で検出されている。基盤層である総社砂層まで掘り込み、床面はほぼ平坦である。周堀外側の立ち上がりは北トレンチや1Aトレンチ、3Aトレンチで検出され、直上の覆土には褐色土や黒褐色土が堆積し、その上面にAs-B軽石を含む覆土が堆積する。墳丘側立ち上がりは北トレンチ及び西トレンチで確認され、1段目葺石との間には幅1.5mほどのテラス面を持つ。3A・4A・5Aトレンチでも床面が上方に傾斜する様子が確認されている。これらのことから、周堀は一辺約94m、周堀の上端幅は約19mと推定される。なお、平成期の調査にて周堀範囲の外側までトレンチを拡張しているものの、盛土や地山の高まりなどは確認できず、中堤や外堀、外堤は検出されなかった。

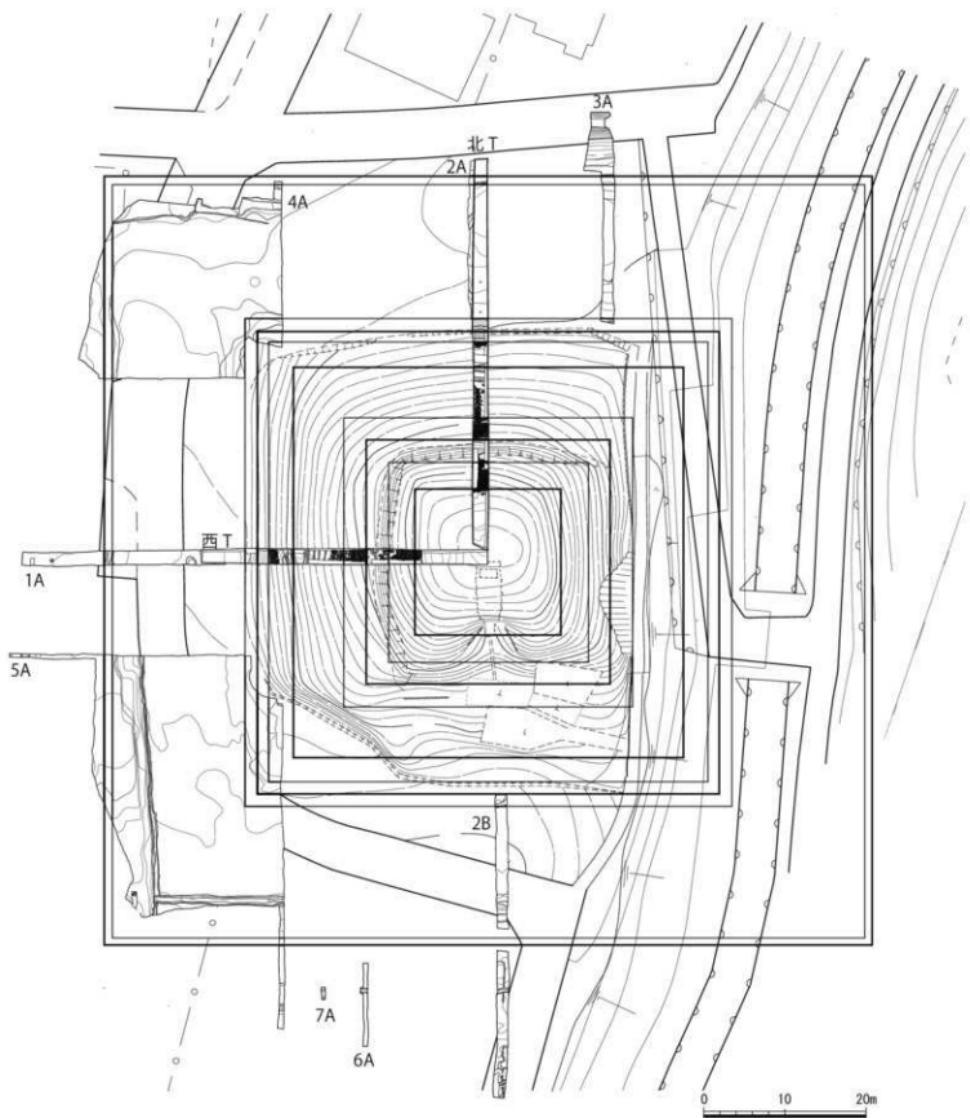
周堀の立ち上がりまでは地山を削り出し、1段目葺石を施す墳丘部は盛土により構築する。1段目葺石は墳丘盛土外側に構築し、拳大・小児頭大の扁平な礎を約42°の傾斜を持って積み上げる。基壇面が平坦であった場合、1段目葺石の高さは北トレンチで2.4m~2.6mほどに復原できる。墳丘基壇面には扁平な礎を敷き詰め敷石をなし、テラスの幅は6.2mほどである。2段目葺石は新たに確認された葺石である。扁平な川原石を約41°の傾斜角度で積み上げ、裏込めを挟んで内外二重の葺石を施す。墳丘2段目平坦面の高さまで葺かれていたとすると、葺石の高さは2.2~2.3mほどにと推定される。墳丘2段目平坦面は、わずか敷石が確認でき、テラス幅は2.0~2.2mほどと基壇テラス面に比べて狭くなる。3段目葺石も内外二重の葺石を施しており、墳頂部最上面まで施されていたとすると、3~3.3mほどの高さに復元できる。墳頂部は後世の削平を受けており、本来の墳頂部はさらに高かったものと推定される。

埋葬施設

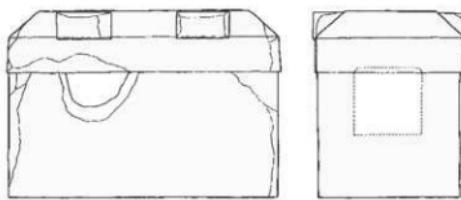
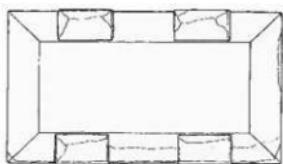
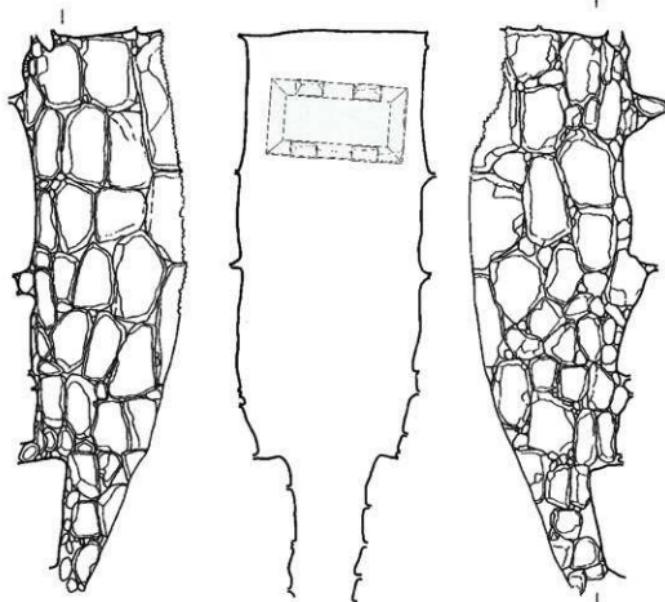
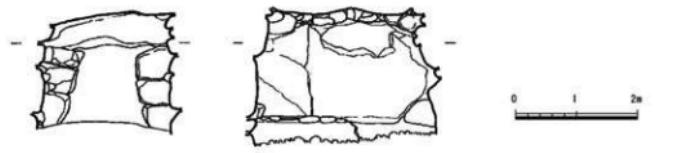
埋葬主体部は南側墳丘基壇面に開口する両袖式横穴式石室である。羨道の天井石が抜き取られ、玄室内にも土砂が流入して正確な規模は不明だが、石室全長は9.28m以上で、玄室奥壁寄りの位置に家形石棺を配置する(右島1988)。玄室側壁は大型の輝石安山岩を3~4段積み上げ、石材の隙間には角閃石安山岩や川原石を詰めて高さを調節している。壁面を構築する大型輝石安山岩や角閃石安山岩には部分的に面を平滑に仕上げる加工がなされ、角閃石安山岩は工具痕を明瞭に残す。奥壁は大型石材を2段に積み上げ、天井は輝石安山岩4石で構成され、いずれも巨石を使用する。その規模は、玄室長6.91m、奥幅2.94m、推定高2.6mを測る。羨道は3石以上の大振りの石材を積み上げて側壁とし、天井高は玄室より0.5mほど低くなる。

家形石棺

玄室奥壁付近の位置に石室主軸に直交して置かれる。凝灰岩製の刳抜式家形石棺で、前面には後世の穴が穿たれ縄掛突起なども摩滅しているが、奥壁側は旧状をよく残し、棺蓋の長辺には2対の縄掛突起を持つ。棺身は外法長辺2.22m、短辺1.18m、高さ1.02m、内法長辺1.65m、短辺0.53m、高さ0.55mを測る。棺蓋は長辺2.26m、短辺



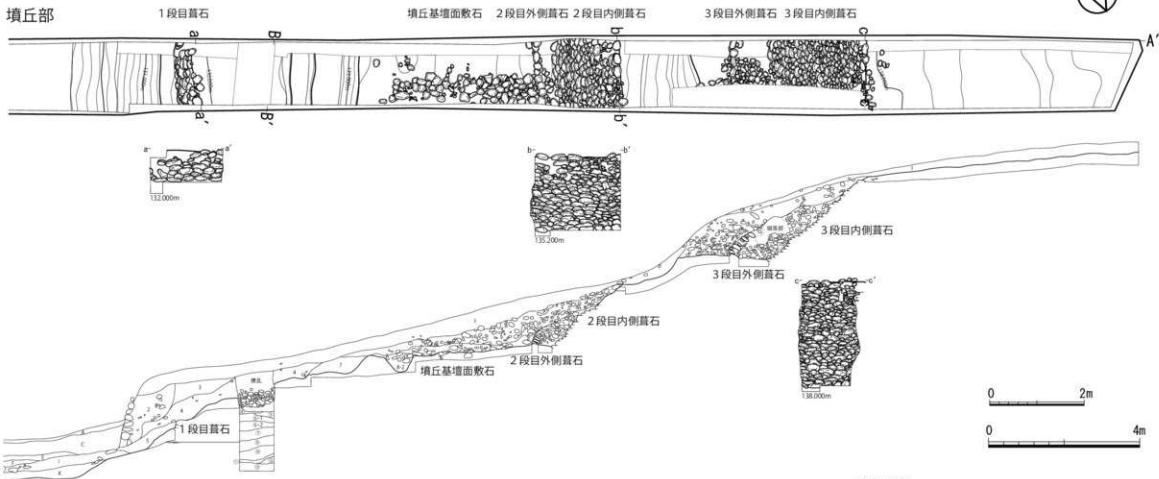
第36図 愛宕山古墳想定復原図 ($S = 1/600$)



0 1m

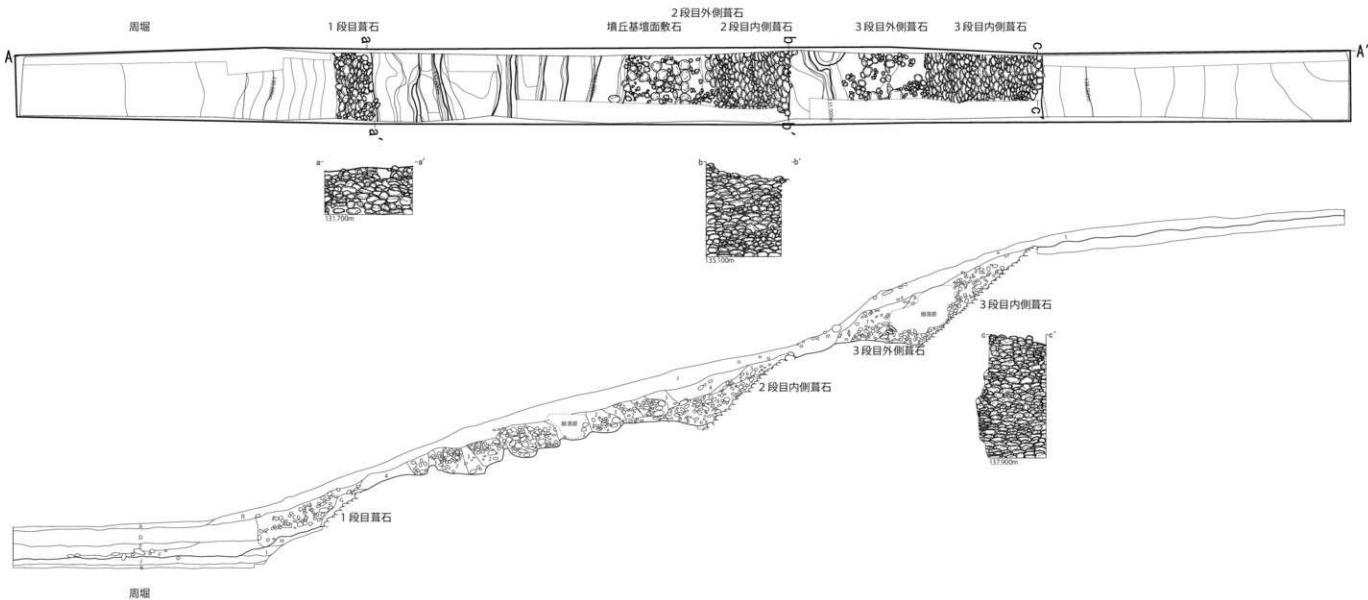
第37図 愛宕山古墳石室及び石棺実測図

北トレント



第38図 愛宕山古墳北トレント

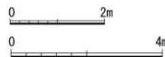
西トレンチ



周壁土層説明	
A	灰褐色土 無 空車跡の粒状土層。バックス主体。
B	灰褐色土 有 灰褐色土。小礫を少量含む。
C	灰褐色土 有 灰褐色土。小礫を多量含む。石板とその裏込め。
D	灰褐色土 有 灰褐色土。白色粘土多量に含む。
E	黒褐色土 有 灰褐色土。Ar-B軽石を含む。
F	黒褐色土 有 灰褐色土。(削落した川原石)。大~小礫を含む。
G	灰褐色土 有 灰褐色土。Ar-C軽石を含む。
H	黒褐色土 有 灰褐色土。Ar-C軽石を少量化含む。(填丘盛土)
I	黒褐色土 有 灰褐色土。Ar-C軽石を多量に含む。(堆山)
J	褐色土 有 灰褐色土。Ar-C軽石を多量に含む。被付砂層。(地山)
K	黄褐色砂質土 有 黄褐色土ブロックを多く多量に含む。

填丘部土層説明	
1	灰褐色土 弱 灰褐色土。小礫を少量含む。
2	灰褐色土 有 灰褐色土。大~中礫を多量含む。
3	灰褐色土 有 灰褐色土。小礫を多量含む。
4	灰褐色土 有 灰褐色土。Ar-H軽石主体。中~小礫を少量含む。
5	黒褐色土 有 灰褐色土。Ar-H軽石主体。中~小礫を多量に含む。
6	黒褐色土 有 灰褐色土。大~小礫主体。
7	黒褐色土 有 灰褐色土。Ar-H軽石を多く多量に含む。
8	黒褐色土 有 灰褐色土。大~小礫主体。

第39図 愛宕山古墳西トレンチ



1.23m、高さ0.5mを測る。また、遺存状態の良好な奥壁側の棺蓋で見ると、繩掛突起は棺蓋上面付近からほぼ水平に伸び、端部は若干棺蓋端部より突出する。形状は畿内の家形石棺に酷似しており、周辺では入手不可能な凝灰岩を用いていることから、畿内の工人の手によるものと推定されている（右島1985）。

出土品

平成・令和の調査では、繩文土器や石器、円筒埴輪、須恵器、瓦、陶磁器類などが出土しているものの、石室やその周辺が未調査であることもあり、古墳の築造年代を示すとみられる遺物は出土していない。

築造年代

これまで本古墳の築造年代を示す出土品は得られていないものの、高崎市観音塚古墳と共に通する巨石巨室構造の横穴式石室を持つことや、家形石棺の年代観などから7世紀前半の築造と考えられる（右島1988・白石編1990ほか）。

愛宕山古墳の価値

○上毛野地域最大規模の大型方墳

上毛野地域では、八幡観音塚古墳（高崎市）や伊勢山古墳（前橋市）を最終段階として前方後円墳の築造を停止し、埴輪を用いた墳丘祭祀も終える。総社二子山古墳の至近の場所に築かれた本古墳は、墳丘長57mの3段築成の大型方墳で、墳丘周間に幅の広い堤を巡らせ、兆域は一辺94mに及ぶ。墳丘での埴輪の樹立は認められず、墳丘形状も方墳を採用するなど、新たな時代の到来を象徴している。関東地域では、各國の最高首長墓の墳丘長は60m前後以上と畿内の王陵に匹敵した規模を持ち、引き続き墳丘規模により身分序列表示していたことが指摘されている（青木2007）。本古墳は上毛野地域で隔絶した墳丘規模を誇り、ヤマト王権主導の全国的な地域再編の結果、上毛野国一帯の頂点を占めたことが推定される（右島2003）。

○多量の川原石を使用した重厚な墳丘建築

本古墳は、墳丘斜面のみならずテラス面にも川原石が敷かれ、2・3段目の墳丘斜面には二重の葺石を施すなど、多量の川原石を使用した重厚な墳丘建築が確認されている。墳丘規模のみならず莊厳な墳丘は、視覚的に權威の強大さを表徴していたと考えられる。多量の川原石を使用した墳丘建築は、上毛野地域でも西部地域～北武藏地域との技術的交流により成立したことが指摘されており、山上碑の碑文や『上野国交替実録帳』に見られる山名や佐野地域との濃密な関係とともに本古墳を築いた勢力の支持基盤の広さを示すと考えられる（前原2010）。

○巨石を用いた畿内型の大型横穴式石室と家形石棺の採用

本古墳の埋葬主体部は、面加工を施した輝石安山岩の巨石を使用した巨大な横穴式石室で、総社二子山古墳前方部石室を大きく上回る規模を持つ。また、玄室天井面は羨道よりも一段高く架けられるなど、前段階の八幡観音塚古墳を含め奈良県石舞台古墳等畿内の有力墳と共に通した畿内型の石室を持つ（右島2022ほか）。玄室奥壁付近に置かれた凝灰岩製の刳抜式家形石棺は同時期の上毛野地域唯一の例で、畿内の工人の手によるものと推定されている（右島1985・1988、白石編1991）。巨石を用いた大型石室の構築や畿内的な家形石棺の安置など畿内有力者層の墓制が色濃く認められ、本古墳を築いた勢力が地域の再編成を進めるヤマト王権との強力な連携関係を構築したことを物語る。

第5節 宝塔山古墳

由来

本古墳は奈佐勝臯『山吹日記』(天明6年(1786))に記載が見え、吉田芝溪の『上毛上野古墓記』(文化7年(1810))には石室や石棺のつくりや規模など詳細な観察が記されている。また、本古墳の被葬者は彦狭島王の御墓とされる。『上毛古墳綜覧』では総社町9号墳として、墳丘長177尺の方墳と記載されている。所有者は秋元氏、石室・石棺を有し、彦狭島王の墳墓と伝える旨を記している(群馬県1938)。初代総社藩主である秋元氏の菩提寺である光巖寺の旧境内地にあり、墳頂部には秋元氏歴代墓地(市史跡)が、また墳丘南西部には光巖寺歴代住職の墓地が置かれている。

調査・整備履歴

宝塔山古墳は、大正9年(1920)に福島武雄氏により、また昭和31年(1956)には群馬大学史学研究室により石室の測量調査が行われている。そして、昭和43年(1968)に保存整備事業に伴って前部及び石室の調査が行われ、川原石を積み上げた長方形プランの前部が取り付くことが明らかになった。この調査に基づき前部及び石室入口の整備が行われている。昭和54年(1979)には、下水道工事に伴って本古墳南東の墳丘裾部が確認された。現地表面から1.5m下で地山とみられる黒色土が堆積し、黒色土上面には盛土と葺石が検出された。また、地山となる黒色土は直接周囲には至らず、平坦面が続くとの観察がなされている(右島1985、白石編1990)。残念ながら現在調査位置は特定されていない。平成元年には墳丘及び石室の現況測量調査が行われ、墳丘長は56m以上、高さ約12mの3段築成の大型方墳であることが確認された(白石1990)。また、平成19・21年度及び23年度には範囲確認調査等が行われ、周囲の北東隅周辺を検出し、墳丘長は60m以上、兆域は一辺100mに及ぶと推定され、隣接する蛇穴山古墳と接するほど至近の位置まで広がっていることが判明した(前橋市教育委員会2010、2011)。令和3年度に実施した範囲内容確認調査により、周囲北側～東側の立ち上がりのラインが概ね確定するとともに、墳丘北西コーナーが検出された。発掘調査により墳丘部が確認されたのは本調査が最初であり、その結果墳丘長は一辺60m、兆域は一辺104mに及ぶことが明らかになった(前橋市教育委員会2023)。令和4年度には、早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所との共同調査として、本古墳石室の3次元計測調査を実施した。本調査により石室の正確な位置や形状が図化された。石室の遺存状態やこれまで記録化されていなかった石室に塗布された漆喰の範囲などを把握され、本古墳の基礎データの収集が図られた(奥・青木2023)。

古墳の規模と特徴

周囲外側の立ち上がりは北側～東側にかけて検出されている。総社町屋敷南遺跡では北西コーナー部が、総社町屋敷南遺跡Ⅱでは北側立ち上がりがそれぞれ検出され、令和3年度調査でも北側立ち上がりが確認されており、古墳中心より51～52mほどの位置で立ち上がることから、周囲の一辺は104mほどと推定される。また、総社町屋敷南遺跡Ⅱなどで堀の底面に溝状遺構が検出されており、墳丘主軸に沿うことから周囲削削時の作業痕跡である可能性が指摘されている(前橋市教育委員会2011)。

27トレンチでは墳丘裾部が確認でき、墳裾の北辺と西辺が接する北西コーナーを捉えることができた。基盤層である総社砂層を掘削して構築し、上層にはAs-B鉱石を含む黒色土層が堆積する。コーナー部周辺の堀底面で川原石が出土しているが、墳丘斜面に積み上げた様子は確認できなかった。また、下水道工事に伴って墳丘南東の位置で1段目葺石が検出され、葺石内側に版築状の盛土による墳丘を構築することや、愛宕山古墳や蛇穴山古墳と同様に葺石根石から一定の幅を隔てて周囲が構築された様子が確認されている(右島1985、白石編1990)。愛宕山古墳の墳裾の様子や、本古墳墳丘南東部での観察所見から、墳裾より一定の高さまで立ち上がり、幅の狭いテラスを挟んで1段目葺石が施されると考えられる。コーナー部で確認された北辺・西辺とも、周囲下端の位置で古墳中軸線から約30mの距離にあることから、墳丘規模は一辺約60mと推定される。

これまで石室前部周辺を除き、中～上段墳丘の調査は行われておらず、墳丘の現況測量調査に伴って墳丘形状の推定が行われている。北側から西側にかけては後世の変更が少なく墳丘斜面の状態も比較的良好である。墳丘測量図では標高131.5m付近から135.0m付近の間の幅の広い緩傾斜面(上位面)と、標高129.0～129.5m付近から後世築造の石垣までの間の幅の狭い緩傾斜面(下位面)という2段の傾斜変換点が見られる。下位面の標高は石室入口付近の標高に近似している。また墳頂部には秋元氏歴代墓地が置かれているが、強い削平を受けた様子は観察されない。こ



宝塔山古墳全景（南より）



調査前の石室内の様子①



調査前の石室内の様子②



調査中の前底部の様子



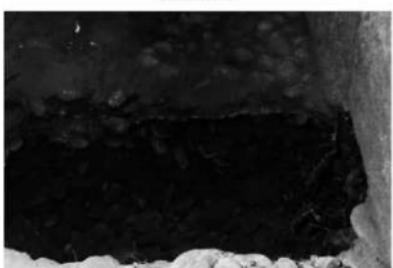
前底部左側壁



前底部右側壁

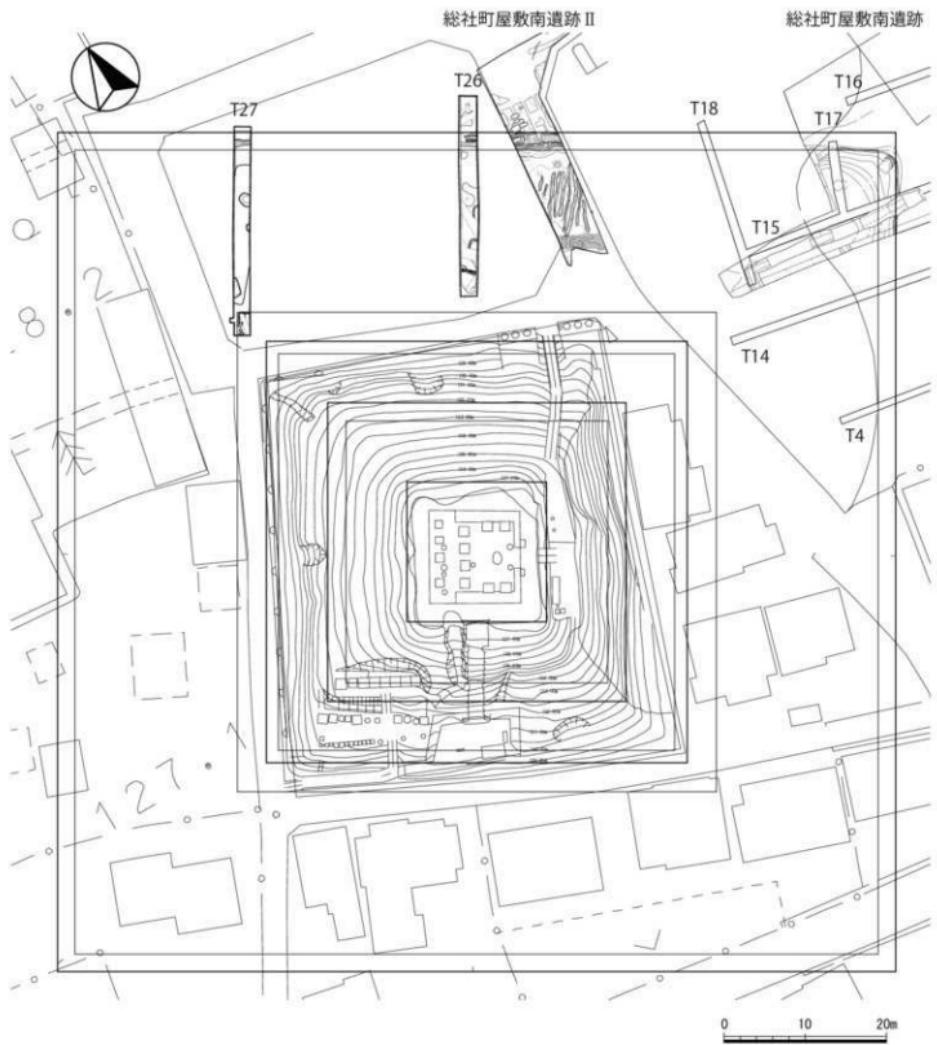


玄門床面切石

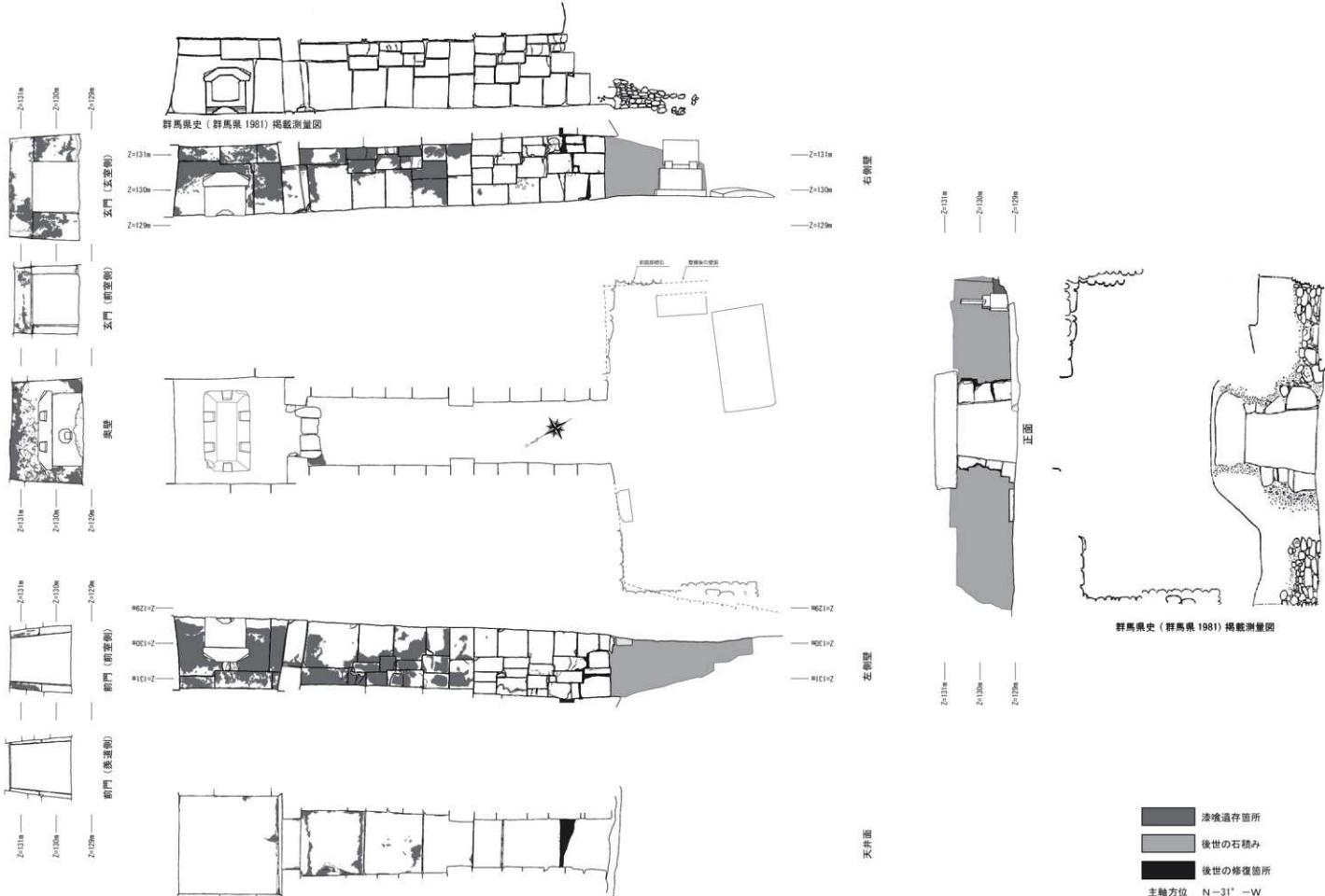


石室基礎構造

第40図 宝塔山古墳石室調査写真（昭和43年 群馬大学提供）



第41図 宝塔山古墳想定復原図 (S = 1/600)



第42図 宝塔山古墳石室実測図 (S = 1/100 横・青木2023を一部改変)

れらのことから3段築成の墳丘に復原がなされている（白石編1990）。令和3年度調査では墳丘北西コーナーが検出されたことから、平成元年度の測量調査成果に依拠し、石室の主軸方向（N-31°-E）に合わせて若干修正した墳丘復原図を作成している（前橋市教育委員会2023）。

埋葬施設

埋葬主体部は墳丘南側の、現地表面から3mほどの基壇面（墳丘第1段平坦面）上に開口する両袖式横穴式石室で、全長12.04m、玄室・前室・羨道から成る複室構造をとる。昭和43年には開口部および前庭部の史跡整備を目的とした確認調査が行われ、石室前面には川原石を積み上げ、平面形が「コ」字状を呈する前庭部を敷設していることが確認されている（前橋市教育委員会1968）。本調査結果に基づいて、石室入口及び前庭部は整備が行われている。石室は「截石切組積石室」で、羨道、前室、玄室から成る複室構造をとり、前門や玄門を設け、羨門も伴っていたとみられる。石室プランは奈良市帶解黃金塚古墳の石室設計企画を共有していたものと推定している（右島2010ほか）。石室全長12.04m、羨道長3.56m、前室長3.9m、玄室長3.32mを測る。各壁面は4段・3段・2段に積み上げ、玄室奥壁は1石で構成されるなど、玄室奥に向かうにつれ使用石材の規模も大きくなる。壁面石材の多くは角閃石安山岩を用い、前室や羨道には切組の手法が顕著である。天井面は前室が最も低く、玄室は約10cm、羨道は約15cm高い。羨道・前室の天井は3石、玄室は1石からなり、硬質の輝石安山岩を平滑に加工して用いる。玄室の天井石は天井面の周囲を欠き取って落とし込みの手法を用いており、蛇穴山古墳の玄室天井石の加工と共通する。

石室床面には3~4cmほどの小礫層が床面となり、その下位には角閃石安山岩剥片と、小児頭大の川原石が玄門付近で1m以上堆積している。壁面根石は礫層上に構築されていることから、石室構築の基礎構造と推定されており、防湿効果などが想定されている（石川1981）。羨道から玄室にかけて、壁面及び天井には漆喰が塗布され、玄室の漆喰遺存状態は良好である。特に、壁面と天井面が接する隅角を中心として、凹部を埋め込むように厚く塗りこめている。骨材を含む目地漆喰のほか、表層には塗装材としての漆喰を刷毛塗りしている（朽津2015）。県内以外の地域での漆喰が使用された古墳も福山市大佐山白塚古墳などわずか数例のみである（朽津2005・2006、角田2011、右島2016）。

令和5年2月、右島和夫氏（群馬県立歴史博物館）、廣瀬覚氏（奈良文化財研究所）らによる調査で、石室内に朱線が施されていることが明らかになった。朱線は玄室側玄門・側壁・奥壁・天井石、前室及び羨道側壁で確認されている。南下E号墳で多く確認された、切組を施した位置の延長線上のほか、玄門の中軸線となる箇所でも検出されている。詳細な朱線の位置や範囲については今後調査を予定している。

家形石棺

玄室中央やや奥壁よりの位置に、輝石安山岩製の剝抜式家形石棺が置かれており、主軸と直交する方向に長軸を取る。蓋部は長辺230cm、短辺132.6cmで、長辺に各2個、短辺に各1個の縄掛突起を造り出す。身部は長辺210cm、短辺114cm、高さ約88cmを測る。石棺底部には正背面及び両側壁に格狭間が割り込まれ、四隅は脚部状を呈する。身部正面は、左側下部に円形の穿孔と正面に八角形の割り込みが施され、八角形の割り込み内下部に方形の穿孔を施す。割り込みに対応する板石が石室内から出土している。石棺外面は平坦に作られ、身部を中心にチョウナタタキ痕が良好に残る。

畿内有力者層の墓制の強い影響下にあることが明らかで、直接的な技術の導入が想定されている（右島2010）。本古墳の築造と並行して、古墳群南西0.8kmほどの場所で法起寺式の伽藍配置を持つ山王庵寺が創建されており、本古墳の造営主体とヤマト王権の強い関係性を示すものだろう。

出土品

これまでの調査で主に周堀内より土師器や須恵器、瓦、陶磁器類などが出土している。27トレンチでは周堀立ち上がり付近で角閃石安山岩の剥片が多量に出土しており、石室石材の加工の際に生じたものとみられる。

前庭部床面付近では寛永通宝が出土し、石室前門柱下からは「開元通宝」、「天喜通宝」、「皇宋通宝」、「嘉祐通宝」、「治平通宝」各一枚が重なって出土したと報告されている。前門柱下の5枚の貨幣は唐銭・北宋銭のみであることから中世の埋納と考えられ、石室の開口時期も近い年代と推測されている（石川1981）。

築造年代

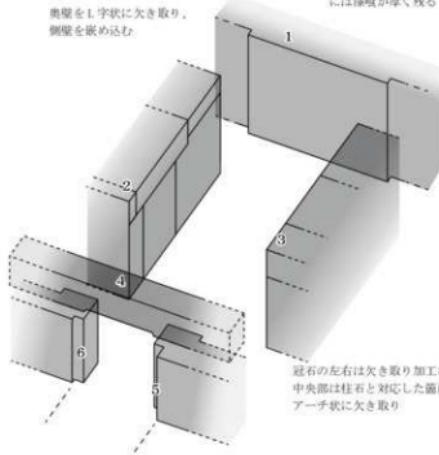
出土品からは本古墳の築造年代は知りえないものの、硬質な石材を加工した完成度の高い截石切組積石室や家形石棺の年代観などから、7世紀中葉から第3四半期の築造と推定されている（右島1985、白石編1990ほか）。

天井石の四辺を欠き取り、
玄室に落とし込む
ただし、玄門と奥壁側の
欠き取りは部分的



各欄面の組み合ふ箇所
には漆喰が厚く残る

奥壁をL字状に欠き取り、
側壁を嵌め込む



冠石の左右は欠き取り加工なし
中央部は柱石と対応した箇所を
アーチ状に欠き取り



1. 奥壁上部左側



2. 前壁上部左隅角



3. 前壁上部右隅角



4. 前壁下部左隅角



5. 前壁下部右隅角



6. 玄門門柱石（左）

番号中の右・左表示は玄門から奥壁に向かって右・左

第43図 宝塔山古墳の石室構造 1 (吳・青木2023より)



玄室右侧奥壁付近漆喰塗布状況



通道右侧壁漆喰塗布状況



玄門玄室側中央朱線



玄室右侧壁朱線



前室右侧壁朱線

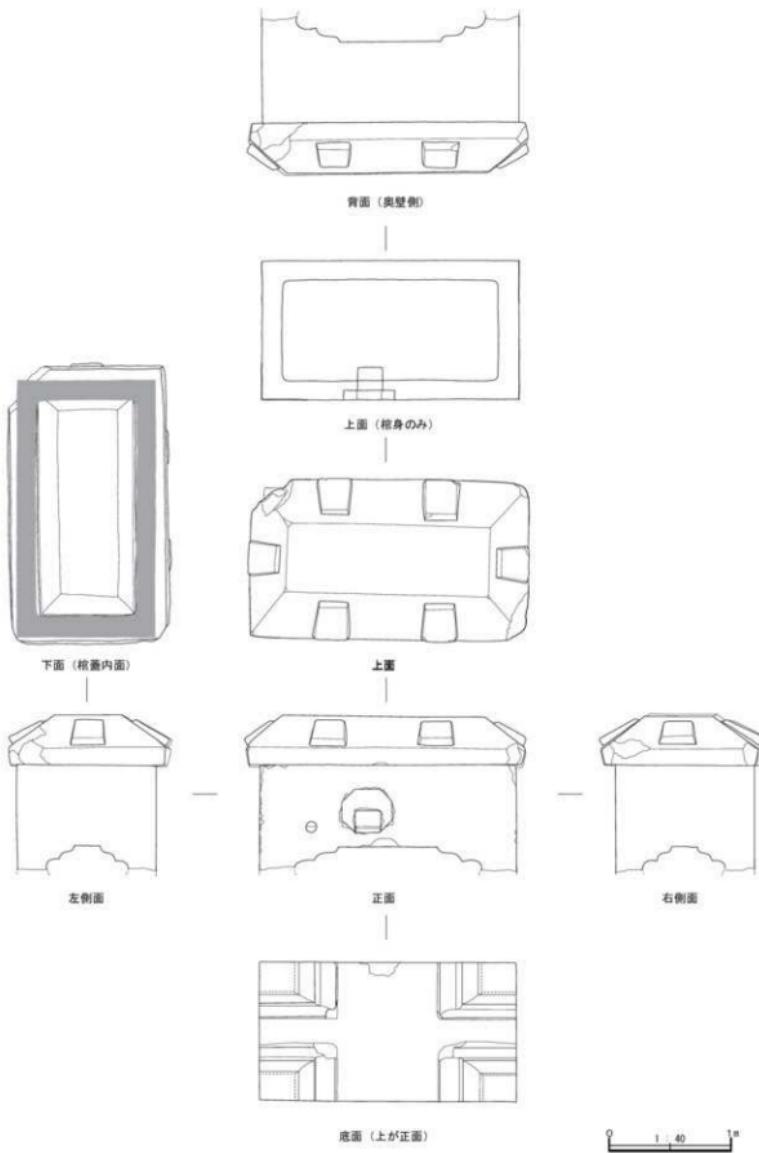


玄室左侧壁朱線



前室棒状鉄製品（左側壁天井付近）

第44図 宝塔山古墳の石室構造2



第45図 宝塔山古墳石棺実測図 (呉・青木2023)

宝塔山古墳の価値

○愛宕山古墳から続く上毛野地域最大規模の古墳

本古墳は、愛宕山古墳に統いて巨大な墳丘を築き、墳丘長は愛宕山古墳を上回る60mに及ぶ3段築成の古墳で、墳丘高も現地表面から10.5mを測る。また墳丘の周囲に幅の広い堀をめぐらせ、堀城は104mを測る。引き続き圧倒的な規模を誇り、上毛野地域の一元化を果たした前代から地位を繼承した首長の巨大なモニュメントとして存在していたと推定される。畿内では官人制の導入により墳墓による身分秩序の表示が意味をなさなくなり、新たなモニュメントとして山王庵寺の造営が進められる中、本古墳のような大型方墳の築造は、依然として古墳建築に注力し、墳丘規模を身分表徴とする地域的特性が表れている。

○硬質石材を使用した巧みな石材加工技術

埋葬主体部は、墳丘第1段南側に開口した横穴式石室で、石室全長12.04m、玄室長3.32mと長大な平面規模を持つ。角閃石安山岩や輝石安山岩の切石を巧みに組み合わせた「截石切組積石室」で、周囲をL字状加工した天井石の落としこみや、奥壁や門柱石を巧みに加工して組み合わせた玄室構造など、硬質な石材を自在に加工している様子が伺える（呉・青木2023）。石室の平面プランは、右島和夫により奈良市帶解黃金塚古墳との詳細な比較検討がなされ、共通した設計企画に基づき構築されていることが明らかになっている（右島2010・2011）。硬質石材の加工は、同時期に造営が開始された山王庵寺における石材加工技術と一緒にものと捉えられ（尾崎1966、右島2010ほか）、畿内の切石積石室と連動して石室構築技術の粹をあつめた石室と評価される（右島2003・2010）。

○畿内の有力墳と共に持する特徴を備えた石室

本古墳の石室は、朱線により構築・加工の設計が行われ、その後石室全面に漆喰を塗布して石室内を白く平滑に仕上げる。石室への漆喰の使用は、後続する蛇穴山古墳のほか上毛野地域では南下A号墳のみであり、朱線の存在も畿内以外では上毛野地域で数例のみ認められる。朱線や漆喰を使用した石室構築技術は、畿内からの直接的な技術の導入が想定されている（朽津2005・2006、右島2016）。また、玄室に置かれた家形石棺は、硬質な輝石安山岩を精緻に加工したもので、愛宕山古墳同様畿内の家形石棺に近似したつくりを持つ。石棺の脚部には格狭間が削り込まれ、聖徳太子墓や御嶽山古墳、天武・持統合葬陵などの棺台の意匠と共通する（尾崎1966・1973、右島1985、白石編1991、林部2023ほか）。截石切組積石室や朱線・漆喰の使用、格狭間を持つ家形石棺など、愛宕山古墳と同じく畿内の最有力者層の墓制を積極的に取り入れており、ヤマト王権との親密な連携・協力関係を示す。

第6節 蛇穴山古墳

由来

『神道集』（文和・延文年間編纂）には、「那波八郎大明神の事」として、八郎大明神が投げ込まれた「蛇塚の岩屋」の記載がある。寛永16年（1639）の紀行文である『伊香保記』では光巣寺に「八郎權現の岩屋」があったと記載されており、両史料に見える「岩屋」は蛇穴山古墳を指している可能性が高い。また、『神道集』の成立段階で、蛇穴山古墳に「蛇」にまつわる伝承がすでにあった可能性がある。玄室奥壁には、蛇を模した梵字とともに、寛文11年（1671）に江ノ島弁財天より勧請して石室を弁天堂として祀った旨が刻まれる。天明6年（1786）の紀行文である『山吹日記』（奈佐勝臥）には蛇穴山古墳の記述がみられ、墳頂部に觀音堂が、石室に弁天堂が置かれていたことが知られる。この他明治から大正期には墳頂部に薬師堂が、昭和初期には同じく墳頂部に奉安殿が置かれるなど、信仰の場として盛んに利用されていた。『上毛古墳綜覧』には総社町8号墳として、墳丘長111尺、高さ18尺の円墳と記載され（群馬県1938）、昭和49年に史跡指定されている。

調査・整備履歴

本古墳は環境整備事業に伴って昭和50年度に墳丘裾部及び前庭部～石室の調査が行われ、葺石の根石の配列方向から方墳であることが明らかになった（前橋市教育委員会1976）。本調査に基づき、前庭部壁面の下端にコンクリートを流し込んで固定したほか、前庭部境界の切石列が欠けた部分をコンクリートで復原している。また、小学校校庭や総社幼稚園に隣接していたことから、前庭部東側に墳頂部までの階段が設置され、墳頂部には鉄製柵が置かれた。この他墳丘裾部には石積みを施工し、植栽が施された。

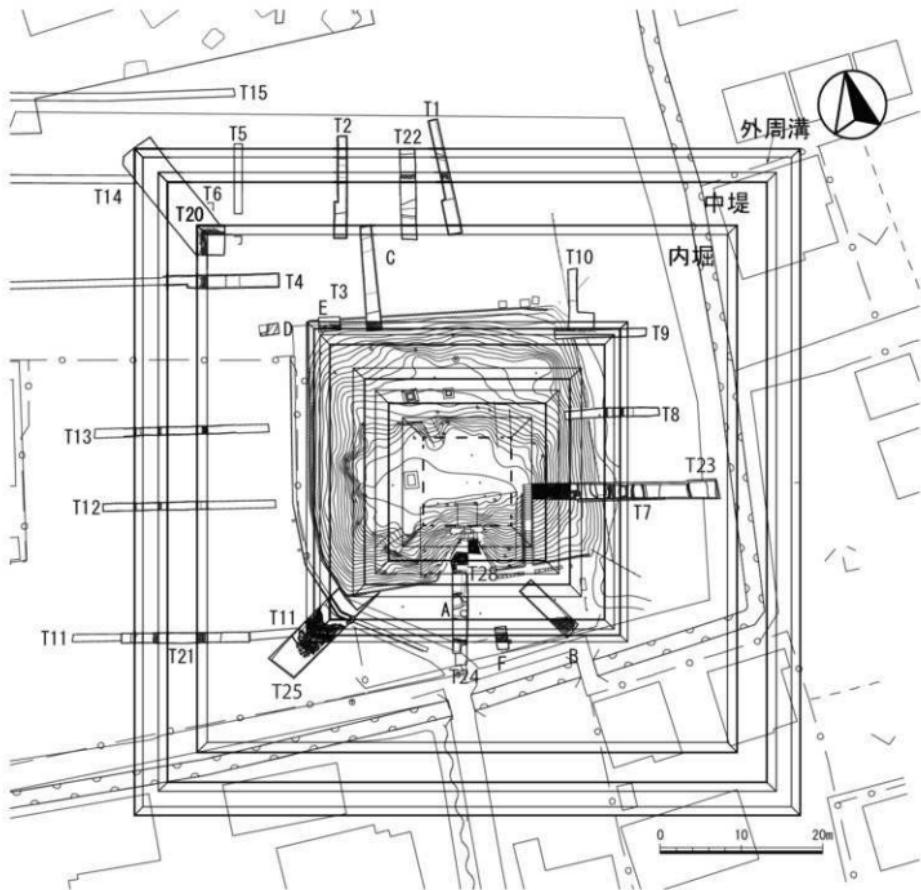
平成19年度及び21年度には、公民館建設に先立つ範囲確認調査が実施された。墳丘周囲に内堀が巡り、内外に葺石を施した中堤を挟んで外周溝が囲んでおり、元城は一辺82mに及ぶことが判明した。墳丘規模は40m以上で、墳丘裾から少なくとも2段の葺石を施すなど、入念に構築された古墳であったことが明らかになっている。また、内堀に沿って幅の広い溝が後世に構築され、これにより周堀や中堤、墳丘裾部が壊されていることも確認されている（前橋市教育委員会2010）。

古墳の規模と特徴

平成の調査により二重の堀が巡ることが明らかになっている。古墳北側では1・2・22トレンチで内堀・中堤・外周溝が、またCトレンチで内堀が検出されている。20トレンチでは中堤北西コーナーが検出されている。古墳西側では、4・11～13・21トレンチで内堀～外周溝が確認されている。古墳東側では7～10・23トレンチで、また古墳南側ではA(24)トレンチで内堀が確認されている。外周溝は一辺82m、内堀幅12.5m、中堤幅3.5～5m、外堀幅約4mで、中堤の内外面には葺石を施す。中堤の内側北西コーナーでは、大ぶりな川原石を横長手に積み上げ、隅を基点として葺石を施す（20トレンチ）。

昭和及び平成の調査から、墳丘裾には葺石を施した高さの異なる2段があり、2段目葺石上面の平坦面に石室が開口すると想定されている。古墳南側（A(24)・F・Bトレンチ）、古墳東側（7(23)・8トレンチ）、古墳北側（C・Eトレンチ）、古墳西側（25トレンチ）で墳裾が確認され、1・2段目葺石が検出されている。25トレンチでは南西コーナーが確認でき、コーナー部にはやはり大ぶりな川原石を横長手に積み上げ、隅を基点として葺石を施す様子が見られる。内堀の立ち上がりである1段目葺石の根石は古墳中心点より19.5mほどの位置に据え、高さは約0.5mを測る。頂部には墳丘各辺に沿って扁平な川原石を列状に配す。1段目葺石は地山を削り出して構築している。1段目葺石頂部から1mほどのテラス面を挟んで2段目葺石を施す。2段目葺石は盛土を積み上げた墳丘外面に施される。根石は中心点から18mほどの位置で、約1.5mの高さまで積み上げる。やはり頂部には墳丘の辺に沿って扁平な川原石を列状に配す（Bトレンチほか）。2段目葺石頂部の平坦面は、他の古墳の基壇テラス面に相当し、テラス幅は3mほどと推定される。

基壇面の墳丘裾は大きく削平を受けているが、中心点より14mほどの位置から高さは1mほどの葺石をしており、3段目葺石と推定される。3段目テラスは幅1m強、床面には大き目の川原石を密接して敷く。4段目葺石は小標を裏込めとした内外二重の葺石を施しており、愛宕山古墳の施工方法との共通性が見られる。本古墳では外側葺石の遺存状態が良好で、内側葺石の2/3ほどの高さまで残存しており、古墳築造時は内外とも1.5mほどの高さに積み上げ、墳丘盛土に接する内側葺石は隠れていたと考えられる。4段目墳丘テラス面は幅1.5m以上で、大き目の川原石



第46図 蛇穴山古墳想定復原図 (S = 1/600)

を敷く。また、4段目テラス面もAs-B軽石を含む多量の川原石で覆われており、墳丘北側墳頂部付近で葺石列とみられる石列が存在することから、5段目墳丘が存在したことが推定される。

1段目葺石根石を基点として計測すると墳丘は一辺39.5m、墳丘高6.8m以上、周堀からの立ち上がりを含めて4段以上に復原できる。

埋葬施設

埋葬主体部は、墳丘基壇テラス面の南側に開口する。前庭部は「ハ」字状に開き、壁面に角閃石安山岩や牛伏砂岩の切石を用いる。玄室入口には切石を敷いた短い梯道状の施設を持ち、玄室側は1段高くなる。また、前庭部側に敷かれた切石は、前面が打ち欠かれている。玄室前壁は門柱状の加工を施した切石を左右に配し、下面を階段状に加工した冠石を前壁の上に置く。玄室の規模は宝塔山古墳に比べて若干小型化し、玄室奥壁付近には牛伏砂岩製の「棺台」と推測される方柱状切石が置かれ、長辺約130cm、短辺約60cm、高さ約60cmを測る。側壁や奥壁、天井石は輝石安山岩の巨石1石で構築し、各石材が接する部分には「L」字状に加工して組み合わせる。また天井石は宝塔山古墳同様周囲を欠き取り、落とし込みの手法をとる。玄室の石材加工は、自然面なども利用して平滑になるよう精緻な加工がなされ、ノミ小叩きの痕跡が看取される。一方前庭部側壁はノミ状工具による粗い加工が施され、冠石にも切妻の屋根が取り付いたとみられる後世の加工痕が残るなど、硬質石材を自在に加工して精緻に組み上げる。宝塔山古墳に続き石室全面に漆喰を塗布するが、より薄く平滑に仕上げるなど、石室構築技術は一層精巧さを増している。

石室構築場所の基礎構造を把握するため、前庭部にトレンチを設定して確認したところ、前庭部境界の切石列の位置より玄室側では、As-C軽石を含む地山層直上に拳大～人頭大の川原石を多量に含む層が堆積し、前庭部全面に及ぶことが確認された。ほとんど土を含まず、川原石のみから成る。同様な土層の堆積状況は昭和50年度調査の石室内でも確認されており、径5～15cmが床面下0.8mほどまで詰められ、上半の層位には天井石・壁面等の削片を含むとの所見が得られている（前橋市教育委員会1976）。玄室から前庭部にかけて川原石を多量に敷き詰めていたことが確認され、宝塔山古墳石室の基礎構造とも共通する（石川1981）。

本古墳の築造とともに並行して山王庵寺の造営事業が進められており、本古墳に顯著な硬質石材の加工技術には、寺院造営に伴う新規技術の導入との関係が想定される（右島2022）。

出土品

墳丘盛土に含まれた繩文土器や土師器、須恵器、後世の利用に伴う近世から現代の陶磁器、瓦、レンガ、土製品などが出土している。墳丘盛土に含まれていると見られる遺物のほか、22トレンチでは外周溝より9世紀後半の所産と見られる把手付瓶が出土している。また、前庭部では床面上で庚申塔が、玄室では床下から寛永通宝が出土したほか鉄釘などが出土している（前橋市教育委員会1976）。本古墳の築造年代を示す遺物は出土していない。

築造年代

出土品からは本古墳の築造年代は知りえないものの、小型化した精緻な加工がなされた石室づくりなどから、7世紀後半の築造と推定されている（右島1985ほか）。

蛇穴山古墳の価値

○上毛野地域最後の大型方墳

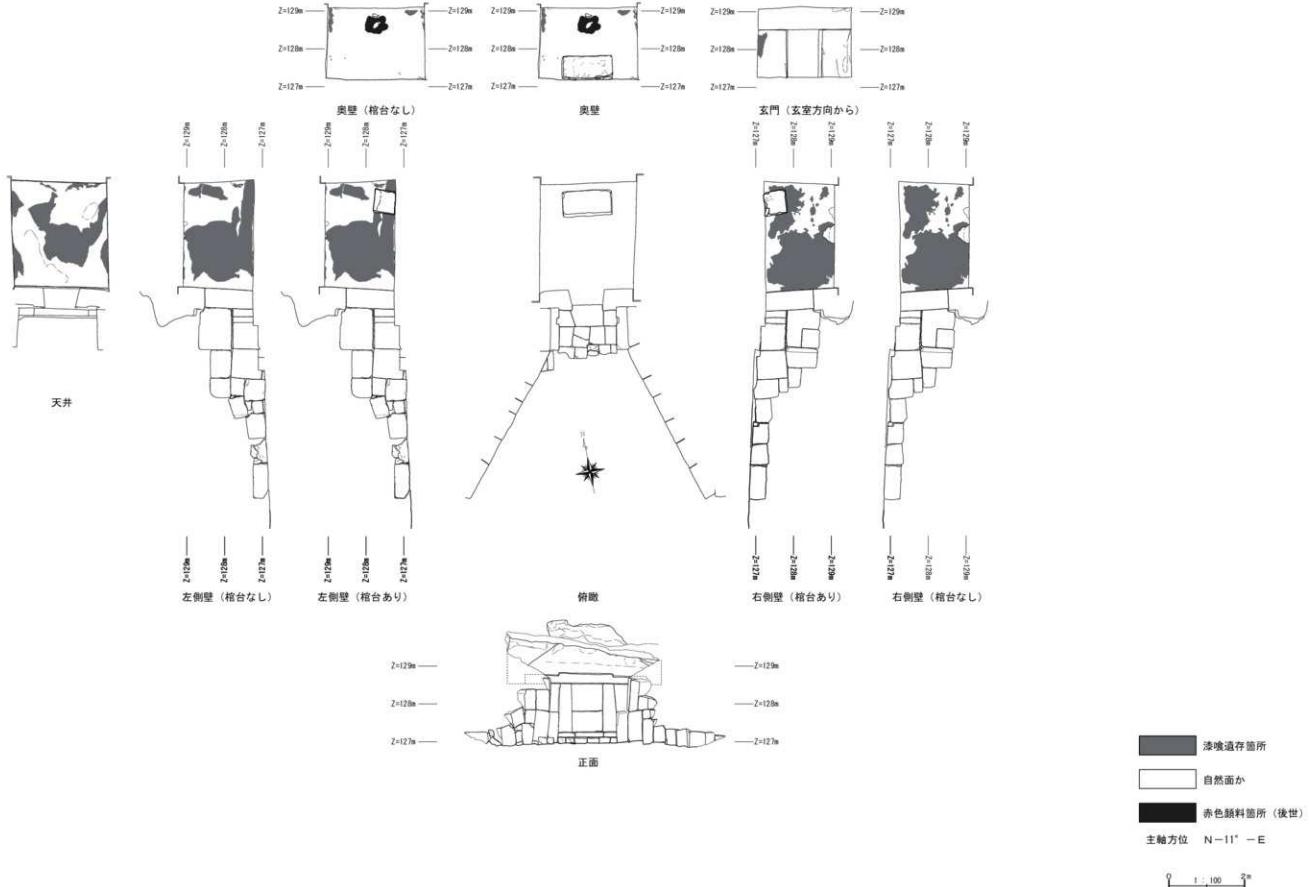
本古墳の墳丘長は1辺39.5mと、愛宕山古墳や宝塔山古墳と比べ縮小化し、畿内の趨勢と連動したものと理解されるが（右島2010）、墳丘周囲には中堤を挟んで内堀・外周溝と二重の堀をめぐらせ、4段以上の段築を持つ莊厳な墳丘と広大な兆域を持つ。依然として上毛野地域最大規模を誇り、視覚的に地位や権威の強さの象徴として機能していたと見られ、上毛野地域最後の首長墳としてふさわしい規模を持つ。

○多量の川原石を使用した重厚な墳丘構築

本古墳は、墳丘裾部から墳頂部にかけて、平坦面や墳丘斜面全体を川原石で構築していたことが明らかになっている。上段墳丘は愛宕山古墳同様二重の葺石を施し、重厚なつくりとなっている。また、中堤の内外にも葺石を施すなど、前代までの古墳には見られなかった箇所まで意を凝らした構築がなされ、墳丘や兆域の規模と併せ視覚的な要素を重視していたと見られる。

○精緻な石材加工技術を駆使した石室

畿内の古墳構築の流れと連動して墳丘や石室の規模は縮小するものの、天井石・奥壁・両側壁ともそれぞれ硬質な輝石安山岩1石で構成される。自然面なども巧みに取り込み、ノミ小叩きにより平滑に仕上げられている（吳・青木

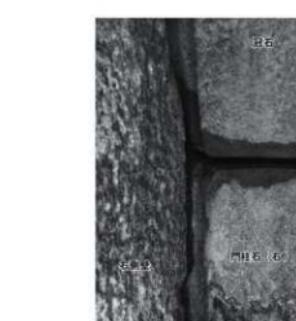
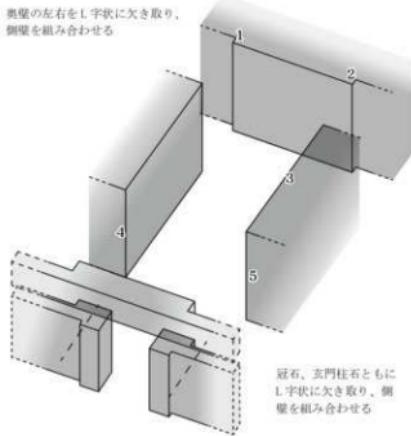


第47図 蛇穴山古墳石室実測図 (S = 1/100 奥・青木2023)

天井石の四辺を欠き取り、
玄室に落とし込む



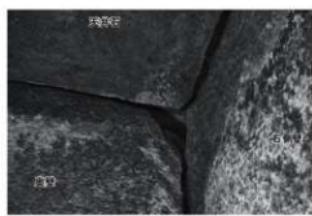
奥壁の左右をL字状に欠き取り、
側壁を組み合わせる



5. 前壁右中央部



1. 奥壁上部左隅角



2. 奥壁上部右隅角



3. 右側壁上部中央

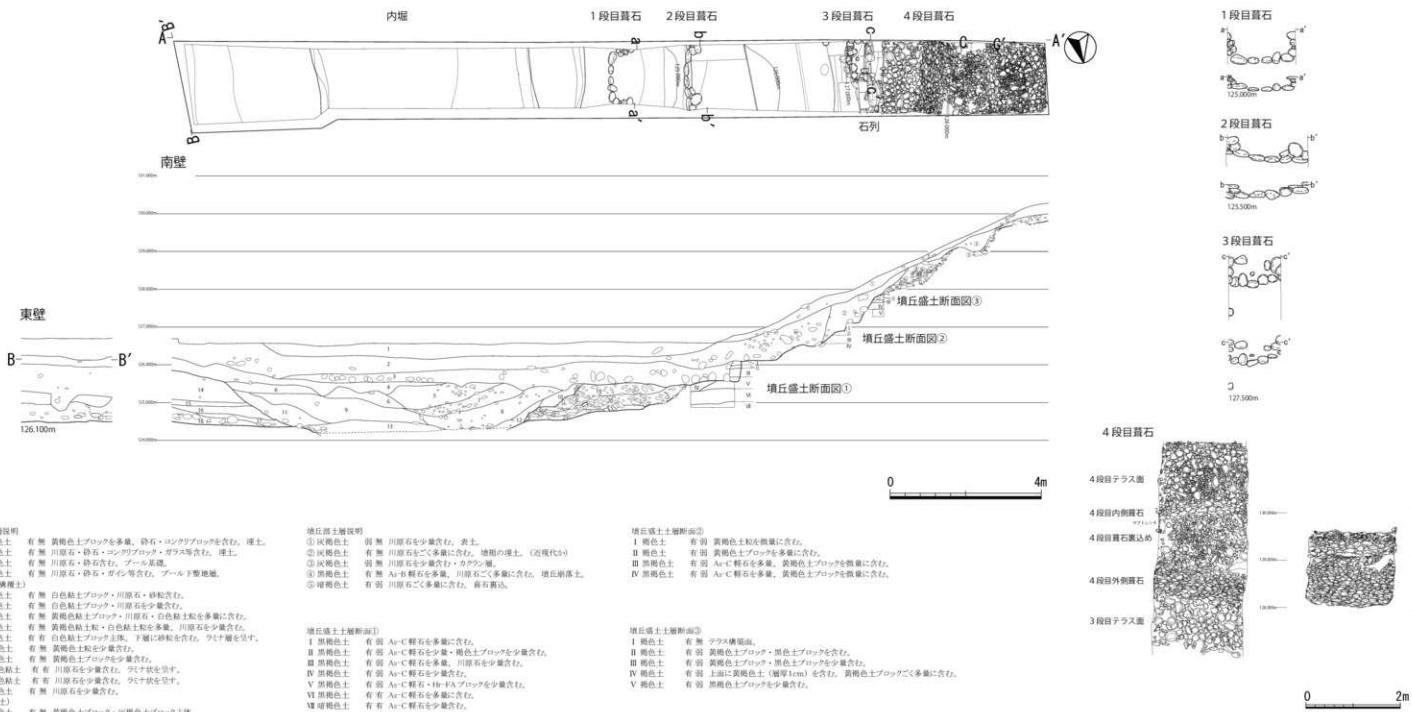


4. 前壁上部左隅角

奈良中の右・左表示は玄門から奥壁に向かって右・左

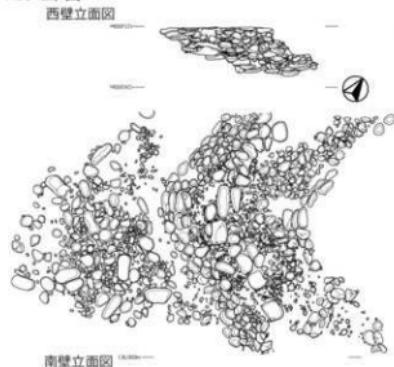
第48図 蛇穴山古墳の石室構造 (呉・青木2023)

2023)。天井石の落とし込みや、奥壁及び門柱石のL字加工による壁面の組み合わせも継承し、石材加工技術は一段と精緻なものとなる。また冠石の下半にも凸字形の加工がなされ、装飾性豊かな石室構造を探る。宝塔山古墳同様石室全面に漆喰を塗布し、精巧に加工された石材の上面に、薄く平滑に塗布する。畿内有力者層の墓制の影響を強く受けながら豪壮な石室を構築して、視覚的に身分秩序や権威の高さを表徴する様子が看取され、上毛野地域最後の古墳にふさわしい石室と評価できる。

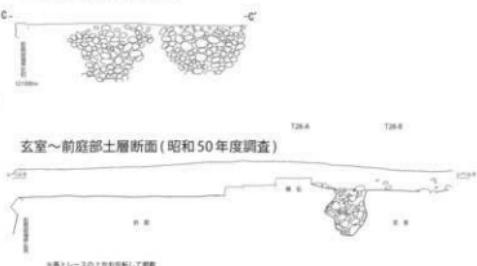


第49図 蛇穴山古墳の埴丘構造1

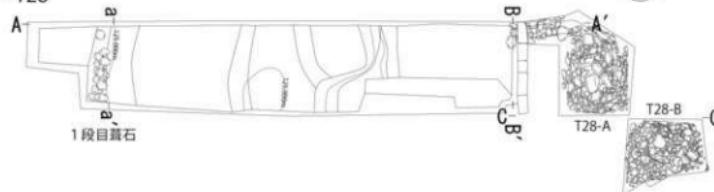
T25 蓋石



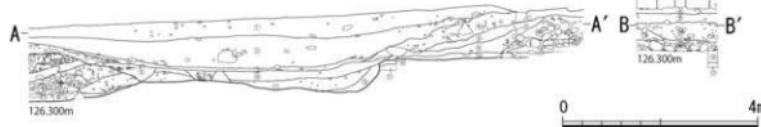
T28 南北土層断面見通し図



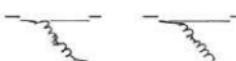
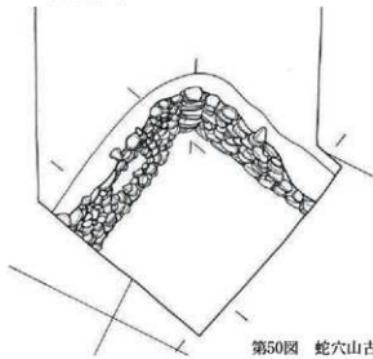
T24・T28



西壁



T20 中堤北西コーナー



第50図 蛇穴山古墳の墳丘構造2・中堤蓋石

第5章 特 論

第1節 獣内における古墳の終末からみた総社古墳群

国立歴史民俗博物館 林 部 均

1. はじめに

畿内では7世紀になると、古墳時代を特徴づけていた前方後円墳が造営されなくなり、変わって大型の円墳・方墳がつくられるようになる。遺体を埋葬する内部主体の横穴式石室も小型化が進むとともに、使用される石材の巨石化、切石化が進む。遺体をおさめる棺は、古墳時代は石棺とよばれる石の棺が使われていたが、漆塗りの棺が最有力者の棺として利用されるようになった。副葬品は古墳時代、様々なものが石室内あるいは石棺内におさめられたが、葬送儀礼の変化からか、石室の小型化、漆塗棺の導入と連動して、その数は極端に少なくなる。ここでは、このような畿内における古墳の終末過程¹を概観するとともに、総社古墳群の実態と対比して、その特徴を整理して歴史的な意義を検討する。

なお、この時代の古墳研究には、森浩一による先駆的な研究²をはじめとして、猪熊兼勝、白石太一郎によるすぐれた研究³がある。総社古墳群が所在する上毛野地域においても、尾崎喜左雄、右島和夫氏の地域に視点をおいた研究⁴がある。本論では、そのような研究を継承しつつ、近年の総社古墳群の範囲確認調査の成果を踏まえて検討を加える。

2. 墳丘と石室の形態

前方後円墳から円墳・方墳へ

奈良県橿原市に所在する五条野丸山古墳は全長約310mの前方後円墳である（第51図）。後円部に日本最大の横穴式石室がある。石室内部には二つの家形石棺が置かれている。欽明天皇陵とする意見が有力であるが、近年、この古墳の被葬者をめぐって様々な議論がある⁵。被葬者論はともかく、五条野丸山古墳が畿内にあったヤマト王權の最有力者の墳墓であることはまちがいない。石室の形態、石室内部に置かれた石棺の年代、さらに石室内の現状調査で採集された須恵器の年代から6世紀後半の年代が考えられる。五条野丸山古墳は、すでに埴輪や葺石ではなく、規模はともかく前方後円墳が本来もっていた要素のいくつかは欠落している。奈良盆地では、五条野丸山古墳の造営を最後に前方後円墳の築造は、ほぼ終焉を迎えたといわれる。

そして、次に造営されるのが、大型の円墳・方墳である。五条野丸山古墳が位置する同じ丘陵のすぐ東には植山古墳が所在する。植山古墳は、東西約40m、南北約32mの大型方墳である（第52図）。内部には大型の横穴式石室が東西に二つ並んで築造されている。東石室が最初につくられ、あとから西石室がつくられたことが、墳丘の断ち割り調査の土層観察で確認されている。東石室には阿蘇溶結凝灰岩でつくられた家形石棺をおさめる。西石室では棺は残っていないが、玄室と羨道を仕切るための扉を受ける闕石を設置していた。西石室には石棺は残らず、扉を開けて搬入・搬出ができる棺がおさめられていた可能性が強い。少なくとも東石室のような家形石棺ではなかったと推定する。西石室からは600年を前後に位置づけられる須恵



第51図 五条野丸山古墳墳丘測量図 (1/6,000)

器が出土している⁶。植山古墳は、この時期に造営されたと考えられる。五条野丸山古墳や植山古墳は西にのびる同じ丘陵に造営されたもので、さらに東には五条野塚脇古墳、五条野宮ヶ原1号墳・2号墳、菖蒲池古墳、小山田古墳が位置し、6世紀後半から7世紀中ごろにかけての一連の古墳群とみなすことができる。その中で五条野丸山古墳から植山古墳への変化、言い換えると前方後円墳から大型方墳への変化を確認することができる。その年代は、植山古墳の造営年代から600年前後、すなわち飛鳥時代はじめであった。



第52図 植山古墳墳丘測量図 (1/600)

このような前方後円墳から大型円墳・方墳への変化は、ここで具体的に取り上げたヤマト王権の中枢である奈良盆地だけではなく、若干の時期差は認められるものの、汎列島規模（東北地方南部から九州南部）で起こったできごとであった。もともと前方後円墳は、ヤマト王権といった首長連合が、その同盟の証として造営したものといわれている。そのため、大王をはじめとした畿内の有力豪族や列島各地の有力首長が前方後円墳という同じ形態をした墳丘を共有することになった⁷。その前方後円墳が造営されなくなるということは、ヤマト王権の政治形態が、それを必要としないまでに大きく変化したことを意味する。具体的には冠位の制定など、これまで前方後円墳をつくることによって示されていた身分秩序に代わるもののが採用された結果として、前方後円墳の造営は行われなくなったと考える。

推古11年（603）12月の冠位十二階、翌年4月の十七条の憲法が制定される。西暦600年に派遣された遣隋使が持ち帰った情報による、新しい東アジアの国際秩序と政治システムにもとづく、推古天皇と有力豪族による一連の政治改革である。前方後円墳の終焉は、まさにこのことに対応していると考えられる。

大型円墳・方墳の造営

畿内、とくに大和・河内には、600年以降、大型の円墳・方墳が造営される（第3表）。の中には、いわゆる大王墓や有力豪族、たとえば蘇我氏の墳墓なども含まれている。しかし、その規模を比較すると、若干の大小はあるものの隔絶した規模をもつものはない。また、墳形もすべて円墳・方墳で、とくに大王だけが違うかたちの古墳をつくることはない。

たとえば大阪府南河内郡太子町は磯長谷と呼ばれ、春日向山古墳（現用明陵）、山田高塚古墳（現推古陵）や般福寺古墳（現聖徳太子墓）をはじめとして、大型の円墳・方墳が分布している⁸。春日向山古墳は東西66m、南北60mの方墳。山田高塚古墳は東西約60m、南北約55mの方墳である。『日本書紀』や『延喜式』諸陵式にもとづくかぎり、これらの大型方墳が確実に用明、推古天皇などの墳墓であるかはともかく、飛鳥時代前半の大王墓であることは、ほぼまちがいない。しかし、その規模は、奈良県高市郡明日香村石舞台古墳の一辺約50m（方墳）、桜井市ムネサカ1号墳の径約45m（円墳）、赤坂天王山古墳の一辺約50m（方墳 第53図）⁹、北葛城郡広陵町牧野古墳の径約48m（円墳 第54図）¹⁰などと比較しても、それほど大きいというものではない。

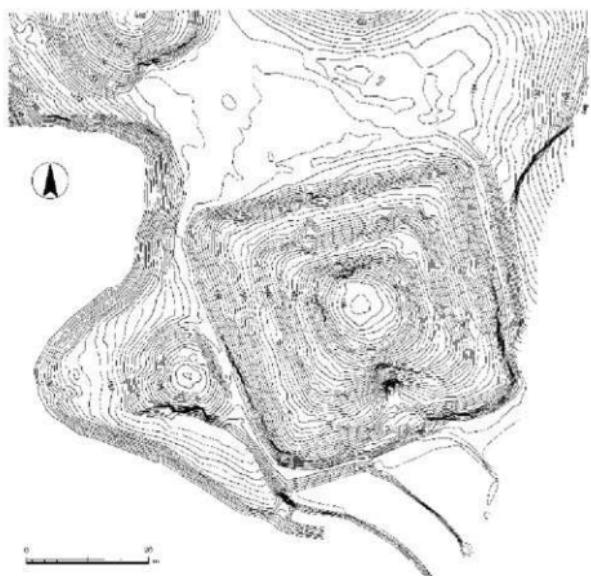
畿内では前方後円墳は西暦600年前後を境に造営されなくなり、代わって大型の円墳・方墳がつくられるように

なった。その背後に大きな政治形態の変化が想定されるにもかかわらず、依然として、大王や有力豪族は円墳、方墳という同じかたちの古墳をつくっていた。また、とくに突出した規模をもつ古墳もみられない。この段階において、ヤマト王権は新しい政治形態を模索しつつも、いまだ連合政権的な性格からは完全に脱しきれていたと推定される。

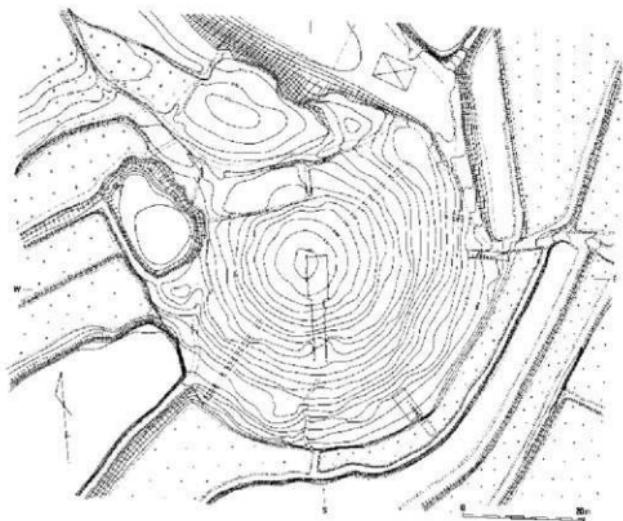
この時期の大王は、ある特定の血筋に収斂されつつあったが、自らの意思では大王位に就くことはできなかった。有力豪族による合議とその結果にもとづく推戴という手続きを踏まないと大王には就任できなかつた¹¹。大型円墳、方墳の規模が拮抗した状態であるのも、ヤマト王権のこうした権力構造が反映されている可能性がある。

表3 譲内主要部の大型円墳・方墳

古 墓 名	所 在 地	墳丘の形態・規模	石 室 形 態・そ の 他
塚平古墳	奈良県天理市岩屋町	方 16	小型切石石室
塚穴山古墳	奈良県天理市勾田町	円 60	大型削石積石室
峯塚古墳	奈良県天理市袖ノ内町	円 35	岩屋山式石室、貼石
段ノ塚古墳（舒明陵）	奈良県桜井市忍坂	八角形 42	棒原石積みの基壇
ムネサカ古墳	奈良県桜井市粟原	円 45	岩屋山式石室
越塚古墳	奈良県桜井市粟原	円 43.5	大型削石積石室
赤坂天王山古墳	奈良県桜井市倉橋	方 45.5	大型削石積石室、家形石棺
エンド山1号墳	奈良県桜井市倉橋		小型切石積石室
秋殿南古墳	奈良県桜井市浅古	方 26.5	大型削石積石室
谷首古墳	奈良県桜井市阿部	方 35	大型削石積石室
文珠院東古墳	奈良県桜井市阿部		大型削石積石室
文珠院西古墳	奈良県桜井市阿部		切石積石室・漆喰
神墓古墳	奈良県桜井市谷	方 27.5	切石積石室、家形石棺
帶解黄金塚古墳	奈良県奈良市窟之庄町	方 26	磚積石室・漆喰
石舞台古墳	奈良県高市郡明日香村島ノ庄	方 50	大型削石積石室
都塚古墳	奈良県高市郡明日香村	方 28	大型削石積石室、家形石棺
菖蒲池古墳	奈良県橿原市五条野町		大型削石積石室、家形石棺（漆喰）、漆喰
岩屋山古墳	奈良県高市郡明日香村越	方 45	岩屋山式石室
野口王墓古墳（天武・持統陵）	奈良県高市郡明日香村野口	八角形 40	切石横穴式石室
小谷古墳	奈良県橿原市鳥屋町	方 35	岩屋山式石室、家形石棺、漆喰
牧野古墳	奈良県北葛城郡広陵町三吉	円 48	大型削石積石室、家形石棺
平野塚穴山古墳	奈良県北葛城郡香芝町今泉	方 15	凝灰岩切石積石室・漆喰籠棺、金環
西宮古墳	奈良県生駒郡平群町西尾	方 36	切石積石室、家形石棺、漆喰
アカハゲ古墳	大阪府南河内郡河南町平石		切石積石室、黄褐色円面鏡、ガラス玉
ツカマリ古墳	大阪府南河内郡河南町平石		切石積石室、綠釉容器、漆塗籠棺、鐵刀、七宝製飾金具、金糸他
葉室石塚古墳	大阪府南河内郡太子町葉室	円 30	岩屋山式石室
山田高塚古墳（推古陵）	大阪府南河内郡太子町山田	方 66×58	
春日向山古墳（用明陵）	大阪府南河内郡太子町	方 66×60	
數福寺古墳（聖德太子墓）	大阪府南河内郡太子町	円 54	岩屋山式石室、漆喰棺
二子塚古墳	大阪府南河内郡太子町	双方墳 61	削石積石室、家形石棺、漆喰
太平塚古墳	大阪府羽曳野市飛鳥		切石積石室
塚穴古墳（来目皇子墓）	大阪府羽曳野市	方 53~54	切石積石室



第53図 赤坂天王山古墳埴丘測量図 (1/800)



第54図 牧野古墳埴丘測量図 (1/800)

横穴式石室の変化

畿内において、6世紀後半～7世紀にかけての前方後円墳・大型の円墳・方墳は、その内部主体として大型の横穴式石室を採用し、玄室には家形石棺が置かれた。

横穴式石室は古墳時代後期を代表する埋葬施設で、5世紀後半に朝鮮半島から伝わった。そして6世紀前半には大王墓にも採用され、畿内の有力豪族の埋葬施設となる。

6世紀後半から7世紀前半の大型円墳・方墳では、使用する石材の巨石化による玄室の巨大化、玄門部の確立と羨道の長大化、一部に切石技法を採用した横穴式石室が構築される。桜井市赤坂天王山古墳の横穴式石室を代表例とする（第55図）。そして、そのピークが、7世紀前半に造営された奈良県高市郡明日香村石舞台古墳である（第56図）¹²。『日本書紀』にみられる蘇我馬子の桃原墓の可能性が指摘されている。その後、横穴式石室は小型化に進む。さらに精緻な切石技法がつかわれるようになる。その代表例が奈良県高市郡明日香村岩屋山古墳である（第57図）¹³。精緻な切石技法でくみ上げたもので、その造営年代には諸説があるが、7世紀中ごろを前後する時期と考えるのが妥当であろう。同様の石室形態をもつものに櫛原市小谷古墳や桜井市ムネサカ1号墳などがあり、「岩屋山式」の横穴式石室と呼ばれている¹⁴。さらには7世紀後半、横穴式石室は石材の切石加工が進むとともに、壁面構成の単純化へと進む。その代表例が奈良県生駒郡西宮古墳や桜井市仲暮古墳の横穴式石室である（第58図）¹⁵。玄室は基本的に切石加工を施した巨石一段で構成され、玄室と羨道の高低差がほとんどなくなる。また、石材と石材の間際には塗喰が充填される。採集されている土器などから7世紀後半、第3四半期に造営されたものと推定される。これらの石室をもって古墳時代以来の大型の横穴式石室の造営は終焉をむかえると考える。

その後、大型の横穴式石室は、その使用石材を花崗岩から凝灰岩に転換し（奈良県香芝市平野塚穴山古墳等）、さらに小型化、切石化を進めるが（奈良県高市郡明日香村高松塚古墳、キトラ古墳等）、ある特定の有力者のみが埋葬されるものへと変化する。

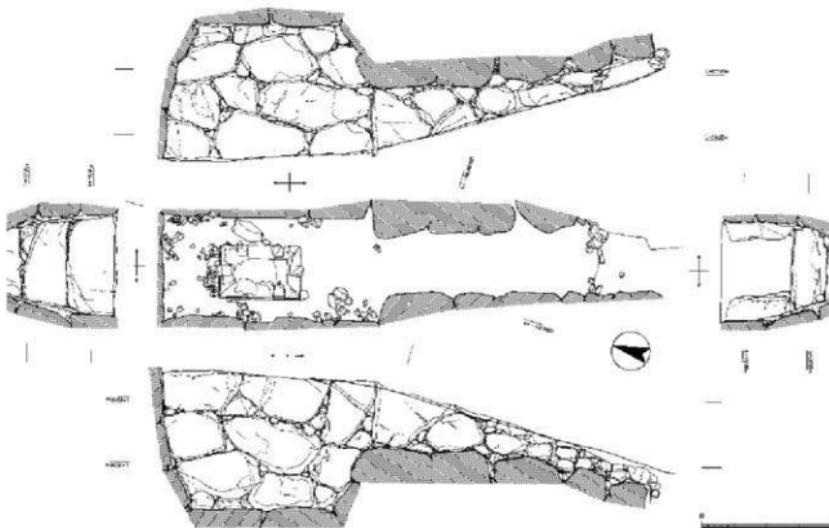
この横穴式石室の変化の中で、7世紀後半までは、家形石棺が採用されている。奈良県桜井市赤坂天王山古墳（7世紀前半）、北葛城郡広陵町牧野古墳（7世紀前半）をはじめとして高市郡明日香村石舞台古墳（7世紀前半）でも家形石棺の破片が出土している。7世紀前半まで家形石棺は確実に大王をはじめとした最高有力者の棺として利用されていたが、それ以降は漆塗棺へと棺そのものが大きく変化する。7世紀中ごろ以降、たとえば高市郡明日香村岩屋山古墳のように玄室に家形石棺が存在しないもの（もちろん盗掘でなくなった可能性はある）、もしくは、これまでの家形石棺の系譜からは若干、はずれた形態をとるもののがみられるようになる。たとえば生駒郡平群町西宮古墳のように、石棺の身の上端に縁取りがなされ、明らかに漆塗棺の影響を受けたものや、高市郡明日香村菖蒲池古墳のように石棺内部に漆を塗るものがある（第59図）¹⁶。これも漆塗棺の影響とみてよいので、7世紀中ごろ以降は、漆塗棺が有力者の棺として最高のものとして位置づけられていたと推定される¹⁷。いずれにしても、7世紀後半を最後に家形石棺はつくられなくなるとみてよい。家形石棺と漆塗棺では、石室内への設置方法をはじめとして埋葬儀礼も大きく異なった推定される。

古墳の終末の背景

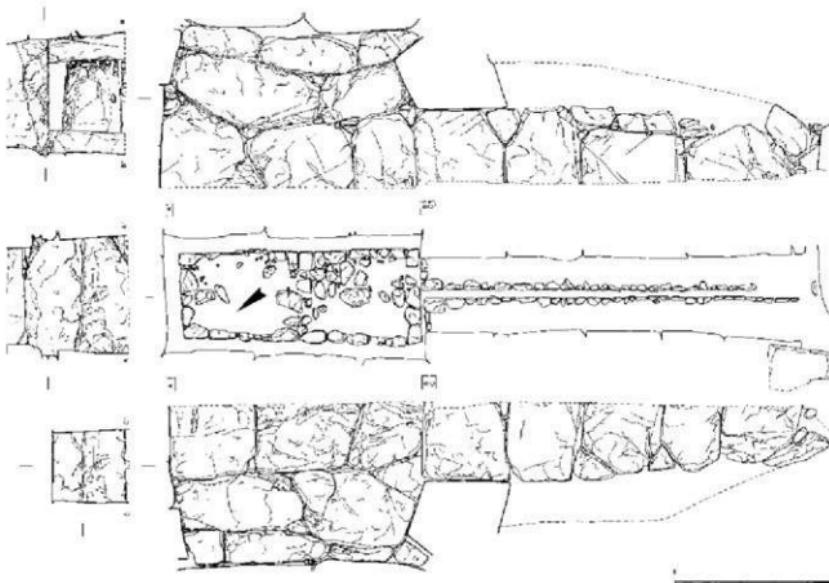
7世紀初頭に前方後円墳から大型円墳・方墳となった古墳は、その後も規模を縮小しつつ造営は続く。そして、7世紀後半、とくにその第3四半期の中で終焉をむかえる。この時期の大型円墳・方墳としては、天理市峯塚古墳（円墳・径約35m）、桜井市仲暮古墳（方墳・一辺約27m）、櫛原市菖蒲池古墳（方墳・一辺約30m）、生駒郡平群町西宮古墳（方墳・一辺36m）などがあげられる。古墳の規模の縮小と造営の終焉は、「乙巳の変」につづく「大化改新」と呼ばれる一連の政治改革が一定の成果をおさめつたことを意味する。

「大化改新」では大化3年（647）の冠位制の改定にはじまり、天智3年（664）にも冠位制の改定がおこなわれ、古墳とは異なる新しい身分秩序である官人制の導入がはかられ、官人集団の統合と序列化が行われた。この段階にいたると、かつて古墳に表されていた身分的な秩序はほとんど意味をなさなくなつたのではないか。その結果、古墳の規模は急激に縮小にむかい、やがて造営されなくなると思われる。

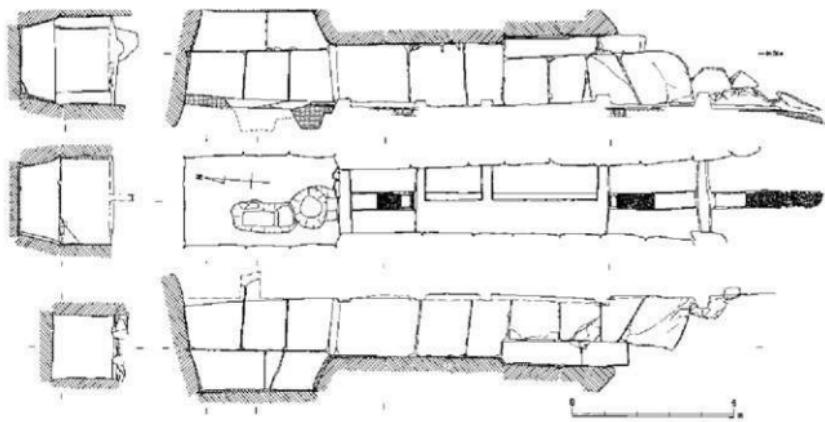
かつて、古墳の終末については、『日本書紀』大化2年（646）3月甲申条にみられる墳墓の造営にかかる規制、いわゆる「大化薄葬令」とのかわりでとらえることが多かった¹⁸。また、壬申の乱による畿内有力豪族層の没落、天武天皇という絶対的な権力をもった天皇の出現によるものとする意見もみられた¹⁹。ともに大王、もしくは天皇、すなわち国家による造墓に対する規制により古墳の造営は終末にむかったとするものであった。しかし、実際は、



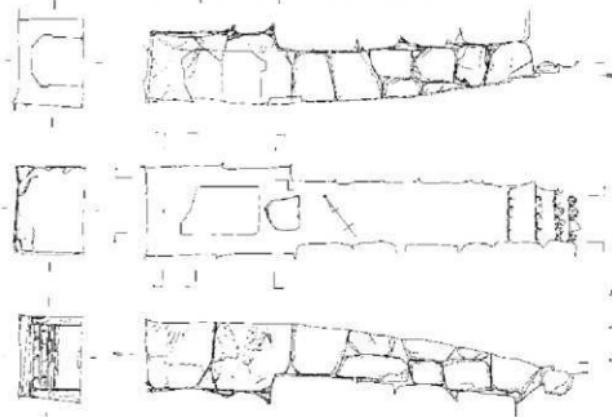
第55図 赤坂天王山古墳石室実測図 (1/150)



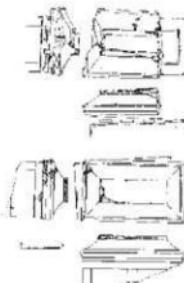
第56図 石舞台古墳石室実測図 (1/150)



第57図 岩屋山古墳石室実測図 (1/150)



第58図 鍾墓古墳石室実測図 (1/150)



第59図 菖蒲池古墳家形石棺

「大化改新」をはじめとした政治改革による官人制の整備、新たな身分秩序の創出が古墳そのものも意味を著しく低下させたことが古墳をつくらなくなる最大の理由と考える。

また、「大化改新」の政治改革では、有力豪族の新たな身分秩序による序列化（官人制）が行われるとともに、その有力豪族が保持し、その自らの経済的な基盤としていた部民を廃止し、公民制が導入された。古墳の造営にあたっては、なお不明な点が多いが、それぞれの支配下にあった人々を労働力として動員したものと思われる。公民制の導入は、そのような古墳造営に投入する労働力を根本から奪うものであったといえる。

さらに、かつて古墳は豪族がその族長の死に際し、一族をあげて造営したものと思われる。一族の統合の象徴として古墳は造営された。たとえば、蘇我馬子の死に際しては、蘇我氏一族が結集して、その墳墓を造営していたことが『日本書紀』の記述から明らかである。ところが、7世紀後半になると、豪族は豪族という一族単位ではなく、ひとりひとりが官人個人として把握することが目指される。一族が集まって大きな墳墓をつくることそのものが大きな意味をななくなっていた可能性が強い。このような状況の中で、古墳の造営が終焉をむかえるのも必然のことであったと考える。

3. 肖内における古墳の終末からみた総社古墳群の特徴

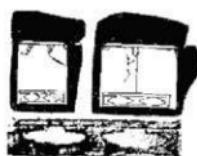
総社古墳群の変遷

総社古墳群は、前橋市西部の総社町総社を中心に5世紀後半から7世紀後半にかけて6基の大型の古墳から構成される古墳群である。個々の古墳についての総括や評価は本論にゆずることとして、ここではその変遷について検討したい。

まず、地域の首長の墳墓が、これだけの長期間にわたって古墳をつくり続けた意義は大きい。5世紀後半の遠見山古墳（前方後円墳・全長87.5m）の造営にはじまり、6世紀はじめの王山古墳（前方後円墳・全長75.6m）、6世紀後半の総社二子山古墳（前方後円墳・全長約90m）、7世紀前半の愛宕山古墳（方墳・一边約57m）、7世紀中ごろの宝塔山古墳（方墳・一边約60m）、7世紀後半の蛇穴山古墳（方墳・一边約40m）まで続く。王山古墳と総社二子山古墳の間、総社二子山古墳から愛宕山古墳の間に若干の年代幅があるものの、これだけの規模の古墳をつくり続けた意義は大きい。また、総社二子山古墳の造営までは、上毛野地域でも、他の地域で同程度の規模の前方後円墳が造営されており、とくに突出した存在ではないが、愛宕山古墳以降、大型方墳を造営する段階になると、総社古墳群は上毛野地域の中で突出した存在となる。また、その年代が600年前後と、ほぼ畿内で前方後円墳から大型円墳・方墳に変化する時期とも一致している³³。かつては、この変化する時期を畿内より一段階遅らせて考える意見もあったが³⁴、その後の研究や今回の一連の調査の中で、畿内とほぼ同じ時期に変化していることが確認できた。上毛野地域においても、前方後円墳の造営をおこなわれなくなり、代わって大型方墳を造営することになる背後には、ヤマト王権とのかかわりや、政治形態の変化があったとみてよい。畿内における古墳の終末で考えたことと、まったく同じであったのは考古学からの検討では明らかにできないが、上毛野地域においても、畿内と連動した変化があったとみてよい。

総社古墳群で前方後円墳から大型方墳に変化した後の古墳の変遷は、愛宕山古墳一边57m、宝塔山古墳一边約60mと、7世紀中ごろまでは規模はほぼ維持される。7世紀後半の蛇穴山古墳一边40mと規模が縮小し、古墳群そのものの造営を終えるという流れも、基本的に畿内における古墳の終末過程に対応している。

また、総社古墳群の愛宕山古墳や宝塔山古墳では玄室に畿内の影響とみてよい家形石棺をおさめている。とくに宝塔山古墳の石棺下部には格狭間の装飾が施され、古墳群近くに存在する山王庵寺とのかかわりが指摘されている³⁵。畿内でも格狭間を施した家形石棺はなく、大阪府南河内郡太子町叡福寺古墳（現聖德太子墓 7世紀前半から中ごろ）³⁶、御嶺山古墳（7世紀後半 第60回）³⁷、奈良県高市郡明日香村野口王墓古墳（現天武・持統合葬陵 7世紀後半）³⁸の漆塗棺をおいた棺台に格狭間がみられる程度である。格狭間は、もともと建築や器物の台座や脚部に施された装飾であり、仏教にだけかかるるものではない。そこで宝塔山古墳の格狭間の施された家形石棺も、叡福寺古墳、御嶺山古墳、野口王墓古墳にみられたような漆塗棺と棺台との関係を家形石棺の形態を残しつつ、一つの石材で表現したものとは考えられないであろうか。そうすれば、宝塔山古墳がつくられた7世紀後半は畿内ではすでに家形石棺は衰退に入っていたが、時代遅れともいえる家形石棺が上毛野地域において最大規模の方墳である宝塔山古墳に採用されている理由も説明できるのではないだろうか。



第60図 御嶺山古墳の棺台と格狭間

総社古墳群のもつ独自性

前項では総社古墳群の変遷が、畿内における古墳の変遷にはほぼ対応していることを述べた。これは墳丘のかたち、規模の変遷を比較したもので、大まかな流れは畿内のそれに対応するとみて問題はない。しかし、総社古墳群がもつ独自性も見られる。

まず、墳丘であるが、方墳という点では同じかたちである。が、この時期の畿内の大型方墳は、先に紹介した植山古墳や春日高塚古墳のように長方形であることが多い²⁵。植山古墳で明らかのように、東西に二つの横穴式石室を構築するためである。総社古墳群の場合、愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳とともに、ほぼ中心軸上に横穴式石室があり正方形に復原できる。少なくとも同規模の横穴式石室を並列して構築した形跡はみられない。『日本書紀』等の文献史料によるかぎり、畿内では、この時期、同一墳墓への合葬例が多く²⁶、古墳への被葬者の埋葬の組み合わせの単位が畿内と上毛野地域とでは異なっていた可能性が強い。

また、遠見山古墳、総社二子山古墳では、墳丘の周囲に周堀が巡り、さらにその外側を外堀がめぐる構造となっている。外側の堀も含めた全長は遠見山古墳が133m、総社二子山古墳が164mに復原できる。墳丘そのものは、それほど規模をもたないが、墳丘の周囲の堀までを取り込むときわめて巨大なものといえる。また、愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳についても、墳形は方墳であるが、その周囲に幅の広い周堀がめぐる。蛇穴山古墳では周堀の周囲にさらに二重に堀がめぐることが今回の調査で確認された。愛宕山古墳では幅約37mの堀がめぐり、それも含めると一辺が94mとなる。宝塔山古墳では幅約40m近い堀がめぐり、一辺100m近くになるという。蛇穴山古墳でも外側の周堀まで含めると一辺が82mに復原される。それぞれが墳丘の周囲までを取り込むときわめて巨大な古墳となる。畿内において、墳丘の周囲を調査した例はあまりないが、墳丘規模に対して、周囲の施設、たとえば周堀等の規模がきわめて大きいということは言える。いわば墳丘という高まりに対して、古墳の範囲がきわめて広いということである。誤解を恐れず、言い換えるならば、墳丘はともかく、「見せかけ」のところはきわめて大きくつくって「見せる」という特徴があるとみてよい。すなわち視覚効果が強く表れている。これは、現段階において畿内の古墳においては、あまり見られない特徴である。少なくとも総社古墳群の特徴とみてよい。

さらに、その「見せかけ」の古墳の広い範囲のほぼ中央にある墳丘には、葺石が葺かれる。とくに愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳における葺石は圧巻である。同じ時期の畿内ではすでに葺石が葺かれることはなく、貼石、敷石が施される。天理市峯塚古墳や明日香村小山田古墳は貼石が敷かれている。また、大阪府南河内都河南町金山古墳では、テラス面に人頭大の平らな石が丁寧に敷き詰められており、飛鳥宮跡の内郭の北区画南の正殿 SD0301前面の「庭」を連想させる。墳丘に葺石を葺くということは、古墳時代からの伝統が残ったものとも考えることができるが、これも、先に指摘した「見せかけ」の古墳の広い範囲とかかわり、視覚的効果を強調した特徴といえる。

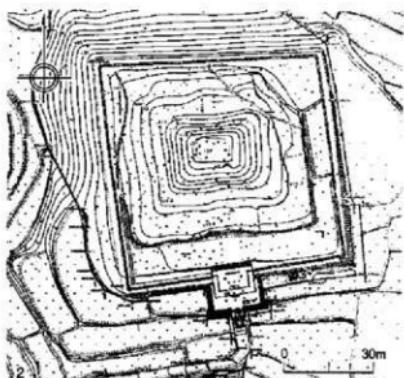
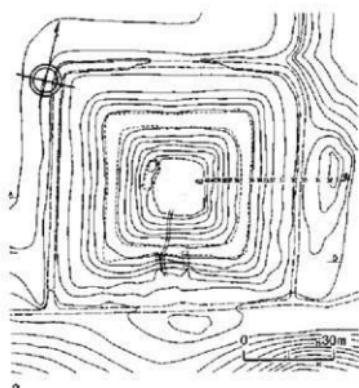
総社古墳群の歴史的意義

それでは、「見せかけ」とも言える古墳の広い範囲、視覚的効果を強調した墳丘は何のために構築されたのであろうか。

ところで、7世紀、東国には大規模な円墳・方墳が分布している。千葉県印旛郡栄町龍角寺岩屋古墳は一辺約80mの方墳である。千葉県山武市駄ノ塚古墳は方墳で一辺約60m、栃木県下都賀郡壬生町壬生車塚古墳は円墳で径82mなど、畿内の同じ時期の大型円墳・方墳の規模を凌駕する古墳がつくられている。とくに先に紹介した大阪府南河内郡太子町春日向山古墳（現用明陵・方墳、一辺約66m）、山田高塚古墳（現推古陵・方墳、一辺60m）、寂福寺古墳（現聖德太子墓・円墳、径54m）は、飛鳥時代前の大王墓であることは間違いないので、それに匹敵する、もしくはそれよりも規模の大きな古墳が東日本に分布している（第61図）。もちろん総社古墳群の愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳もその中に含まれる。

畿内の大王墓を凌駕する墳丘規模、視覚的に見せる墳丘、「見せかけ」の広大な古墳の範囲は何のためになされたのであろうか。

畿内にあったヤマト王権にとって、東国は経済的、軍事的な基盤であった。とくに飛鳥時代以降、活発になる東国経営、そして東北地方の経営にかかわって、きわめて重要な地域であった。対蝦夷政策でもきわめて重要な地域であった。また、東北地方の蝦夷との境界に近い位置であった。龍角寺岩屋古墳、駄ノ塚古墳は後の東海道、太平洋沿岸を利用したルートの要衝であり、壬生車塚古墳、総社古墳群は後の東山道、内陸を利用した交通の要衝に位置している。そのような歴史的な環境の中に総社古墳群も位置づけることが可能である。総社古墳群がもつ畿内との連動



1: 春日向山古墳 2: 山田高塚古墳 (1・2: 末永 1961、一部改変)
3: 龍角寺岩屋古墳 4: 壬生車塚古墳 (3・4: 白石 2000、一部改変)

第61図 義内と東国の大形円墳・方墳

性はその結果である。また、独自性である視覚的な側面は、東国のさらに東（北）に居住する蝦夷に対して「見せる」という意味があったのではないか。「見せる」という視覚的な効果によって、蝦夷に対する抑止力²⁸という側面をもっていたのではないか。そのため、總社古墳群に継続して古墳がつくられたのではないか。

總社古墳群の中でも、愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳の造営の歴史的意義はここにある。さらに、そのことが古墳時代後半からたどることができる。さらに奈良時代の上野国府、上野国分寺の造営への展開も見通すことができる。これが總社古墳群の古墳群としての意義である。

¹ ここでは、ほぼ6世紀後半から7世紀の古墳を取り上げる。いわゆる飛鳥時代の古墳を扱う。

² 森浩一編『論集終末期古墳』 塔書房 1973年

³ 猪俣兼勝「飛鳥時代墓室の系譜」『研究論集III』奈良国立文化財研究所『飛鳥の古墳を語る』吉川弘文館1994年に収録)、飛鳥資料館『飛鳥時代の古墳』1979年、白石太一郎「畿内における古墳の終末」『國立歴史民俗博物館研究報告 第1集』(『古墳と古墳群の研究』 塔書房 2000年に収録)

⁴ 尾崎喜左雄「横穴式古墳の研究」吉川弘文館 1966年、右島和夫「古墳から見た6.7世紀の上野地域」『國立歴史民俗博物館研究報告 第44集』1992年(『東国古墳時代の研究』学生社 1994年に収録)

⁵ 白石太一郎『古墳の被葬者を推理する』中央公論新社 2018年

⁶ 横原市千賀資料館『かしはらの歴史をさぐる9—平成十二年度埋蔵文化財発掘調査成果展—』2001年、横原市教育委員会『史跡・植山古墳』2014年

⁷ 都出比呂志「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—」『前方後円墳と社会』 塔書房 2005年

⁸ 上野鶴巳『王陵の谷・磯長谷古墳群—太子町の古墳墓—』1984年

⁹ 桜井市文化財協会編『赤坂天王山古墳群の研究—測量調査報告書—』2018年

¹⁰ 河上邦彦編『史跡牧野古墳』広陵町教育委員会 1987年

¹¹ 吉村武彦『日本古代の社会と国家』岩波書店 1996年、佐藤長門『日本古代の王権の構造と展開』吉川弘文館 2009年

¹² 西光慎治編「王陵の地城史研究—飛鳥地域の終末期古墳測量調査報告Ⅱ—」『明日香村文化財調査研究紀要 第6号』2007年

¹³ 岡崎晋明「岩屋山古墳」「飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡」(奈良県文化財調査報告書 第39集 1982年

¹⁴ 白石太一郎「岩屋山式の横穴式石室について」「ヒストリア」第49号 大阪歴史学会 1967年(『古墳と古墳時代の文化』 塔書房 2011年に収録)

¹⁵ 泉森政「神墓古墳」「飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡」(奈良県文化財調査報告書 第39集 1982年

¹⁶ 横原市教育委員会『菖蒲池古墳』2015年

¹⁷ 林部均「漆を使った棺」「URUSHIふしげ物語—人と漆の1200年史—」国立歴史民俗博物館 2017年

¹⁸ 綱干善教「大化二年三月甲申詔にみえる墳墓の規制について」『論集終末期古墳』 塔書房 1973年

¹⁹ 白石太一郎『註3)前掲論文

²⁰ 白石太一郎「前方後円墳の終末」「聖德太子の時代」奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1993年(『古墳の語る古代史』岩波書店 2000年に収録)、白石太一郎「関東の後醍醐天皇前方後円墳」「古墳と古墳群の研究」 塔書房 2000年、白石太一郎「東国における前方後円墳の終末」「古墳と古墳群の研究」 塔書房 2000年

²¹ 甘粕健・小宮まゆみ「前方後円墳の消滅」『考古学研究』23-1 考古学研究会 1978年、金井塚良一編『前方後円墳の消滅』新人物往来社 1990年

²² 尾崎喜左雄『註4)前掲論文

²³ 梅原木治『聖德太子歳長の御廟』『日本考古学論叢』

²⁴ 梅原木治『河内歳長御崩山古墳』『近畿地方古墳墓の調査II』日本古文化研究所報告 4 1937年

²⁵ 秋山日出雄「檜隈殿大内陵の石室構造」『橿原考古学研究所論集 第五』吉川弘文館 1979年、飛鳥資料館『飛鳥の王陵』1982年

²⁶ 松井忠春「七世紀の大型方墳」『日本古代学論集』古代学協会 1979年

²⁷ 綱干善教「七世紀における造陵墓地について」「横田健一先生還暉記念日本史論叢」1976年、綱干善教「歳長と檜隈—7世紀の造陵墓地(補記)一」「阡陵」28 1994年

²⁸ 蝦夷に対する抑止力とは、巨大で莊厳な古墳を見ることによって、蝦夷のヤマト王権への服属を促すという意味で使っている。

第2節 東アジアの中の総社古墳群

日本大学文理学部 山 本 孝 文

はじめに

群馬県前橋市の総社古墳群は、5世紀後半から7世紀に至るまで当地の首長層がどのような古墳を造り埋葬されたのか、その連続する墓葬制の変遷相がわかる貴重な例である。これまでの調査によって古墳群を構成する多くの古墳の墳形・墳丘規模・埋葬施設の種類・構造の全容がほぼ明らかにされており、古墳時代後半期の地方有力者層の存在様態と動向をうかがう上で的一モデルを提供するものとしてその評価はゆるぎない。前方後円墳から大型方墳への墳形の変化はもちろんのこと、石室石材の大型化や用材の切石への変化は、当地域内の造墓慣習・技術の変遷として片付けられるものではなく、広い地域間交渉を前提として理解されるべきものである。

古墳造営の状況が総社古墳群と類似した変遷をたどる地域は当時の政治的中心と目される畿内をはじめ国内各地にあるが、同様の変遷相は韓半島（朝鮮半島）諸国との同時期の古墳にも見られるものであり、さらに巨視的に見れば東アジアで共通の変化であるといえる。その背景には5世紀段階の倭の五王による中国南朝への遣使が始まり、6世紀代の頻繁な对外交流を経て、7世紀代以降における東アジアの古代国家の成立へとつなげ込む激動の時代の政治・社会相があり、東国群馬地域もその大きな流れの一端に参与していたことを物語る。

以下では、外部からの各種影響が日本の古墳造営傾向に作用していた前提を明示するため、中国および韓半島諸国における古墳の変遷を概観し、特に高句麗の積石塚と各國の横穴式石室の構造およびそれに用いられた石材利用の方式の変化を確認して、総社古墳群における古墳の変遷の遠因について論じたい。

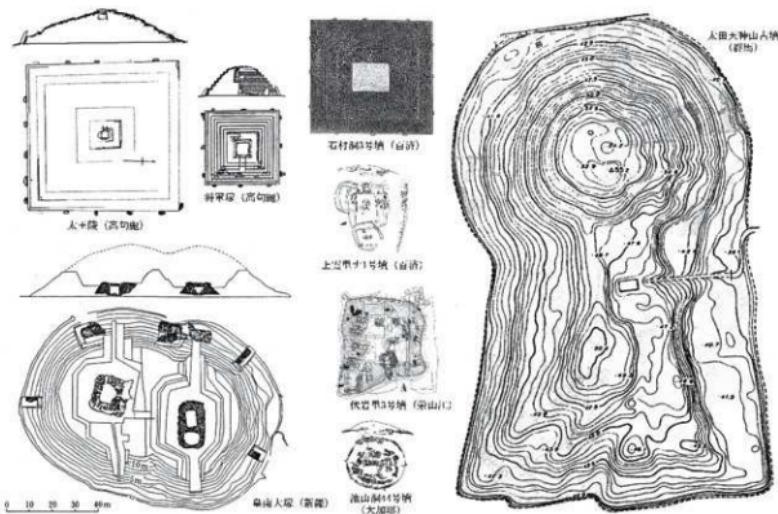
1. 東アジアの厚葬墓制とその変遷

総社古墳群を構成する遠見山古墳・王山古墳・総社二子山古墳など群馬で有数の規模を誇る前方後円墳や、終末期の方墳としても埋葬施設の横穴式石室としても破格の大きさと精緻な造りを持つ愛宕山・宝塔山・蛇穴山古墳は、当地で大きな力をもつた歴代首長層の墓であることは疑いなく、この時期日本列島全域で共有されていた墳墓建築体系の重要な一端にこの地の集團が参画していたことがわかる。このように巨大墳墓の造営や威信財の保有・副葬によつて権威を表現する風習は日本列島内の歴史事情のみで理解すべきものではなく、広く東アジア全体で同様の傾向があったことを考え合わせる必要がある。

中国大陆における厚葬は殷周の時代にすでに一定のレベルに達していた感があるが、それは対外的な意図が含まれていたり権威の可視化を図ったものではなく、モニュメントとしての墳丘や神殿が発達したのは中国が本格的な抗争期を迎えた戦国時代以降であった。その後、中国統一事業の促進とともに支配者（王）の墳墓は地表面上において徐々に大きくなり、秦始皇帝陵に至ってその規模や構造、付属施設や随葬品（副葬品）の種類・質は頂点に達し、漢代にも統一秦の陵墓制を引き継いで皇帝陵はじめ支配者の墳墓は巨大なもののが造られる。この制は漢代以降、分裂と統一を繰り返す古代中国の歴史の中で徐々に廃れ、三国魏の曹操墓造営の際に記されたような薄葬への指向を経て、墳丘全体を巨大な人工物として築く行為は廃れていく。唐代には階層に応じた墳墓建築の制が定着していくが、これは古代国家の政治的成熟と大型墳墓建築の収束が連動していることを示す現象であろう。

韓半島では中国の影響を一部受けつつも独自の墓葬制が展開した。韓半島史の中で支配者が最も大きな墳墓を築いていた時代が高句麗・百濟・新羅はじめ有力な国と地域が群立していた三国時代であるが、その時代はちょうど日本の古墳時代に並行する。中国でも同等の政体が霸権を争っていた時期に支配者（王）の墳墓が際立つて大型化する現象が見られたが、韓半島でも同様に同等の国や地域の抗争期に史上最大の古墳が建造されたことは偶然ではない。そして韓半島の場合、それが日本列島における古墳造営期とほぼ一致する点において両地域の相互作用を強く想起させる（第62図）。

東アジア各地の墳墓建築史におけるもう一つの大きな画期は、横穴系埋葬施設の導入と普及である。大型墳丘の建築が対外的・視覚的意図を含んだ現象であるのに対し、埋葬施設の変化は一般民衆など多くの社会構成員を意識したものではなく、当時の死生觀や家族・親族関係の変化を内在した精神文化面の変革を示すものと評価できる。中国では、殷代以来の地下深くへの埋葬と木棺使用の伝統が、漢代から洞窟墓・堆室墓などの横穴系埋葬施設へと変化して



第62図 大型化した東アジア各地の伝統的墓制

いき、同時に家屋・宮殿を意識した墓内建築・墓内装飾や生活場面を意識した隨葬品・壁画などが見られるようになる。この傾向は東北アジアや東南アジアはじめ周辺地域にもダイレクトに伝わり、それぞれの地域において伝統的埋葬から「死後の家」を意識した横穴系埋葬施設への墳墓の変化を促した。特に韓半島では、楽浪の埠室墓や高句麗の横穴式石室などを嚆矢として横穴系理葬施設への変化が始まり、続いて4～6世紀にかけて百濟・新羅・加耶・榮山江流域などの南部地域にも例外なく面的に横穴式石室が広まっていく。これらはすべて、各地域の伝統的遺体処理通念の時期を経て、死後の世界に対する考え方が汎東アジアレベルの広域で類似したものになっていた証左といえる。日本列島内の古墳における横穴式石室の導入と普及もその一端に乘じたもので、いわゆる後期古墳における追葬・家族墓・日常什器副葬・家形棺の使用などのキーワードによって、遺体の封じ込め概念が強かった前期古墳などとの大きな違いをうかがうことができる。

ただし、中国・韓半島の二地域と比較すると、日本における古墳の築造傾向はやや特異な面もある。特定階層の墳墓が大型化するタイミングは弥生時代後期以来のいわば争乱の時代背景を反映していると考えることもできるが、それが最大化するのは王權の成立を経たものの5世紀代であり、地方勢力に至っては6世紀の段階で初めて地域最大の古墳が造られることもある。日本列島の場合、5世紀代の墳墓最大化は、国の群立による政治的競合を強く反映しているというよりは、国内における王權の優位性と質的变化、そして後述のように韓半島の古墳造営状況との関係が一つの原因になっているようである。いずれにせよ、大型墳墓の造営を数百年以上の長期間にわたって維持していたのが日本列島の古墳築造状況のきわめて特殊な部分であり、東アジアの他地域に比して造墓に特別な意義付けがなされていたことを物語っている。

2. 韓半島各地の古墳と葬制

上記の東アジアにおける支配者階層の墳墓築造傾向の流れを通観すると、共通した社会的・歴史的状況でモニュメントとしての大型墳墓を築造し、それが徐々に変質していく姿を見てとることができるが、日本列島の古墳文化にまで到達したこのような傾向は、直接には韓半島との交渉の中で理解することができる。韓半島各地の古墳は単なる地域色として片付けられない根本的な差が内在しており、5世紀代から6世紀前半頃まではその差が著しい。いわば地域ごとの在地的性格・伝統性が前面に打ち出されていた段階である。そしてこの時期に、各地の古墳は最大規模を誇

るもののが造られた。しかし横穴式石室の普及以後は各地の造墓特徴を残しながらも古墳は小型化の一途をたどり、同質の石室を持つ群小古墳が造られる。

以下では総社古墳群の存続期間であった5世紀代から7世紀代にかけての状況を中心に、韓半島三国時代のそれぞれの国や地位で造営された古墳の特徴を概観する。

① 高句麗古墳からの視点

高句麗は現在の中国と北朝鮮の境界にあたる鴨綠江流域において成立した。桓仁から集安・平壤と遷都しており、多くの山城と古墳が政治的拠点であるこの三地域に集中する。後述のように高句麗地域では構造物の築造に石材を多用する傾向が見られる。特に軍事・行政の拠点である都城の石築城壁や山城は高句麗を代表する遺跡であり、上記の三地域でも平地城とその背後の山城が常に一体となった都城システムを備えている。石材を多用する傾向は古墳でも同様であり、積石塚という高句麗を代表する墳墓形式を現出させた。積石塚には無基壇式、基壇式、基壇階梯式（階段式）などの諸型式があり、特に4世紀から5世紀にかけて築造された集安の將軍塚はじめ最高階層の墳墓と考えられる積石塚の構造は、切石を精巧に組んで築造したものである。積石塚は群馬県城でも下芝谷ツ古墳や劍崎長瀬西遺跡などで発掘され、隣接した長野でも群集する積石塚群が多く調査されており、韓半島系渡来人の関連が取り沙汰されている。直接のつながりを考えていいかどうかは慎重を期すべきであるが、これら積石塚古墳の淵源をたどると高句麗の古墳につながることは否定できない。

切石を使用した高句麗の基壇階梯式積石塚には、内部にやはり切石積の横穴式石室が構築されており、高句麗の石材加工・構築技術が早い段階でかなり高度な水準に達していたことを示している。4～5世紀代には高句麗古墳の埋葬施設は竪穴式石櫛から横穴式石室へと変化するが、そのあとを追って墳丘は積石塚から石室を内蔵した封土墳（盛土墳）へと変わっていく。高句麗の大型古墳は積石塚・封土墳とともに方墳が多いが、これは中国の墳丘概念の影響であろう。日本の古墳時代にも当初から方墳があるが、終末期古墳の大型方墳と前期以来のそれとは系統の上で区別すべきであり、有力豪族などに採用された終末期古墳の方墳は東アジアの視点で解釈する必要がある。総社古墳群に採用された愛宕山古墳・宝塔山古墳・蛇穴山古墳は地域の最高首長が伝統的な前方後円墳構造から脱して大型方墳を採用した事例であり、直接には畿内の王権との関係を考える必要があるが、見方を変えると東アジアの墳墓構造の流れの一端に乗った状況であるといえる。

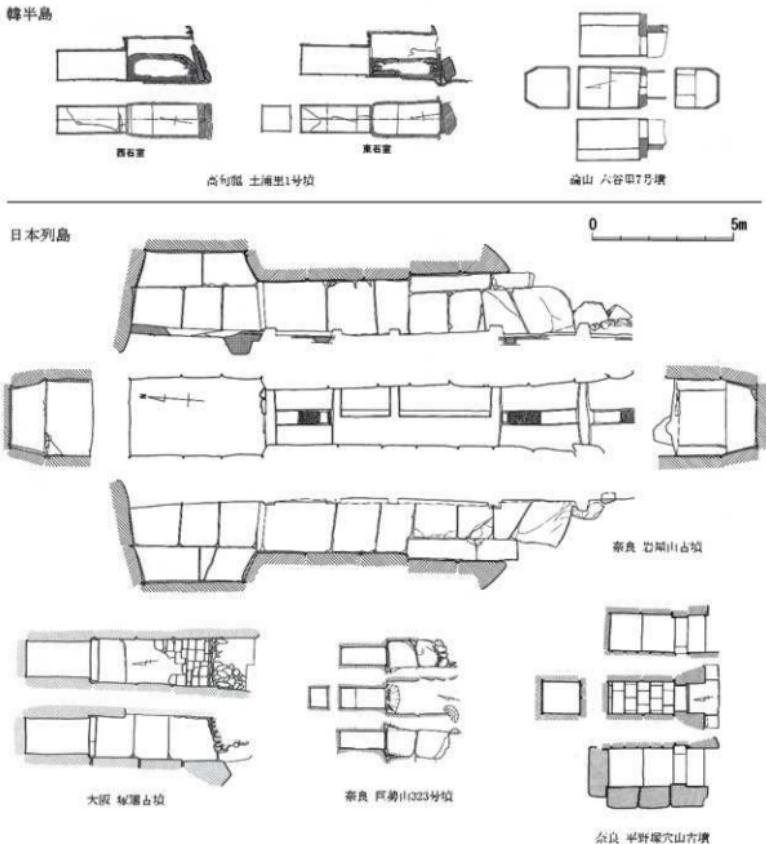
高句麗地域の墳墓のもう一つの大きな特徴は、横穴式石室の壁面に様々な題材の絵画が描かれた、いわゆる古墳壁画が発達したことである。古墳壁画は横穴式石室が導入される高句麗中期の集安に都城がおかれていた時代（3～427）から盛んに描かれはじめ、平壤の時代（427～668）にかけて流行する。壁画の題材は、集安の時代には墓主の肖像や生活風俗図を中心であったのに対し、平壤の時代には次第に四神図が主題のものへと移り変わる。その技法を見ると、高句麗に切石の技術が定着する前までは割石を積んだ壁面に漆喰を塗って壁画を描いていたが、表面が滑らかな切石積石室になると壁面に直接描くものもあった。漆喰を壁面に塗った石室は中国からの影響とみられるが、その後百濟や新羅などにも伝わる。日本の古墳の切石積石室や漆喰を使用した石室も、高句麗に端を発する技術の伝播の結果と考えられる。

② 百済古墳からの視点

百済は、漢江下流域にあったとされる馬韓の伯濟国を中核として、現在の京畿道・忠清道・全羅道など韓半島の中西部地域を占めていた馬韓諸国との統合を経て成立した国と考えられている。百済も現在のソウル・公州・扶餘の順に遷都を繰り返しており、都城や王陵などの主要遺跡はこれらの地域に集中する。

早くから石材を多用していた高句麗とは異なり、百済地域の墓制は基本的に石材を使用しない前段階（原三国時代・馬韓）の周溝墓の伝統を引く木棺墓系の墳墓である。木棺墓系墓制の基本形態である土壙木棺墓を百済各地域の集団が様々に発展させ、木棺墓・竪穴式石櫛墓・墳丘墓・木棺封土墳など多様な墓制が展開した。加えて、百済地域では外部からの影響で新たな墓制が現れ、伝統的墳墓の変遷に転換を与える事例が見られる。まず前期にあたる漢城期（～475）の4世紀代の王墓級古墳として高句麗地域の墓形式である基壇式・基壇階梯式の積石塚が一時期導入されたが、墳墓の用材として石材を使用する伝統がなかった百済地域で、これが石築墓制普及の契機になった可能性がある。また、やはり高句麗あるいは楽浪からの影響が論じられている横穴式石室も、前述の流れの中で外来的墓制が百済に定着し、のちに主墓制となつたものである。

このように百済地域では前半期には木棺墓系墓制が、後半期には横穴式石室が主軸となって展開する。日本の古墳



第63図 韓半島と日本の切石積石室・石椁

時代との関わりを見ると、百濟地域は古くから日本の横穴式石室の源流地と考えられる傾向があった。百濟の初期の横穴式石室はおむね4世紀代から各地に出現するが、その形態・構造は地域ごときわめて多様であり、系統として一つにまとまるものではない。ただし、総じて初期のものは完全に水平な羨道を持つ横穴式石室ではなく、地表面から傾斜を下る形で玄室に至る竪穴系横口式に近いものが多く、変化の傾向としては日本の九州地方における竪穴系横口式石室から横穴式石室への変遷に通じるものがある。しかし両地域の石室を直接比較して系譜関係を求めるのは現状では難しく、伝統的墓制から横穴系埋葬施設への変化の過渡期的状況が多様性として表されていると考えられる。ただし、熊津期（475～538）に至って定型性を帯びはじめた百濟の石室が、その築造法とともに日本に再伝播し、その後列島各地に浸透するいわゆる畿内型（系）石室の祖形であった蓋然性は高い。熊津期の支配者階層の横穴式石室は特徴的な石材加工・石室構築の技術が用いられており、これらいわゆる「王畿系集団」（山本2018）の手によると考えられる石室には漆喰が用いられているものがある。これらにも高句麗の石室の特徴が見られるため、百济に定着した横穴式石室の造墓技術に高句麗の影響が及んでいる可能性がある。

百濟ではその後、泗沘期（538～660）に切石を使用した定型化・規格化した石室を造営するようになるが、この規格化の背景には被葬者の階層による墳墓建築規制、いわば喪葬令の存在があったと考えられる（山本2017）。高句麗でも6世紀代から切石積の石室が流行したが、日本の終末期古墳造営期にはこれら韓半島の国々、特に政治的に密接な交流関係にあった国からの制度的影響を受け、薄葬化および墳墓の小型化が促進されたとみていいであろう。その前後に切石技術や漆喰が導入されたと考えられる（第63図）。

なお、百濟では前述の高句麗式の積石塚以外は特定個人のための墳墓が大型化することはなかった。その理由としては、早い段階から中国と密接に交渉していた百濟では他の国に先駆けて制度的階層性が導入され、視覚的な権力表現法としての大型墳墓建築が不要になっていたことが挙げられる。日本列島における古墳造営の収束が、制度的にも墓制のハードウェア的にも百濟からの影響を受けたものと考えることに無理はない。

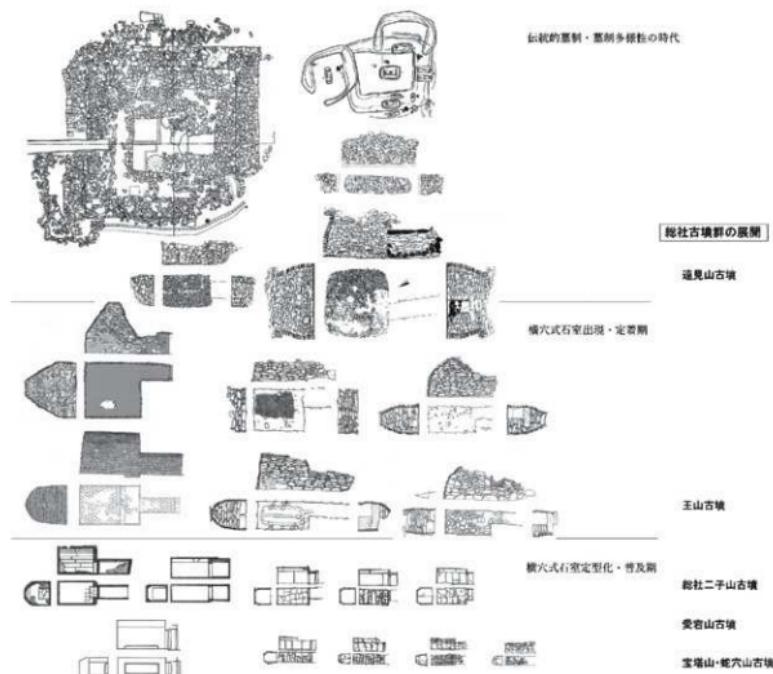
③ 韓半島南部諸地域

高句麗・百濟が早くから中国と接し、その影響を受けていたのに対し、韓半島南部地域に位置していた新羅・加耶・榮山江流域における上記の汎東アジアの共通した墓制の変化は時期的にやや遅れる傾向がある。その時間差は中国との直接・間接の地理的・外交的距離に起因するところが大きい。墳墓大型化のタイミングや横穴系埋葬施設の導入はむしろ日本列島の古墳より遅れ、特に加耶地域と榮山江流域は地理的にも近い日本列島との交流により相互の文物の往来が際立って多く見られ、日本の系統の横穴式石室もある。また、この地域は共通して石室石材に切石の導入がなされず、石室にも地域の伝統性が長期にわたって維持されていた。

新羅は、慶州盆地の斯盧國が周辺の辰韓の国々を統合して成立したとされる。初期の新羅は他の国に比べ後進的であったが、5～6世紀以降に徐々に力をつけ、6世紀前半から後半にかけて加耶を併合し、7世紀後半には唐と結んで百濟・高句麗を滅ぼして初めて韓半島を統一する。新羅地域の古墳文化を特徴付けるのは、都城がおかれていった慶州盆地に多く造営された積石木椁墳と呼ばれる形式の墳墓である。外観は円墳が基本で、2基以上を連接させた瓢形の形態を持つものも多い。積石木椁墳は旧地表面に半地下式に木椁を設け、その内部に被葬者と副葬品を収めて外表に厚い積石を施し、さらに盛土で被覆するため、墳丘は高く維持される。このような新羅の特徴的墓制である積石木椁墳は韓半島では最も大型に属する古墳で、5世紀代から6世紀前半にかけて盛んに築造され、内部からは金・銀・金銅製の冠・冠帽をはじめ壮麗な副葬品が出土する。この時期がいわば新羅の伝統的墓制の時代ということができる。6世紀半ば以降は新羅でも比較的小型の横穴式石室を持つ古墳の造営に移行し、副葬品も土器や装飾性を喪失した帶金具などに変わる。単葬が基本であった積石木椁墳から、横穴式石室の導入以降には多人数を追葬するようになり、単なる薄葬にとどまらない墓葬制上の大転換がおこる。横穴系埋葬施設の導入とともに伝統的墓制が急激に質的变化を起こした端的な事例として詳細な検討が必要である。

加耶は、韓半島南部の百濟と新羅に挟まれた位置にあり、新羅に併存されるまで単一の政体にはならなかったとされている。「大加耶」「小加耶」「阿羅加耶」「金官加耶」などの個別の加耶勢力は、『後漢書』や『三国志』に見られる弁韓諸国の中、狗邪國・安邪國などの小国が発展したものと考えられる。加耶の高度な鐵器製作技術や須恵器の源流となる陶質土器製作技術、馬具や馬形土器に表現された騎馬文化的特徴などは、古墳時代の日本との関係において注目されている。加耶地域の古墳は原三国時代（三韓時代）の木棺墓・木椁墓が発展したもので、新羅と文化的・政治的に分化した4～5世紀には長大な竪穴式石室を持つ円墳を丘陵の尾根や斜面に多数築造するようになる。支配者階層の古墳は大型の主椁の周囲に大・中型の副椁や小型石椁が配されるものが多く、そこには副葬品や殉葬者が認められた。際立った殉葬の風習は加耶の各地で確認されており、当地域の伝統的墓制の最も特徴的な要素といえる。加耶地域でも6世紀代から横穴式石室の築造が始まり、当地域の伝統的な墓制であった長大な竪穴式石室の短壁に差道を取り付けたタイプのものが各地で築造された。伝統的墓制から新來の横穴系埋葬施設への転換のケースの中で、新羅とは異なる折衷・過渡期の状況を示す好例である。やはり日本の九州地方に初めて導入された横穴系埋葬施設を検討する際の参考になるであろう。

韓半島西南部の榮山江流域が三国時代の後半期、少なくとも6世紀半ば頃までは独自の文化を保持していた集団であると考えられるようになったのは、1990年代以降の当地における調査の進展によるところが大きい。「榮山江流域」は現在の河川名を冠した名称であるが、文献史料に詳細が記録されていない当地の集団を、原三国時代から続く「馬韓」とみる見方が強くなっている。この地域の伝統墓制は甕棺古墳と呼ばれる専用甕棺を用いた一墳多葬墓で、初期には低墳丘だったものが5世紀以降から墳丘が高大化して大型墳の造営が盛んになる。6世紀前半に百濟や日本



第64図 百济墓制の変遷と横穴式石室の規格化

(九州)の影響で横穴式石室が築かれるようになってからも羅州伏岩里3号墳96石室のように石室内部に複数の大型喪棺を埋納する例がある。6世紀半ば～後半からは当地に百濟の影響が色濃く表れはじめ、政治的にも百済に編入されたと考えられている。それ以降は百済の切石積石室が造営され、そこから百済の官人であったことを表す冠飾や帶金具が出土するようになる。栄山江流域は様々な地域から文化・文物が流入する地域で、墓制の変化は複雑な様相を呈するが、古墳の大型化および伝統的墓制から横穴式系理葬施設への変化の流れは韓半島全体の中に位置付けられるものであり、東アジア全体の傾向の一部をなすものである。

3. 東アジアの墓制変化と総社古墳群

次に、上に見た東アジア、特に韓半島の古墳建造状況の中で、総社古墳群における墓制変化と関わる部分を再整理し、評価の土台としたい。ポイントとなる点は各古墳の古墳造営傾向のうち、伝統的造墓の最大化、横穴式石室の導入・普及・定型化、切石技術の採用である。

① 最大化する伝統的墓制と横穴式系埋葬施設の導入

前述のように、東アジアにおいて墳墓の規模が純粋な埋葬行為に必要な大きさ以上に大型化し、それが政治・社会あるいは文化的なモニュメントとしての意味を帯びるようになるのは、おおむね周辺地域との競合と内部の統合の象徴である首長層の地位の獲得という共通した社会段階への到達によるものと考えられる。なかでも日本列島と韓半島のように、隣接する地域間で並行する時期にそれがおこっているのは、地域内部の社会状況に加え、対外的な相互作用もあったと考えるのが自然であろう。

ただし、首長層の墳墓が大型化するという社会背景は共通していても、埋葬や葬送儀礼にかかる思想は各地で特有のものがあったため、墓葬制そのものには差がある。その状況が中国における陵寝制度を伴う帝王陵や、高句麗の基

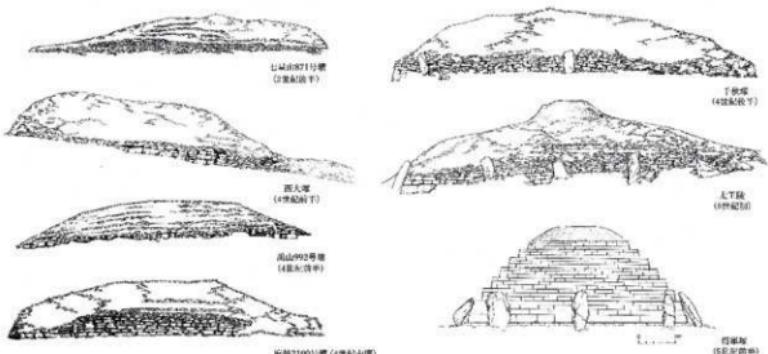
壇階梯式積石塚、新羅の積石木椁墳、栄山江流域の甕棺古墳、日本の前方後円墳など、各地の多様な大型墳という形で現出したのであろう（第62図）。韓半島と日本列島では、大型化の始まりのタイミングには差があるが、各地域内で古墳の墳丘規模が最大になるのは4世紀後半から5世紀代に集中しており、ほとんどの場合6世紀半ばを境に大型墳は姿を消す。具体的には、高勾麗と百濟では4世紀代、新羅では5世紀代、加耶では5世紀末から6世紀前半代に墳丘が最大になるが、この年代のそれはその後の横穴式石室の導入期の順序とも一致し、墳丘規模の縮小の契機にもなっている。日本の場合も、列島全体で見ると5世紀代の大王墓とされる古墳が規模面では最大値で、その後に横穴式石室が大王墓に採用され、続いて墳丘規模の縮小現象が見られる。横穴式石室の導入が単なる埋葬施設の変化だけに留まらず、従来の伝統的墓制を総体として変えていくきっかけとしての役割を持っていたことは首肯できよう。伝統的墓制の最大化、そしてそれに続く外來の横穴系埋葬施設の採用は、東アジア諸国の大王墓造営においては同様の脈絡で起きた事象と考えられる。

王權以外の各地方の状況は必ずしもこの変遷に正確に則っているわけではないが、群馬地域でも日本の伝統的墓制といえる前方後円墳の規模が4世紀から5世紀代に築造された浅間山古墳や太田天神山古墳などの段階で頂点に達する。その後に続く總社古墳群では5世紀後半から6世紀代まで遠見山・王山・二子山古墳と前方後円墳が連続して造営され、王山古墳の段階に横穴式石室が採用される。その時期は6世紀初頭頃で、韓半島でも南部地域まではほぼ全域に横穴式石室が浸透する時期にあたっている。

② 横穴式石室の定型化と普及

ただし、各地で採用された初期の横穴式石室は必ずしも当初から規格化していたわけではなく、その地域内での様々な受け入れられ方を経て定型化に至る。百濟や新羅、栄山江流域の初期の石室、九州地方での搖籃期の石室がそのような状況を端的に物語っており、多様な構造・形態の石室が同時代に並行して築造された。その理由として、定型化した石室が浸透するまで独自の伝統的埋葬施設の構造を引き継いでいたり、伝播元が複数あったこと、横穴式という概念のみが根付いて技術・形態的には地域独自の石室を築造していたことなどが挙げられよう。一例として、当初百濟では地域勢力ごとに全く異なる構造・形態の横穴式石室を造っていたが、王權の影響力が強くなるにつれて定型性を帯びはじめ、王權周辺の古墳を中心に求心的な石室の序列ができる（第64図）。そして切石技術の導入とともに石室はさらに規格性を高め、喪葬令につながるような階層性を反映した石室群が領域内部に限定して造営されるようになる。その時期は6世紀半ばからであり、新羅でこの頃から小型の横穴式石室古墳が多数造られるようになるのも相互作用の結果であろう。伝統的墓制からの脱却がこの頃に完成されたといえる。

これを總社古墳群の変遷に照らしてみると、前方後円墳に横穴式石室が導入された当初は定型化以前の構造のものであり、他地域にも見られる初期横穴式石室の系譜を引く王山古墳の石室、群馬県内の在地色が強い角閃石安山岩削石積石室を持つ總社二子山古墳の後円部石室を経て、畿内型石室が總社二子山古墳の前方部に築造される。そしてそ



第65図 高勾麗積石塚の用材の変遷（吉林省文物考古学研究所・集安市博物館2004）

れを最後に次段階には畿内型石室に家形石棺を収めた方墳が築造されるが、この愛宕山古墳の段階で伝統的・在地的要素が一次的に払拭される。当時の日本のスタンダードともいえる畿内型石室と、東アジアのスタンダードである方墳が総社古墳群に現れ、伝統的墓制の時代は一段落する。ただし、愛宕山古墳を含め、その後に続く宝塔山・蛇穴山古墳は規模・埋葬施設とともに王權のものと遜色なく、切組積石室などには在地首長層の別の独自的侧面が反映されている。

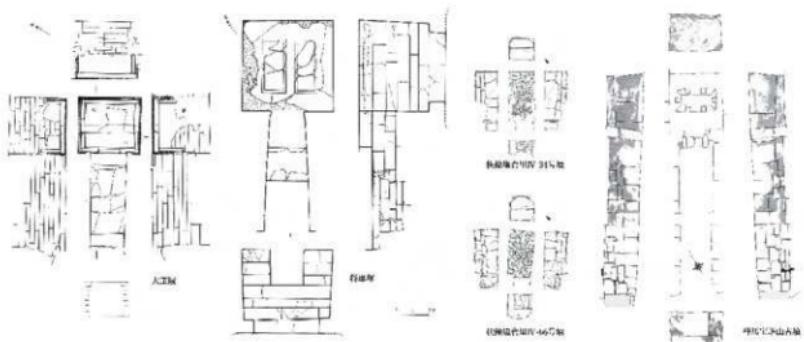
③ 切石技術の採用

切石の技術は韓半島、特に高句麗において都城の城壁、積石塚の墳丘や横穴式石室など多くの場面で適用された。古墳に使用された石材を見ると、積石塚の築造に用いた石材は河原石・片岩状割石（1～2世紀代）からブロック状割石（3～4世紀代）、そして切石（5世紀）が出現している（第65図）。特に基壇階梯式の大型墳丘を持つ古墳では切石が多用され、集安の將軍塚の段階で整美な完成形に至る。横穴式石室の使用石材も積石塚の墳丘石材に対応し、未加工塊石・川原石を使用したものから比較的薄い割石（片岩状割石）を積んだものに変わり、さらに切石積が出現する。太王陵や將軍塚では切石を切り組んで構造物を構築している部分も見られ（第66図）、この技術はのちの城郭城門などにも適用される。積石塚の墳丘や城壁の切石化は外観上のアピールと石積みの堅固性が目的で、横穴式石室の切石化も堅固さと整美さを追求したものとも考えられるが、前述のように壁面に壁画を描く必要性も作用したと思われる。

高句麗で発達した石材加工・架構技術はその後、韓半島三国の諸地域に普及する。百濟ではもともと土墳の城壁が主流であったが、各種施設に石材を利用するようになってから都城や山城の石壁は高句麗の中期以降に主に見られるブロック状割石を用いた布積み（単位布積み）の工法を導入し、百濟最後の都の山城である扶蘇山城では一部で整美な切石の城壁が造られた。古墳の墳丘では高句麗で4世紀代に用いられた片岩状割石の基壇階梯式積石塚が伝わり、横穴式石室も同様に片岩状割石を積んで壁面を平滑に揃えた積み方が採用され、中心勢力の石室に採用された。6世紀には切石技術が再導入され、横穴式石室・寺院建築・石造物などに多く適用される。百濟酒池期の横穴式石室は一定の規格で造られていることが明らかにされており（山本2017）、それを実現するために精巧な切石技術が有効だったのだろう。また、簡易なものではあるが切組積も見られる（第66図）。

新羅では山城の石壁は片岩状割石を垂直に積む方式で、高句麗の五女山城の内壁の石材・積み方に類似する。古墳築造には整った石材加工・架構技術は採用されず、塊石の乱積みが主流であった。切石技術は特に7世紀以降の寺院建築・宮殿建築や仏教芸術に採用され、統一新羅時代直前から王陵級墳墓にも用いられる。

日本において、外観上、切石に近い石工技術は古く凝灰岩を削り出した石棺などにすでに見られるが、終末期古墳に硬質の石材を用いた切石技術は、畿内の横穴式石室ないし横口式石室の形態・構造などからみて高句麗ないし百济から7世紀代に移入され、その後各地に伝播したと考えられる（第63図）。前述のように截石切組積の技法も一部高句麗・百济で見られるが、宝塔山・蛇穴山古墳や南下古墳群などの大型の石室でそれを高度に発展させたのは東国



第66図 各地の切組積石室

地城的特色と考えていいであろう（第66図）。汎東アジアの墓葬制変化の潮流に乗りながらも、地城的特色を維持し続けた總社地城の首長層の性格が垣間見える。

おわりに

古代東アジアの墓葬制は各地域独自の展開をしながらも要所で接点を持ち、他地域の影響を受けつつ伝統的側面の維持と変容が繰り返された。在地首長層（國の王）の成長と他地城（他國）との競合から墳墓の大型化と厚葬が始まり、各地の伝統的墓葬制を育てつつ墳丘規模が各地城史の中で頂点に達する。中国皇帝陵の陵寢制度、高句麗の積石塚、百濟の積石塚と墳丘墓、新羅の積石木椁墳、加耶の竪穴式石椁墓、榮山江流域の甕棺古墳、倭の前方後円墳などがそれらにあたる。その後、中国大陆で横穴系の埋葬施設が創始され、その影響が及ぶと、各地の墓葬制は伝統的側面を残しながらも新しい死後世界観を受け入れてその思想と墓構造が定着し、厚葬の慣習は徐々にその歴史的役割を終えていく。加えて東アジアでは、その傾向を促進する大きな役割を果たしたもの一つの要素として、古墳造営の収束過程と反比例しておこった仏教の流行があった。モニュメントの役割は仏教寺院に引き継がれ、護国宗教としての側面が強調され、中国・韓半島諸國でも大型古墳造営の終焉段階に巨大伽藍を持つ寺院が建造される。

日本の古墳時代における古墳造営の流れもこの大きな枠組みから外れるものではなく、支配者階層の造墓は同様の道筋をたどった。ただし、倭王權の周辺にあった地域勢力の中には、直接支配が貫徹される律令期まで半独立性を保ったところも多く、東国における古墳時代後期以降の盛んな古墳造営はそれを表している。後期後半に最大規模に達する總社古墳群の前方後円墳（總社二子山古墳）や、王權の盟主墳と遜色ない規模の愛宕山古墳、精巧な切石積石室をもつ宝塔山・蛇穴山古墳は、東アジア共通の墓葬の変遷の一端に連なりつつ、その厚葬制の最後を飾った一連の首長墓群としての位置を占めている。当地を統べる在地首長權が日本列島全城を対象とした統治体制に完全に組み込まれるのは、律令国家を標榜する王權が地方統治を完遂した山王庵寺の伽藍整備段階であろう。それもまた、大きくは汎東アジアの共通した古代国家体制が浸透した結果とみることができる。

参考文献

- 吉林省文物考古研究所・集安市博物館 2004 『集安高句麗王陵』文物出版社
小林孝秀 2022 「群馬県における横穴式石室の導入背景」『地方から見た畿体朝とその前後』高崎市觀音塚資料館
前橋市理藏文化財発掘調査団 2010 「蛇穴山古墳・宝塔山古墳 總社町屋敷南遺跡」
右島和夫 1985 「前橋市總社古墳群の形成過程とその両期」『群馬県史研究』22
右島和夫 1992 「古墳から見た6.7世紀の上野地域」『国立歴史民俗博物館研究報告』44
右島和夫 2020 「東国における畿内型石室」『横穴式石室の研究』同成社
山本孝文 2017 『古代朝鮮の国家体制と考古学』吉川弘文館
山本孝文 2018 「百濟墓制の展開と王權の動向」『国立歴史民俗博物館研究報告』211
山本孝文 2019 「横穴式石室の築造技法からみた百濟と湖南地方—熊津期百濟と榮山江流域の造墓集団—」『国立歴史民俗博物館研究報告』217
山本孝文 2020 「韓国における横穴式石室研究の論点と構造・技術系統論」『横穴式石室の研究』同成社

第3節 東国における総社古墳群造営の歴史的意義

群馬県立歴史博物館 右 島 和 夫

はじめに

本報告書でここまで詳述してきたように、総社古墳群を構成する主要古墳のうち王河原山古墳を除けば遠見山古墳、王山古墳、総社二子山古墳、愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳のいずれもが良好に遺存している。これら諸古墳は、消滅してしまった王川原山古墳（墳丘長約60m）も含め累代の首長墓であったと考えて間違いないところである。本古墳群が上毛野地域（現在の群馬県地域の主要部分にはほぼ一致する）、古代東国（主として現在の関東地方を指すこととする）、さらには日本列島の5世紀後半から7世紀にかけての歴史動向を検討していく上で極めて重要な位置を占めていることが十分想定されるところである。

その意味では、從来から王山・総社二子山・愛宕山・宝塔山・蛇穴山古墳のそれぞれについての基礎的研究成果の集積を踏まえて、今回前橋市教育委員会によって進められた遠見山古墳、総社二子山古墳、愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳の概要部分に対する本格的発掘調査の成果は、古墳群の価値づけをより具体的なものにしていくための重要な手がかりが得られるところとなった。

また、昭和50年代以降今日に至るまで、総社古墳群を取り巻く周辺地域の関係考古資料が、山王庵寺、大屋敷遺跡（古墳群の南西側に展開する併行期の集落遺跡）、上野国分寺、上野国府関連遺跡群等の本格的調査によって得られたことも重要である。さらに上毛野地域全体に目を転じても総社古墳群と時期的に併行する諸遺跡が活発に調査されており、古墳群の価値づけを定めていく上で大きく寄与するところとなっている。

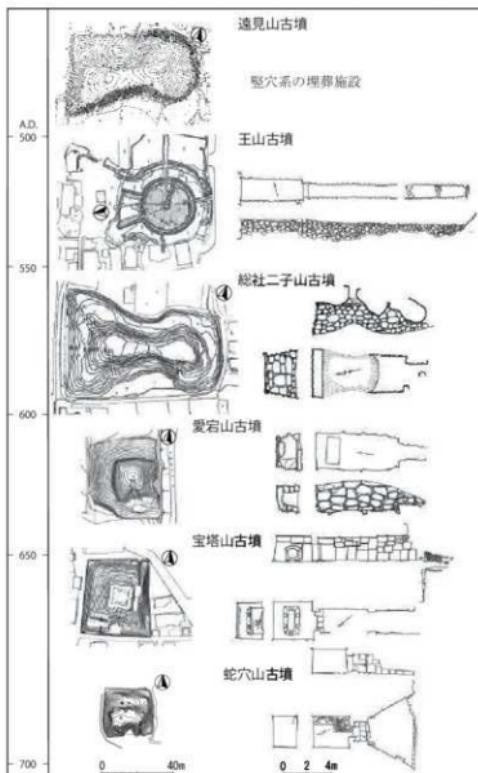
以下、古墳群を構成する諸古墳の個々について、明らかになった調査結果とその意義を整理し、古墳群の価値についてまとめてみたい。

調査で明らかになった諸特徴とその意義

(1) 遠見山古墳

本墳についてはこれまでの間、周辺地域の小規模開発に伴う発掘調査で、古墳の諸特徴の一部がかろうじて把握できるところであった。そこから本墳が総社古墳群形成の端緒をなすものであることが徐々に明らかになってきた。墳丘の南側で行なわれたトレンチ調査では、周塙底面近くの覆土中で5世紀末～6世紀初頭の降下が推定されている榛名浜川テフラ層（Hr-FA）が確認された。また、周塙南側部分のくびれ部付近で人物埴輪が確認されたことも注意された。これら一連のトレンチ調査により本格的な盾形周塙が伴うことなどが想定されるようになり、5世紀第4四半期の所産であることが明らかになった。

今次の調査では墳丘北側部分で初めての墳



第67図 総社古墳群の変遷

丘本体の調査が行なわれ、段構造、葺石構造、埴輪列の設置状況が明らかになった意義は大きい。また、これまで未確認ではあるものの2重周塙が想定されてきていたが、今回の調査で、中堤・外堀が確認され、周塙を含めた範囲と全体構造を確定することができた。前方部2段、後円部2段以上で埴丘長87.5m、外堀を含めた兆域の長軸長133mの規模を有することは、この時期の上毛野地域では最大級の前方後円墳に属するものであり、整美な2重周塙の存在と埴丘南側の中堤上への人物埴輪等の集中配置が十分想定されるところとなつた。

この時期の上毛野地域の顯著な動向としては、高崎市保渡田古墳群（井出二子山・保渡田八幡塙・保渡田菜葉塙古墳）をはじめとして利根川西岸の西毛地域を中心に最大級の前方後円墳（含む帆立貝式）が一齊に登場してくるようになる。前橋市中川小学校に保管されているカロウト山古墳（前橋市3号古墳、帆立貝式。現在の前橋市文京町に所在した）出土と伝えられる舟形石棺（？）や最近利根川流域に属する伊勢崎市西上之宮遺跡1号墳の調査で発見された舟形石棺（平方ほか2022）の存在を踏まえると、遠見山古墳についても、未確認ではあるが舟形石棺分布域に収まるので、その可能性は十分考えられる。

5世紀後半の時期、上毛野地域中西部には舟形石棺の採用を共通にした連合体の存在が想定されるが、遠見山古墳はその有力構成員として登場していることが想定される。

（2）王山古墳

遠見山古墳に統いて築造された本墳は、今回の古墳群の基礎的検討の中では主たる対象にはなっていないが、總社古墳群の中では枢要な位置を占めるものである。上毛野地域では、6世紀初頭を前後した時期（陶邑須恵器編年のMT15の型式的特徴を有する須恵器を出土する）、当地域の中西部地域の最大級の前方後円墳に横穴式石室が一齊に採用される点が特徴的であり、そのうちの一つが王山古墳である（右島1983）。主要なものとしては、安中市築瀬二子塙古墳（埴丘長76m）、富岡市一之宮4号墳（同48m）、前橋市正円寺古墳（同70m）、同市前二子古墳（同92m）があり、当地域の新たな展開の中で引き続き枢要な位置を占めていたことがわかる。

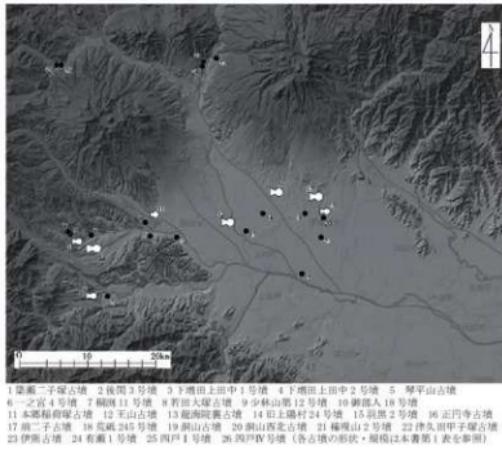
王山古墳の埴丘構造を見てみると、ほぼ川原石のみで築成された円丘部と一体的に横穴式石室が構築され、その後に盛土構造による前方部が付加され、全体として2段構造に整備されるという特異な築成過程をたどることが明らかになっている。また、後円部の埴丘頂部縁辺には少なくともそれぞれ10基以上の大型大刀形・盾形埴輪が回繞する特徴的な器財埴輪のあり方を示していた（松島・中村・右島1991）。

当墳の現状は、古墳理解にとって効果的な整備がなされているとは言いがたいが、遺存していた古墳の大半は保護されているので、今後効果的な保存・再整備を期すことにより總社古墳群の枢要な位置にあることを示すことは十分可能である。

（3）總社二子山古墳

今回の調査で本墳の全体構造と範囲を確定できたことの意義は大きい。確認された埴丘規模、二重とみられる周塙の範囲・形状は、高崎市綿貫觀音山古墳のそれとほぼ一致することが明らかになった。

筆者は両古墳の角閃石安山岩削石積石室は同一企画・規模によっている可能性が強いことから、両者の親縁性を指摘してきたところである（右島1992）。これら角閃石安山岩削石積石室は、觀音山古墳と總社二子山古墳の築造を契機にして新たに誕生した独特の石室形式である。このことは単に共通の石室形式を実現したこととどまらず、両者



第68図 上毛野地域の初期横穴式石室分布図

の間に強い政治的親縁性が存在したことを想起すべきである。

観音山古墳の代表的な副葬品の一つに金銀装頭椎大刀がある。全長117cmを有し、実用武器ではなく、威信財として枢要の位置を占めるものであった。これと細部にいたるまでまったく同一の大刀が総社二子山古墳に存在していたことが文政8年(1819)作成の絵図の写し(本書51頁第33図)によって知ることができる。このことも両墳の親縁性を補強してあまりある。

ところで、両墳と同じ構築技術に裏付けられた同種の角閃石安山岩削石積石室を有する前方後円墳が利根川中流域・烏川下流域に分布しており、観音山・総社二子山古墳も含めて10基をあげることができる。これらの前方後円墳は石室構造の類似に加えて新羅系金銅製出字式冠を伴っていた前橋市山王金冠塚古墳に顕著に認められるように朝鮮半島系の副葬品を伴っている点でも観音山古墳に共通している。観音山・総社二子山に関わる勢力の政治的リーダーシップの下に編成されていたことを想起する有必要がある。なお、当地域の横穴式石室の系譜上にまったく乗らない中で成立した観音山・総社二子山古墳に代表される横穴式石室が、加賀地城南西部の固城・晋州・宜寧・咸安の地域一帯に認められる横穴式石室をモデルとして成立した可能性が強いことを指摘した(右島2019)。

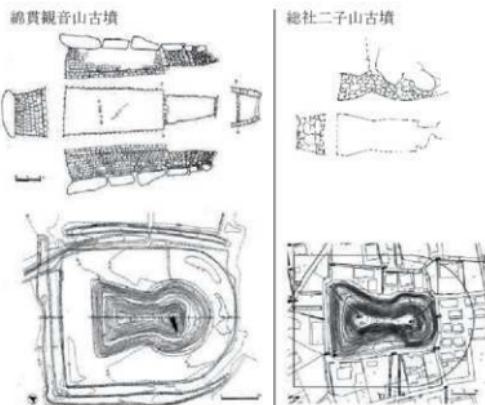
最後の前方後円墳である総社二子山古墳を経て、次の愛宕山古墳の段階には、総社古墳群の勢力を頂点にした上毛野地域の支配構造の再編成が実現する。その場合、総社二子山古墳の段階に一元化の動きは徐々にではあるが進行していたことを推測できる。

(4) 愛宕山古墳

長い間円墳と理解されてきた本墳について方墳の可能性を強く指摘し(右島1985)、その後の墳丘測量調査によつてこれを確実視できた(右島1988)。さらに平成7年には前橋市教育委員会による墳丘周囲の発掘調査の機会があり、方墳であるとのものとなつた(戸所ほか1996)。

この新事実に加えて、昭和50年(1975)の前橋市教育委員会による発掘調査で、それ以前円墳とされてきた蛇穴山古墳が方墳であることが明らかにされている。総社古墳群の変遷過程は、総社二子山古墳を最後の前方後円墳とし、7世紀に入ると愛宕山古墳・宝塔山古墳・蛇穴山古墳の順に方墳を採用し築造したことが明らかになってきた。このことを踏まえると、7世紀前半の段階に最初の方墳を実現した愛宕山古墳の成立は、古墳群形成過程のなかで、これまで以上に重視していかなければならないことになる。

上毛野地域では最後の前方後円墳の段階までは、律令制の郡に近い範囲よりやや狭い領域を単位として、墳丘長80~100mの前方後円墳が林立していることから、多少の優劣の差は認められるものの傑出した勢力を見出すことはで



第69図 墳丘及び石室形状の比較



第70図 主な角閃石安山岩削石室分布図

きないと考えられる。ところがその後に続く愛宕山古墳の段階には、これに並び称される古墳の存在は全く認められないことから、愛宕山古墳を頂点にした地域の再編成の動きがあったことがわかる。

愛宕山古墳の構造的特徴を見るならば、まず方墳の採用が本墳に特化されていることが注意される。規模的にも一辺約57mの規模は傑出している。このことに加えて畿内系の巨石構造の巨室横穴式石室を実現していること（右島2020）、削抜式家形石棺を採用していることも特筆されるべきものであり、同時期の他の有力古墳との決定的な差別化の意図が明らかであった。

今回の本墳の基礎調査で初めて埴丘本体に調査を及ぼすことができた。その結果は想像以上の内容を有するものであった。その中でも特筆されるのが、現状で高さ8.5m以上の埴丘に対して、大量の川原石を駆使して確認できただけで3段の段構造を極めて丹念に実現していることである。第2段と第3段の葺石構造は、埴丘盛土の表面に丹念・整美に葺石が施された後にその外側に厚い裏込めを伴う葺石が施される2重構造となっている。さらに第1段と第2段の上面のテラス面には扁平な川原石が密に敷き詰められているものであった。埴頂面は旧状を残していないが、この面にも敷き詰められていた可能性は十分考えられるところである。なお、第1段の葺石根石部から直接埴丘側の周塙掘り込み部分がはじまるのではなく、根石位置から1.5mほど平坦面を以て周塙の掘り込みがはじまるものであった。

前方後円墳終焉後、新たな埴丘形式として方墳を採用し、上毛野地域の頂点を占めることになった愛宕山古墳の築造に際しては、新たな時代展開を視覚的にアピールしていこうとした強い意図を見出すことができよう。

(5) 宝塔山古墳

総社古墳群の中で、本墳が最もよく知られており、古墳群を代表するものとして位置づけられてきた。横穴式石室については群馬大学による詳細な実測調査が行なわれ、また石室整備に伴って前庭部分の調査が行なわれている（尾崎1966、石川1968、右島1985）。その後、白石太一郎氏を中心とした研究グループにより埴丘・石室測量が実施され、從来2段築成されていた埴丘が3段築成である可能性が指摘された（白石ほか1990）。

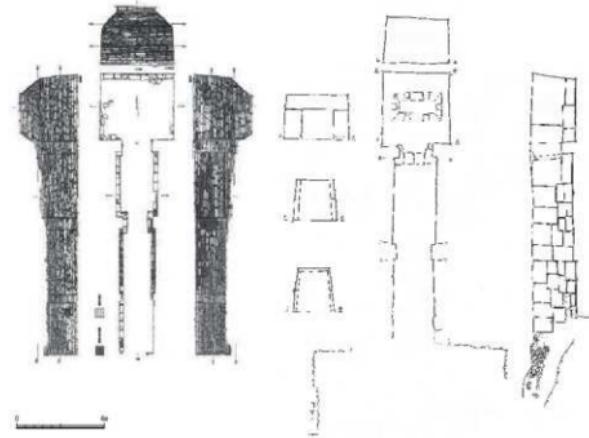
近年の発掘調査により宝塔山古墳の基礎的内容について大きな進展があった。その1は古墳の隣接地での公民館建設に伴う事前の範囲確認調査により埴丘の北東側の周塙の全貌が明らかになったことである（前橋市教育委員会2010）。周塙は幅18m以上を有しており、これを含めた兆域は1辺約102mに復原された。

また今回の調査では、埴丘の北西寄りに設定したトレンチにより、初めて埴丘の北西隅の裾部を確認することができた。この確認地点を基準にすると1辺約60mの埴丘規模が具体的に復元されることになった。

今回の一連の基礎調査においては、宝塔山古墳の基礎的理解を大きく深化させる収穫としては、まず蛇穴山古墳とともに石室の3次元計測が実施されたことがある。本横穴式石室の構成原理、構築手法を詳細に再検討していく道筋が明かれたことになる。

筆者は、宮内庁書陵部陵墓課及び奈良市教育委員会による奈良市帶解黄金塚古墳（黄金塚陵墓参考地）の調査を受けて、これと宝塔山古墳の横穴式石室の設計原理が共通している可能性を指摘した（清喜ほか2006・2008、安井2008・2010、右島2018）が、今回の3次元計測の成果をもとに再度より詳細に比較検討してみたいと思う。

もう一つ大きな収穫があつ



第71図 带解黄金塚古墳と宝塔山古墳の石室比較（清家2008・右島1985より転載）

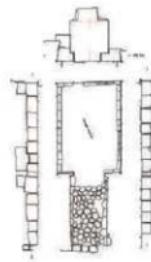
南下A号古墳



南下E号古墳

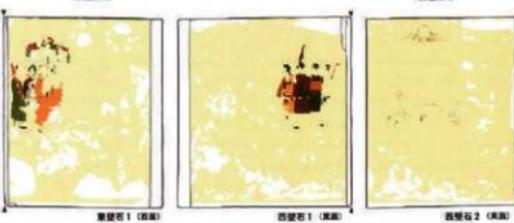
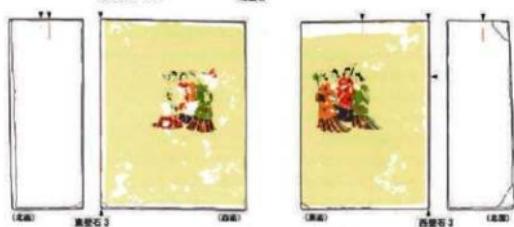
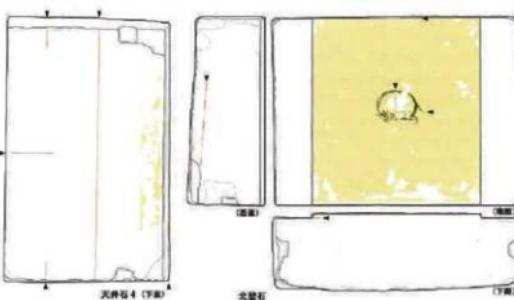


上庄司原4号古墳



0 4m

第72図 群馬県内の朱線を持つ石室（松本・桜場・右島1980、右島・津金澤・羽鳥1991より転載）



0 1m

第73図 高松塚古墳石室朱線（文化庁ほか2017より転載）

た。それは、当墳石室の壁体各所に遺存する朱線の存在である。本年2月に廣瀬覚氏（奈良文化財研究所）を宝塔山古墳に案内し、一緒に石材加工を観察していたところ、偶然にも朱線の大発見につながった。引き続き丹念に観察していくと次々と見つかってきた。それ以前、数え切れないほどの当墳への訪問、その中には、吉岡町南下A号・E号墳での発見後、宝塔山古墳にも存在する可能性が強いと確信して探索していたにもかかわらずであった。

いずれにしても本墳に朱線が存在することの意義は極めて大きい。本墳石室と南下A号墳石室の親縁性については、朱線が見つかる以前から早くに尾崎喜左雄氏が繰り返し指摘してきたところであった（尾崎1965・1971a・1971b）が、朱線使用も共通にしていることや本格的漆喰も共通にしていることから、同一の構築集団が関与している可能性が極めて強くなってきた。そしてその延長上には、他地域では唯一奈良県明日香村の地域に所在する高松塚・キトラ・マルコ山古墳で認められていることを視野に入れて検討を進めていく必要がある（廣瀬ほか2017）。

なお、本墳の場合、墳丘本体は未調査であるが、その後に位置づけられる愛宕山古墳、蛇穴山古墳の両墳とも川原石を駆使して3段以上の整美な方墳を実現していることを踏まえると、一段と視覚に訴える充実した墳丘を実現している可能性が極めて強い。埴底面からの墳丘高11.6m以上と、当古墳群の3基の方墳の中では傑出した高さを誇っているわけであるから、そこに愛宕山古墳や蛇穴山古墳で実現している葺石・段築構造を踏まえると、本墳の築造に注がれたエネルギーがいかに大きいものであったかがわかる。

(6) 蛇穴山古墳

蛇穴山古墳を取り巻く考古学的状況も大きく変わった。その第一は、宝塔山古墳の項で述べたように公民館建設に伴って宝塔山古墳とともに範囲確認調査を広域に実施した成果が影響している。すなわち、古墳の西側から北側部分の周塙の様相が明らかになってきた。間に中堤を挟んだ二重構造で、中堤の両側斜面部には丹念に整美な葺石が施されていた。視覚的に周囲の外観を見事に形成していたことがよくわかる。前代の愛宕山・宝塔山古墳とくらべてより視覚効果をねらった周塙構造であった点が、新たな流れとして特筆される。

本墳の石室は近世に開口されてしまい、弁天堂として盛んに再利用されてきたことが知られている。その際に、古墳の内堀部分を再掘削して池の中の弁天島を演出したのであった。また、玄室部分は堂の中心部分に当て、その手前に拝殿に当たる簡易な建物が取り付けられたようである。この時、かなり古墳の破壊が進行した可能性が強い。今回の調査では、この時に破壊が及び変更された範囲・痕跡を確定し、古墳の当初の状態がどこまで残っているのかを明らかにすることを大きな目標とした。

今回の基礎調査で初めて墳丘本体に調査を及ぼした。場所は、墳丘が比較的よく遺存していると思われる南東側部分と墳丘のコーナー部を確認するための南西部である。

南東側では、愛宕山古墳の墳丘調査の場合と同様、川原石を駆使した葺石による段築構造が良好に検出された。その構造を見てみると、基本的には愛宕山古墳に類するものであったが、段築の数は、愛宕山古墳を越えて少なくとも5段まで存在することが確認された。そのうち第1、2段は遺存状態がかろうじて残るものであったため、詳細な構造までは把握できなかった。第1段は墳丘側周塙の掘り込み部の位置に対応するもので、この部分に葺石が施されて段築構造を表現している。愛宕山古墳、宝塔山古墳ではここには葺石は施されない。視覚的に墳丘側周塙端部まで墳丘の外側端部として表現しようとしている意図が認められる。ここから約1mのテラス面をおいて実質的な墳丘部分である第2段となる。

その上の第3段も葺石構造は遺存状態が悪く不明確であるが、その上部平坦面には全体に丹念な敷石構造が確認されている。第4段では愛宕山古墳で確認されている葺石・裏込め・葺石の2重構造が明確に確認できた。そしてその上部平坦面には明瞭に敷石構造が確認できたので、少なくとも5段は存在したことがわかる。

本墳の場合、墳丘上半部については後世の改変・削平を考える必要がある。一辺40mの平面規模に比して、現状で埴底面からの高さが6.8mではあまりにも低いからである。墳頂部は後世に様々ななかたちで再利用されてきたことが知られている。その際に、本来の高さもかなり減じたと考えられよう。

本墳の横穴式石室については、従来の基本的理解に対して大きく修正する必要が出てきている。それは玄室前の前庭部についてである。その現状の構造を見てみると、玄門には天井石はないが渢道状の構造があり、その手前は平面が台形状を呈し、両側壁に切石を積み上げて構成している前庭構造がある。その壁石の一部には後世の積み直しと思われるものも存在するものの、基本的には本来の構造が残っているもの理解されてきた（尾崎1966、前橋市教育委員会1976、松本1981、右島1985）。ところが今回の調査で両側壁根石の下部まで掘り下げたところ、右側壁（石室手前

側から奥壁に向かっての左右。以下も同じ。ではそのすべてが、左側壁では最奥部の壁石を除く手前側のすべてが、その下部に礫混じりのコンクリートを敷いて設置していた。建築史の村田敬一氏の教示によると、コンクリートの状況から比較的古いものであるが、さかのぼっても大正期との所見を得ている。少なくとも前庭両側壁の大半は大正期頃積み直されたものであることが明らかになった。

それでは、本墳の本来の石室構造はどうだったのかが問題になってくる。その場合、羨道状構造の部分については当初の石室に付随すると思われる輝石安山岩の切石を組み合わせた敷石構造が前庭左側壁最奥部まで確認できることは、当初の状態を推測する重要な手がかりになるものと考えている。すなわち、台形状に開いている両側壁の左側最奥部は当初の状態を保持している可能性が極めて強いということである。



第74図 蛇穴山古墳前庭部左右側壁

この想定を前提にするならば、台形状を呈する前庭構造の大半は後世に積み直されたものであるが、これに近い当時の構造を踏襲して作り直されたことが考えられる。ただし、当初の両側壁の前端部が現状のそれと一致しているかは不明である。

かつて、本石室についても宝塔山古墳石室と同様に前室・羨道が取り付くものを近世に改変して現在の構造になつたとの解釈が呈示されている（木津1988）。この解釈の場合、現在見ることができる冠石前面と造り出しの玄門石から構成される玄室前面部分の多くが前室・羨道で覆い隠され死角となることを前提としている。少なくともこの説が成り立たないことは再確認しておきたい。それは現在観察することができる面の大半が石材加工上の最も念入りな最終仕上げ面となっているからである。死角になる部分に対しては基本的に最終仕上げまでは施さないのが基本だからである。

今回、前庭空間部分については石室構築基盤面まで掘り下げて状態を確認している。その結果、当時の地表面から約1mの厚さで礫敷きの基礎地形が確認された。この礫地形は、昭和50年の調査で玄室の下部でも確認しているので石室の築造範囲に即してなされていると考えられる。確認できた礫地形の南端は、大正期に設置し直した両側壁の前端部（南端部）にはほぼ一致している点は、当初の石室範囲を検討する上で示唆的である。

本墳の横穴式石室が、当初はいかなるものであったのかについては、一定の目安は得られたが、断定するには不確定な側面が多い。今後、この解明を目的にしての基礎調査が必要である。



第75図 蛇穴山古墳冠石最終仕上げ加工

総社古墳群の歴史的意義

総社古墳群を群としてのまとまりで捉え、分析をしたのは尾崎喜左雄氏が最初である。その成果は、『横穴式古墳の研究』や『前橋市史』第1巻古代中世編によって知ることができる（尾崎1966・1971）。ただし、総社古墳群を具

体的な検討対象として、その形成過程を跡づけ、その意義について言及したものとなると意外とない。

古墳群としてのまとまりに注目し、前方後円墳消滅とその後の展開過程を整理し、その意義を検討したのは、甘粕健氏が早い研究例である（甘粕・小宮1976）。その後、梅澤重昭氏も群としての構成、変遷過程とその歴史的意義について整理している（梅澤1981）。

総社古墳群を中心的課題として取り上げ、あらためて詳細に考古学的検討を及ぼしたのは右島が最初だろう（右島1985）。そこでは構成古墳の個々について徹底した基礎的検討を行い、正しく位置づけることにつとめている。その場合、上毛野地城、東国の中での個々墳あるいは古墳群の相対的位置を確認していくことに留意した点が重要である。その上で、この時代をリードした畿内地域の動向を見ていくことにより、古墳群の変遷過程、取り分け総社二子山古墳から愛宕山・宝塔山・蛇穴山古墳への展開過程に畿内地域（ヤマト王権）が直接的に深く介在する流れを明確に把握することができた（右島1985・1992）。

総社古墳群を取り巻く考古学資料の状況が大きく変化したのは、上記の諸成果以後のことである。そこでは、従来の古墳研究にとって盲点となっていた諸侧面が大いに影響している。特に愛宕山・宝塔山・蛇穴山古墳の時期に当たる7世紀の時期（終末期）については、古墳研究者の側には、古墳の終焉段階としての位置づけに重点が置かれてしまい、畿内地域を中心とした中央集権的体制への移行過程に当たっていること、すなわち新たな時代展開への留意がおろそかになっていたことは否めない。

その意味では、昭和50年代以降、取り分け平成期を通じて広域に活発な遺跡調査が進行し、7・8世紀の、すなわち終末期古墳を取り巻く考古資料の状況が顕著に充実した。中でも後の東山道駿路・同武藏路に直接つながる前身の幅約12mの道路状遺構が7世紀後半を中心とした時期に一気に開設される状況が群馬県内各地で確認されるようになった。またこの動きに歩を合わせるかのように都家跡（評家）が次々に見つかってきており、また同時期の諸遺構も目白押しである。

宝塔山古墳、蛇穴山古墳はその真っ只中の所産であり、愛宕山古墳や総社二子山古墳は前夜に位置づけられるだろう。このような歴史過程の中に古墳群を位置づけ、その歴史的意義について再検討していくことにより、地域総体の中に、あるいは列島社会の中に総社古墳群の位置を見出すことが可能になってくる。



第76図 太田市大道東遺跡の道路状遺構

引用・参考文献

- 甘粕健・小宮まゆみ 1976 「前方後円墳の消滅」『考古学研究』23-1 考古学研究会
伊勢崎市教育委員会 2007 『三軒屋遺跡1』
梅澤重昭 1981 「総社古墳群」『探訪 日本の古墳 東日本編』有斐閣
太田市教育委員会 2008 『天良七塚遺跡』
尾崎喜左雄 1966 「横穴式古墳の研究」吉川弘文館
尾崎喜左雄 1971a 「豪族の支配と古墳の築造」『前橋市史』第1巻 前橋市
尾崎喜左雄 1971b 「古墳文化」『北群馬・渋川の歴史』北群馬・渋川の歴史編纂委員会
尾崎喜左雄・川合功・中村富夫 1976 『群馬総社古墳群 東国古代文化の中心』観光資源保護財団
木津弘明 1988 「上野国分尼寺々地考」『群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団
朽津信明 2006 「群馬県前橋市周辺の漆喰使用古墳について」『考古学と自然科学』53号 日本文部科学省
群馬県 1938 『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第5輯
群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010 『大道西遺跡』・『大道東遺跡』
白石太一郎ほか 1990 『関東地方における終末期古墳の研究』国立歴史民俗博物館
菅谷文則 1985 「榛原石考」『未永先生米寿記念献呈論文集』

- 清喜裕二 2006 「黄金塚陵墓参考地石室前面部の事前調査」『書陵部紀要』57号宮内庁書陵部
- 清喜裕二 2008 「黄金塚陵墓参考地埴丘及び石室内現況調査報告」『書陵部紀要』59号宮内庁書陵部
- 磚構埴研究会 1994 『舞谷古墳群の研究』 横原考古学研究所
- 戸所慎策ほか 1996 『總社愛宕山遺跡』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 林部 均 1994 「土器からみた磚積石室の年代」『舞谷古墳群の研究』磚構埴研究会編 奈良県立横原考古学研究所
- 平方篤行・多田宏大 2022 「西上之宮遺跡」『理文群馬』67 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 廣瀬寛ほか 2017 「特別史跡高松塚古墳発掘調査報告書」 文化庁・奈良文化財研究所・奈良県立横原考古学研究所・明日香村教育委員会
- 廣瀬寛・若杉智大 2012 「キトラ古墳の調査 第170次」『奈良文化財研究所研究紀要2012』奈良文化財研究所
- 前橋市教育委員会 1975 『文化財調査報告書 山王庵寺第1次調査』
- 前橋市教育委員会 1976 『蛇穴山古墳調査概報』
- 前橋市教育委員会 1976・77・78・79・80・82 『山王庵寺調査概報』第2次～第7次
- 前橋市教育委員会 2000 『山王庵寺等V遺跡発掘調査報告書』
- 前橋市教育委員会 2007・09・10・11・12 『山王庵寺範囲内容確認調査報告書』I・II・III・IV・V
- 前橋市教育委員会 2020 『總社古墳群範囲内容確認調査報告書』I
- 前橋市教育委員会 2023 『總社古墳群範囲内容確認調査報告書』II
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010 『蛇穴山古墳・宝塔山古墳・總社町屋敷南遺跡』
- 松島榮治・中村富夫・右島和夫 1991 「前橋市王山古墳の調査」『平成3年日本考古学会研究発表要旨』
- 松本浩一 1981 『蛇穴山古墳』『群馬県史』資料編3 群馬県
- 右島和夫 1983 「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談叢』12集 九州古文化研究会
- 右島和夫 1985 「前橋市總社古墳群の形成過程とその画期」『群馬県史研究』22号
- 右島和夫 1988 「總社愛宕山古墳の埴丘・石室測量調査」『群馬県史研究』28号
- 右島和夫 1993 「角閃石安山岩削石積石室の成立とその背景」『古文化談叢』30集下 九州古文化研究会
- 右島和夫 1992 「古墳から見た6、7世紀の上野地域」『国立歴史民俗博物館研究報告』44集 国立歴史民俗博物館
- 右島和夫 2018 「終末期古墳から見た畿内と東国 一帯解黄金塚古墳と彭頭山古墳の検討を中心としてー」『泉森岐先生喜寿記念論集』 泉森岐先生喜寿記念会
- 右島和夫 2020 「東国における畿内型石室」『横穴式石室の研究』土生田純之編 同成社
- 安井宣也 2008 「黄金塚古墳」『奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会年報』平成19年度
- 安井宣也 2010 「帝解黄金塚第2次調査」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成20年度 奈良市教育委員
- 若杉智大 2014 「キトラ古墳の調査175-8次・178-6次」『奈良文化財研究所研究紀要2014』奈良文化財研究所

第6章 まとめ

総社古墳群は、5世紀後半から7世紀後半にかけて連綿と築かれた地方の首長層の墳墓であり、古墳時代の地方有力者層の様相や畿内との関係性を知ることのできる重要な古墳群である。

畿内の政治動向を受け、中期後半に突如充実した内容を持つ遠見山古墳が築かれて以降、榛名山東南麓の利根川右岸にある総社地区に連綿と首長墳が築かれることとなった。後期初頭に築かれた王山古墳は、畿内の影響を受けた墳丘形状を持ち、横穴式石室をいち早く導入するものの、川原石を多用した墳丘構造や地域色の強い横穴式石室を構築する。後期後半の総社二子山古墳になると墳丘規模は最大化し、綿貫觀音山古墳と墳丘や石室の規模・形状、副葬品を共有して、両勢力が上毛野地域で主導的な役割を果たしたと見られる。在地石材で構築された地城的な後円部石室とともに畿内の影響を受けた前方部石室が築かれ、次代の愛宕山古墳にその要素が受け継がれる。遠見山古墳から総社二子山古墳にかけて、畿内の影響を受けながら地城的な前方後円墳の構築が行われた。

飛鳥時代になると、官人制の導入等により古墳による身分表徴がなされなくなる中、総社古墳群でも畿内とほぼ同時期に前方後円墳から方墳へと変化し、三代にわたって突出した大型方墳を築く。上毛野地域最大規模で、重厚なつくりを持つ愛宕山古墳は、総社古墳群の勢力が地域最高位の首長に至ったことを示し、その背景にはヤマト王権による地域再編があったと考えられる。埋葬主体部には巨石を用いた畿内型石室を採用し、玄室には畿内系の剣拔式家形石棺を安置するなど畿内有力者層の墓制が色濃く認められる。7世紀中葉から後半に構築された宝塔山古墳は引き続き大型方墳を構築し、地域最高位の首長を繼承したことを示す。精緻な切石積石室や棺台の意匠を取り入れた畿内系家形石棺、朱線を使った設計、漆喰の使用など、前代同様畿内の墓制を広く導入した様子が認められる。また、古墳構築と並行して山王庵寺の造営も開始され、政治的・文化的なモニュメントとして上毛野地域の首長の権威を象徴することになる。7世紀後半築造の蛇穴山古墳では、墳丘や石室規模を縮小しながら、全面に漆喰を塗布した精巧な石室を持つ。愛宕山古墳から続く三代の大型方墳は、畿内の終末期における古墳の変遷過程に対応しており、朝鮮半島から畿内を通して各地に技術が伝播した汎東アジア的な墳墓建築の変遷とも連動している（山本2023）。

その一方で、関東地方では、前方後円墳築造停止後も墳丘規模により身分秩序が表徴される（青木2007）。総社古墳群では、三代にわたって広大な兆城を持つ重厚な大型方墳を築造し、新たなモニュメントである仏教寺院の造営とともに、その石材加工技術も導入しながら精巧な切石積石室を構築する。その背景には、経済的・軍事的な基盤である東国の大要衝に重厚な大型古墳を築くことにより、視覚的に蝦夷に対する抑止力という側面を持ち、ヤマト王権の権威の強さを可視化する装置としての機能が期待されていた（林部2023）。三代の大型方墳の構築は、佐々木郡や新田郡といった行政施設の造営や、大道西・東遺跡に見られる幅12mに及ぶ道路状遺構の敷設など中央集権体制構築に向けた一連の施策と一体のものと見なすことができる。奈良時代になると、総社古墳群に至近の場所に国府が置かれ、やがて上野国分僧寺や国分尼寺が造営されるなど、古代国家体制成立までの過程を、連綿と築かれた首長墳である総社古墳群の動向から見通すことができる。

平成29年度から実施している範囲内容確認調査事業により、古墳群総体としての様相を把握することができ、各古墳が上毛野地域の歴史の画期を象徴する重要な記念物であることが明らかになった。特に、各古墳の兆城は概ね確認でき、古墳群の保護に係る重要な情報を得ることができた。本事業の最終年度となる令和5年度には、補足調査に加え、宝塔山古墳・蛇穴山古墳石室の石材加工方法の検討や、宝塔山古墳で新たに確認された朱線範囲の調査を予定しており、古墳群の新たな価値が浮かび上がる可能性がある。総社古墳群の調査はその緒についたばかりであり、調査の進展に伴って将来的に新たな価値の発見が期待される。

総社古墳群は、古墳時代の上毛野地域の様相のみならずヤマト王権との関係性まで知ることのできる重要な古墳群である。この古墳群を確実に保護し、次世代へと継承していくためには、市民がその価値を共有し、市民と行政が一体となって保存や活用に取り組むことが求められる。そのためには、様々な媒体を活用し、色々な機会をとらえて、古墳群に係る情報を広く発信する必要がある。また、古墳群周辺には宝塔山古墳・蛇穴山古墳と同時に造営が進められた史跡山王庵寺跡や、古墳群至近の場所に造られた推定上野国府跡、史跡上野国分寺跡及び上野国分尼寺跡（高崎市・前橋市）、総社二子山古墳と政治的協力関係にあったと見られる綿貫觀音山古墳（高崎市）、そして三代にわたる大型方墳と石室構築技術を共有する南下古墳群（吉岡町）などが分布しており、関連遺跡群と連携した活用方法の検

討が必要である。すでに古墳群の中心に総社歴史資料館があるため、情報発信や活用のコア施設として機能強化を図ることにより、古墳群の一層の利活用を進めることができると考える。その一方で、古墳群周辺でも開発行為が頻発していることから、段階的な公有化等の保護手段を一刻も早く講じる必要がある。今後、古墳群総体としての保存活用計画の策定を進め、将来的な保存と活用の方針を定める必要があろう。

本事業の実施にあたっては、総社古墳群調査検討委員をお引き受けいただいた群馬県立歴史博物館 右島和夫先生、国立歴史民俗博物館 林部均先生、日本大学文理学部 山本孝文先生からは、事業開始時から多大なご指導・ご助言をいただき、本報告書作成にあたっては玉稿を賜った。また、文化庁文化財第二課川畠純調査官（当時）・大澤正吾調査官や群馬県地域創生文化財保護課各位からは、折に触れてご指導・ご助言をいただいた。そして、地元総社地区自治会連合会や総社歴史資料館説明員の会からは日々ご協力をいただいている。組織内部ではあるが関係各課とも常に連絡を取り、有益な意見をいただいている。記して感謝申し上げたい。

引用・参考文献

- 総社町役場 1910『能社町郷土誌』
- 上毛郷土史研究会 1920『上毛及上毛人』第45号
- 群馬県 1929「五 二子山古墳」『群馬県史跡名勝天然記念物調査報告 第一集』
- 上毛郷土史研究会1936『上毛及上毛人』第229号
- 群馬県 1938『上毛古墳総覧』
- 総社町 1956『史蹟及び文化財』『寺院』『総社町誌』
- 尾崎喜左雄 1966『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
- 前橋市教育委員会 1968『国指定史跡宝塔山古墳石室調査概報』
- 石川正之助 1969『総社二子山古墳前方部石室の研究（上）』
- 尾崎喜左雄 1973『総社二子山古墳』『愛宕山古墳』『宝塔山古墳』『蛇穴山古墳』『前橋市史第1巻』前橋市
- 田澤金吾 1974『上野国総社二子山古墳の調査』日本古文化研究所 吉川弘文館
- 前橋市教育委員会 1975『文化財調査報告書第6集』
- 前橋市教育委員会 1976『史跡蛇穴山古墳調査概報』
- 中村富雄 1977『王山古墳』『総社二子山古墳』『群馬総社古墳群』財團法人観光資源保護財团
- 川合 功 1977『愛宕山古墳』『蛇穴山古墳』『群馬総社古墳群』財團法人観光資源保護財团
- 松本浩一・桜場一寿・右島和夫 1980『截石切組横六式石室における構築技法上の諸問題 上』『群馬県史研究』11群馬県史編さん委員会
- 石川正之介 1981『宝塔山古墳』『群馬県史資料編3原始古代』群馬県
- 石川正之介 1981『宝塔山古墳』『群馬県史資料編3原始古代』群馬県
- 群馬県教育委員会 1981『史跡親音山古墳保存修理事業報告書』
- 松本浩一 1981『蛇穴山古墳』『群馬県史資料編3原始古代3』群馬県
- 松本浩一・桜場一寿・右島和夫 1981『截石切組横六式石室における構築技法上の諸問題 下』『群馬県史研究』13群馬県史編さん委員会
- 伊勢崎市教育委員会 1982『牛伏1号墳 祝堂古墳 大沼上古墳』
- 田中広明 1983『終末期古墳出現への動態1』『研究紀要』5埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 津金澤吉茂 1983『古代上野国における石造技術についての一試論』『群馬県立歴史博物館紀要』群馬県立歴史博物館
- 東京国立博物館『東京国立博物館図版目録・古墳遺物編（関東Ⅱ）』
- 右島和夫 1985『前橋市総社古墳群の形成過程とその画期』『群馬県史研究』22群馬県史編さん委員会
- 南雲芳昭・若狭徹 1985『保渡田三古墳の埴輪』『第6回三県シンポジウム 墓塚の変遷』北武藏古代文化研究会
- 坂口 一 1987『群馬県における古墳時代中期の土器の編年』『研究紀要』4 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 群馬県教育委員会 1988『三ツ寺1号墳』
- 右島和夫 1988『総社愛宕山古墳の埴輪・石室測量調査』『群馬県史研究』28群馬県史編さん委員会
- 右島和夫 1988『保渡田3古墳について』『三ツ寺1号墳』群馬県教育委員会
- 小林正春 1989『長野県における横穴式石室の受容（伊那谷）』『第10回三県シンポジウム 東日本における横穴式石室の受容』群馬県考古学研究所

- 田口一郎 1989「群馬県西部における初期横穴式石室の様相」『第10回三県シンポジウム 東日本における横穴式石室の受容』群馬県考古学研究所
- 加部二生 1989「群馬県東部における初期横穴式石室の様相」『第10回三県シンポジウム 東日本における横穴式石室の受容』群馬県考古学研究所
- 右島和夫 1989「東山道における横穴式石室の受容」『第10回三県シンポジウム 東日本における横穴式石室の受容』群馬県考古学研究所
- 右島和夫 1990「古墳から見た五・六世紀の上野地域」『古代文化』47—2
- 白石太一郎編 1990『関東地方における終末期古墳の研究』国立歴史民俗博物館考古研究部
- 群馬町教育委員会 1990『保渡田VII遺跡』
- 若狭 敬 1990『考察』『保渡田VII遺跡』群馬町教育委員会
- 松島栄治・中村富雄・右島和夫 1991「群馬県前橋市王山古墳の調査」『日本考古学協会第57回総会研究発表要旨』日本考古学協会
- 白石太一郎 1992『関東の後期大型前方後円墳』『国立歴史民俗博物館研究報告』44国立歴史民俗博物館
- 右島和夫 1992「古墳から見た6.7世紀の上野地域」『国立歴史民俗博物館研究報告』44国立歴史民俗博物館
- 前橋市教育委員会 1992『平成3年度市内遺跡発掘調査報告書』
- 玉村町教育委員会 1993『小泉大塚越遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1993『大屋敷遺跡1』
- 右島和夫 1994『東国古墳時代の研究』学生社
- 前橋市教育委員会 1995『市内遺跡発掘調査報告書』
- 右島和夫・徳江秀夫・南雲芳昭 1995『上野』『全国古墳編年集成』雄山閣
- 群馬県文化財事業振興会 1995『上野国寺院明細帳2』
- 外池 昇 1995『明治政府の陵墓管理—皇子・皇女墓の決定と管理』『明治政府による古墳の陵墓指定をめぐる国・府藩県・村相互の軋轢についての研究』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1996『總社愛宕山遺跡』
- 岸田治男 1997『つぶさに墳陵の状態を微し、測度し—『上毛上野古墓記』の世界と吉田芝浜の古墳観—』『研究紀要14』財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 群馬県教育委員会 1998『縊貫觀音山古墳1』
- 群馬県教育委員会 1999『馬場東矢次II遺跡・新川鍛木遺跡・井出二子山古墳・保渡田八幡塚古墳』
- 群馬県教育委員会 1999『縊貫觀音山古墳II』
- 群馬町教育委員会 2000『保渡田八幡塚古墳』
- 前橋市教育委員会 2000『山王庵寺等V遺跡発掘調査報告書』
- 若狭 敬 2000『保渡田八幡塚古墳および保渡田古墳群周辺の円筒埴輪』『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会
- 若狭 敬 2000『保渡田八幡塚古墳の造営全画と首長墓系譜』『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会
- 加部二生 2001「群馬県地域における古墳構築過程の一考察」『考古學英』梅澤重昭先生追記記念論文集
- 右島和夫 2002「古墳時代上野地域における東と西」『群馬県立歴史博物館紀要』23群馬県立歴史博物館
- 右島和夫・土生純之・曹永鉉 2003「古墳構築の復元的研究」雄山閣
- 吉井町教育委員会 2004『中原II遺跡』
- 青木 敬 2005「後・終末期古墳の土木技術と横穴式石室」『東国史論』20群馬県考古学研究会
- 前橋市教育委員会 2005『大室古墳群』
- 吉井町教育委員会 2005『安坪古墳群』
- 吉井町教育委員会 2005『東シメ木・多胡松原遺跡発掘調査報告書』
- 横澤真一「群馬県における前方後円墳の消滅と古墳の終末」『第10回東北・関東前後円墳研究会発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 朽津信明 2006「群馬県前橋市周辺の漆喰使用古墳について」『考古学と自然科学』日本文化財科学会誌53
- 青木 敬 2007『土木技術の古代史』吉川弘文館
- 前橋市教育委員会 2007『山王庵寺 平成18年度調査報告』
- 青木 敬 2008「4郡県下における後・終末期古墳の埴輪構築法」『山名伊勢塚古墳』高崎市教育委員会

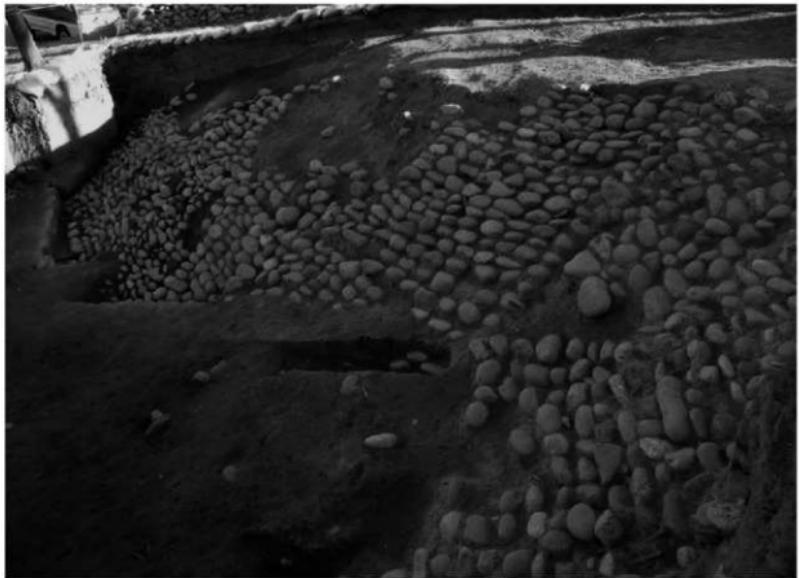
- 杉山秀宏 2008 「横穴式石室古墳の構築と埋葬の復元」『群馬県立歴史博物館紀要』29群馬県立歴史博物館
- 高崎市教育委員会 2008 『山名伊勢塚古墳』
- 前橋市教育委員会 2008 『年報』37
- 三田照芳・野村正弘 2008 「利根川・神流川の河川縦調査」『群馬県立自然史博物館自然史調査報告書』4群馬県立自然史博物館
- 前橋市教育委員会 2009 『山王庵寺 平成19年度調査報告』
- 前原 豊 2009 『東国大豪族の威勢・大室古墳群』新泉社
- 高崎市教育委員会 2009 『井出二子山古墳』
- 前橋市教育委員会 2009 『蛇穴山古墳・宝塔山古墳試掘調査の概要』『年報』38
- 山田俊輔 2009 「井出二子山古墳の埴輪」『井出二子山古墳』高崎市教育委員会
- 若狭 敬 2009 「井出二子山古墳の規格」『井出二子山古墳』高崎市教育委員会
- 伊勢崎市教育委員会 2010 『阿弥陀古墳』
- 福田貫之「土毛國のまほろば 総社古墳群」『群馬の古墳を歩く』みやま文庫
- 前橋市教育委員会 2010 『山王庵寺 平成20年度調査報告』
- 前橋市教育委員会 2010 『総社町屋敷南遺跡』年報第39集
- 前橋市教育委員会 2010 『蛇穴山古墳・宝塔山古墳・総社町屋敷南遺跡』
- 前原 豊 2010 「第1節 蛇穴山古墳・宝塔山古墳について」『蛇穴山古墳・宝塔山古墳・総社町屋敷南遺跡』前橋市教育委員会
- 右島和夫 2010 「第4節 東国における総社古墳群造営の歴史的意義」『蛇穴山古墳・宝塔山古墳・総社町屋敷南遺跡』前橋市教育委員会
- 角田清美 2011 「古代から中世前期における石灰と漆喰の利用」『専修大学人文論集』88専修大学学会
- 前橋市教育委員会 2011 『山王庵寺 平成21年度調査報告』
- 前橋市教育委員会 2011 『総社町屋敷南遺跡2』
- 右島和夫 2011 「古墳時代の毛野・上毛野・下毛野を考える」『古墳時代毛野の実像』雄山閣
- 若狭 敬 2011 「中期の上毛野」『古墳時代毛野の実像』雄山閣
- 前橋市教育委員会 2012 『山王庵寺 平成22年度調査報告』
- 前橋市教育委員会 2012 『元総社普海遺跡群(38)』
- 青木 敬 2013 「古墳の埴輪構造」『考古学ジャーナル』No644
- 高崎市教育委員会 2013 『八幡中原遺跡4』
- 土生田純之 2013 「横穴式石室から見た古墳の終焉」『古墳から寺院へ』六一書房
- 前橋市教育委員会 2013 『推定上野国府 平成23年度調査報告』
- 前橋市教育委員会 2013 『推定上野国府 平成24年度調査報告』
- 小林孝秀 2014 「横穴式石室と東国社会の原像」雄山閣
- 前川住文・朽沢信明・久住有生「前橋市・宝塔山古墳における漆喰の施工過程に関する研究」2015『日本文化財科学会大会研究発表要旨集』
- 前橋市教育委員会 2015 『推定上野国府 平成25年度調査報告』
- 右島和夫 2015 「東国における終末期の畿内型石室」『河上邦彦先生古希記念献呈論文集』河上邦彦先生古希記念会
- 草野潤平 2016 「東国古墳の終焉と横穴式石室」雄山閣
- 前橋市教育委員会 2016 『推定上野国府 平成26年度調査報告』
- 右島和夫 2016 「東国における終末期古墳と漆喰」『群馬県立歴史博物館紀要』37群馬県立歴史博物館
- 右島和夫 2016 「築瀬二子塚古墳の基礎調査とその成果」『築瀬二子塚古墳整備事業報告書』安中市教育委員会
- 大塚初重・梅澤重昭 2017 「東アジアに躍る上毛野の首長 総貫觀音山古墳」新線社
- 群馬県教育委員会 2017 『群馬県古墳総覧』
- 高崎市教育委員会 2017 『高崎市文化財保護年報 平成28年度』
- 前橋市教育委員会 2017 『推定上野国府 平成27年度調査報告』
- 若狭 敬 2017 「前方後円墳と東国社会」吉川弘文館
- 青木 弘 2018 「東国の後・終末期古墳における造墓集团の研究—横穴式石室の構造分析を中心として」早稲田大学大学院提出学位論文
- 埼玉県教育委員会 2018 『史跡埼玉古墳群総括報告書1』
- 前橋市教育委員会 2018 『推定上野国府 平成28年度調査報告』

- 右島和夫 2018『群馬の古墳物語』(上巻)・(下巻) 上毛新聞社
- 壬生町教育委員会 2018『件:塚古墳・車塚古墳!』
- 若狭 敬 2018「東国における古墳時代地域経営の諸段階」『国立歴史民俗博物館研究報告』211 国立歴史民俗博物館
- 右島和夫 2019「古墳から見た7世紀の上毛野地域—吉岡町南下古墳群を中心として—」『群馬文化』338群馬県地域文化研究協議会
- 前橋市教育委員会 2019『推定上野国府 平成29年度調査報告』
- 群馬県立歴史博物館 2020『国宝決定記念 第101回企画展 織貫觀音山古墳のすべて』
- 群馬県理蔵文化財調査事業団 2020『四戸の古墳群』
- 高崎市観音塚古墳考古資料館 2020『高崎市中原II遺跡1号古墳出土埴輪の世界』令和2年度高崎市観音塚古墳考古資料館第32回企画展
- 前橋市教育委員会 2020『總社古墳群範囲内容確認調査報告書1』
- 前橋市教育委員会 2020『推定上野国府 平成30年度調査報告』
- 右島和夫 2020「東国における畿内型石室」「横穴式石室の研究」同成社
- 佐藤 有「明治前期における古墳取り扱いの法制化と地域一群馬県における行政機構の整備と展開—」『群馬県立歴史博物館紀要』第42号
- 高崎市観音塚古墳考古資料館2021『群馬の中期古墳とその時代』令和3年度高崎市観音塚古墳考古資料館第33回企画展
- 前橋市教育委員会 2021『推定上野国府 令和元年度調査報告』
- 若狭 敬 2021『古墳時代東国の地域経営』吉川弘文館
- 群馬県立歴史博物館 2022『群馬県立歴史博物館第107回企画展展示図録 上野三碑の時代—7・8世紀の都と東国』
- 高崎市観音塚古墳考古資料館 2022『地方から見た携帯長とその前後』令和4年度高崎市観音塚古墳考古資料館第34回企画展
- 高崎市教育委員会 2022『史跡保渡田古墳群保存活用計画』
- 日高 慎 2022「(2) 壬生車塚古墳の埴輪をめぐって」『壬生車塚古墳II』壬生町教育委員会
- 前橋市教育委員会 2022『二之宮八王子古墳』
- 前橋市教育委員会 2022『推定上野国府 令和2年度調査報告』
- 壬生町教育委員会 2022『壬生車塚古墳II』壬生町教育委員会
- 前橋市教育委員会 2023『總社古墳群範囲内容確認調査報告書II—遠見山古墳・總社二子山古墳・愛宕山古墳・宝塔山古墳・蛇穴山古墳 の調査—』
- 前原 豊 2023「垂下突帶付高杯の分布について—古墳時代中期、伊勢湾沿岸で生まれた高杯—」『利根川』45号 利根川同人

写 真 図 版



遠見山古墳全景（南東より）



北側くびれ部の葺石



くびれ部オルソ画像（5トレンチ 下が後円部）



くびれ部埴輪列（5トレンチ）



内堀より墳丘を望む（2トレンチ）



前方部基壇テラス面（奥は2段目葺石 2トレンチ）



基壇内葺石（2トレンチ）



2段目葺石（2トレンチ）



祭祀跡遺物出土状況



後円部中央部（8トレンチ）



内堀土層堆積状況（1トレンチ）



後円部南側内堀（6トレンチ）



西側中堤より前方部墳丘を望む（3トレンチ）



前方部南側内堀（7トレンチ）



内堀南側立ち上がり（6トレンチ（H3））



内堀南西コーナー（6トレンチ（H3））



前方部南側外堀（9トレンチ）



祭祀跡出土土器



墳丘北側くびれ部出土円筒埴輪



墳丘埴輪列の円筒埴輪



周堀出土円筒埴輪



王山古墳全景（西より）



前方部墳丘2段目（北より）



石室閉塞状況（東より）



狭道より玄室を望む



総社二子山古墳全景（南より）



かつての総社二子山古墳（昭和40年代）



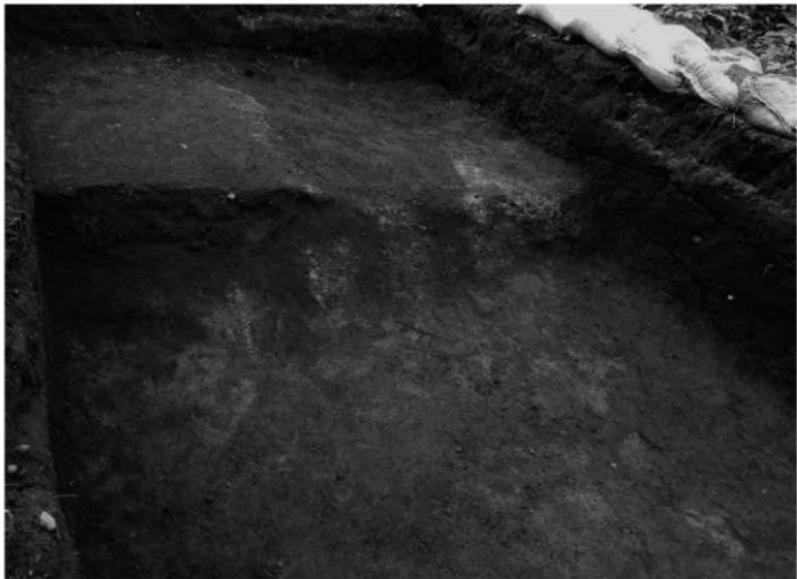
前方部に設けられた拌殿



1 トレンチ全景（西より）



4 トレンチ全景（南より）



前方部西側周堀立ち上がり（1トレンチ）



後内部墳丘裾部（4トレンチ）



石敷き遺構（4トレンチ）



後円部石室奥壁（田澤1974より）



後円部石室側壁（田澤1974より）



總社二子山古墳前方部石室



愛宕山古墳全景



愛宕山古墳全景（南より 昭和40年代）



古墳玄室と家形石棺



周堀より墳丘を望む（北トレンチ）



1段目葺石（北トレンチ）



敷石及び2段目葺石（北トレンチ）



3段目葺石（北トレンチ）



周堀より墳丘を望む（西トレンチ）



1段目葺石（西トレンチ）



敷石及び2段目葺石（西トレンチ）



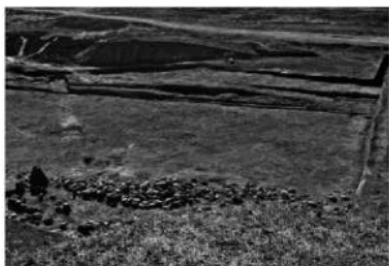
3段目葺石（西トレンチ）



墳丘より周堀を望む（1A トレンチ 平成 7 年）



周堀北西部の様子（4 トレンチ 平成 7 年）



周堀南西部の様子（5 トレンチ 平成 7 年）



平成 7 年度調査区全景



宝塔山古墳全景（北西より）



宝塔山古墳全景（南より 昭和40年代）



宝塔山古墳石室と石棺



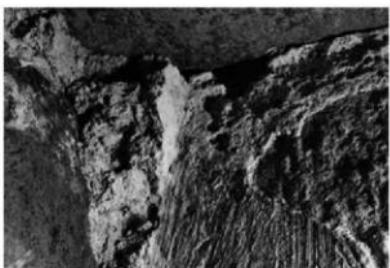
宝塔山古墳家形石棺



秋元家歴代墓地（墳頂部）



調査前の石室内の様子（昭和40年代）



漆喰塗布の様子（玄室奥壁付近）



漆喰表面の様子（玄室）



截石切組積の様子（前室）



截石切組積の様子（渡道）



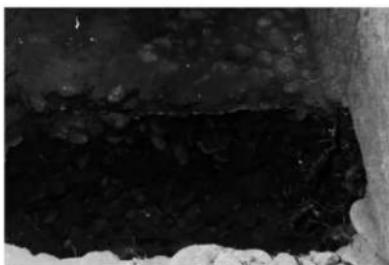
前庭部左側壁（昭和43年）



前庭部右側壁（昭和43年）



崩落した冠石（整備前 昭和43年）



石室内の基礎構造（昭和43年）



周堀より墳丘を望む（26トレンチ）



周堀北側立ち上がり（26トレンチ）



墳丘付近出土状況（26トレンチ）



周堀より墳丘を望む（27トレンチ）



周堀北側立ち上がり（27トレンチ）



角閃石安山岩剥片出土状況（27トレンチ）



宝塔山古墳墳丘北西コーナー



蛇穴山古墳全景（南より）



石室入口と薬師堂（大正時代か）



かつての蛇穴山古墳石室（昭和40年代）



蛇穴山古墳玄室



漆喰塗布の様子



玄室内棺台



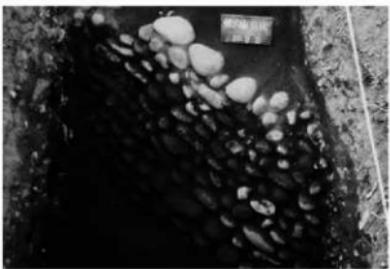
玄室東壁銘文



墳丘南西コーナー（25トレンチ）



1段目葺石（Fトレンチ 昭和50年）



2段目葺石（Bトレンチ 昭和50年）



2段目葺石（Bトレンチ 昭和50年）



周堀より墳丘を望む（23トレンチ）



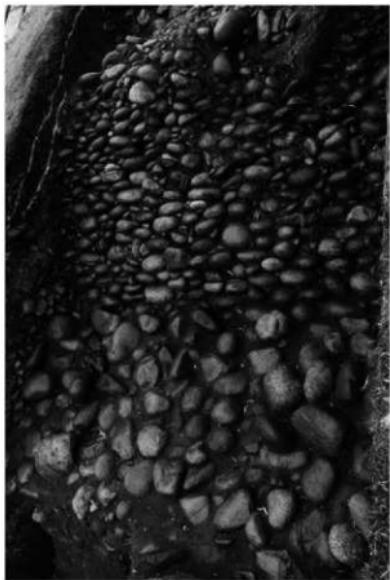
1・2段目葺石（23トレンチ）



3段目葺石（23トレンチ）



4段目葺石全景（23トレンチ）



敷石及び4段目外側葺石（23トレンチ）



4段目内側葺石（23トレンチ）



中堤内側葺石（21トレンチ 平成21年）



中堤外側葺石（22トレンチ 平成21年）



中堤北西コーナー（20トレンチ 平成21年）



前庭部調査状況（昭和50年）



前庭部遺物出土状況（昭和50年）



前庭部土層堆積状況（昭和50年）



前庭部床下土層堆積狀況

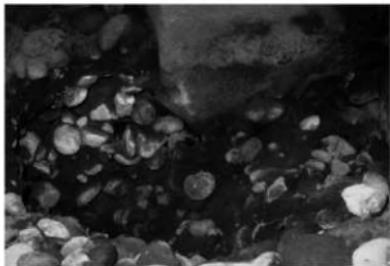


石室內西側床面（昭和50年）

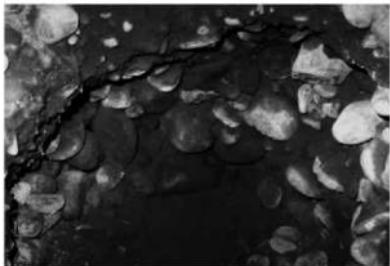


石室內東側床面（昭和50年）

蛇穴山古墳



石室内床下土層堆積狀況 1 (昭和50年)



石室内床下土層堆積狀況 2 (昭和50年)



溝状遺構土層堆積狀況 (23トレンチ)



填丘上石列 (23トレンチ)



周堀内石列 (25トレンチ)



薬師堂 (光巖寺境内)



蛇穴山弁天石碑

総社古墳群総括報告書

印刷 令和5年9月1日
発行 令和5年9月8日

編集 前橋市教育委員会
発行 群馬県前橋市総社町三丁目11-4

印刷 朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町67

